

---

# リバーシブル・アース

沙 亜竜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リバーシブル・アース

### 【Nコード】

N4306Y

### 【作者名】

沙 亜竜

### 【あらすじ】

アトリの会社「テラ・フェイカーズ」は神素しんそとおいう特殊な気体で地球を茶色いガス惑星に見せかけ、宇宙人の侵略から人類を守っていた。それは青く美しい地表を、あたかも裏返したかのように茶色く変えてしまうことから、「リバーシブル・アース」計画と呼ばれている。

そんなある日、アトリは町でホトトギスという少女に出会う。少々言動のおかしな女の子だが、なぜだかやけに気になり、アトリは休みの日には彼女と会うようになる。

やがて宇宙人が地球に近づき、リバーシブル・アース計画が発動されるのだが。

「ふう……」

ぼくは思わず、ため息をついていた。

「毎度のことだけど、疲れるなあ」

よいしょつ、と、リュックサックタイプのカバンを担ぎ直す。

「ま、ここまで来れば、あとちょっとだ。頑張ろう」

大自然に囲まれた清々しい朝の開放感からか、独り言にも拍車がかかる。

もっとも、ぼくは普段から独り言が多いと、みんなにも言われてたりするのだけだ。

周りには、色とりどりの木々や草花が生い茂り、ちようちよが舞い、鳥たちのさえずりが響き渡る。

東京からさほど遠いってわけでもないのに、完全な田舎の風景が広がるこの近辺。

秩父の山奥にある雛森町から徒歩でさらに山を登り、二十分ほどかけて、ぼくはこの場所にたどり着いた。

毎朝のことだとはいえ、さすがにちよつと、しんどい。

まだまだ若いつもりだけど、やっぱり体力は衰えているんだろうな。

ふと振り返ると、眼下には町並みが一望できる。結構な高さを登ってきたことの証だ。

ぼくは、優羽アトリ。

この春に大学を卒業して、新社会人となったばかりだ。

ついこのあいだまで、ぼくは東京の実家に住んでいた。

今も両親はその家で生活しているわけだけだ。

ぼくは就職先の関係で、今見下ろしているひなもりちょう雛森町に戻ってきた。

そう、戻ってきたのだ。幼稚園の頃まで住んでいた、この町に。

昔住んでいたアパートが、今もまだ残っていた。

ぼくたち一家が昔住んでいた部屋も空いていたから、ぼくは今、その部屋で暮らしている。

年季の入ったボロアパート。

他の部屋も、ほとんど空いてるみたいだったけど。

こんな状況で大丈夫なのだろうか？ 取り壊しとかはされないのだろうか？

そう心配になってくるほどだ。

ただ大家さんとしては、取り壊すつもりは毛頭ないらしい。

今でこそ何棟ものアパートを所有している大家さんだけど、最初の一棟だったというこのアパートには思い出がたくさん詰まっているのだらう。ずっと残しておきたいのだと話してくれた。

オンボロではあるけど家賃もすごく安いし、収入を得るためという目的よりは、撤去されないために誰かが住んでいてくれればいい、といった考えのほうが強いのかもしれない。

昔住んでいたアパートとはいえ、それももう十五年以上も前になるのだから、近所に住んでいた人たちのことなんて、ぼくはまったく覚えていなかった。

というよりも、当時住んでいた人たちはみんな、この町を出ていってしまったのだろう。

だから、べつに知り合いがいるわけでもない。

実際、雛森町はのどかな田舎町といった様子で、本当になにもない場所だ。

村ではなく町という扱いになっていただけあって、それなりに人もいるし、町の中心部には一応、商店街と呼ばれるメインストリートも存在している。

休みの日には買い物をしに行ったりもするけど、メインストリートという呼び方は似合わないかもしれない。

舗装もされていない土がむき出しになっている道の両脇に、木造平屋建ての店が軒を連ねる程度なのだから。

町の中心部でそんなありさまなのだから、観光スポットだとか、レジャー施設だとか、そんなシャレた場所がこの町にあるはずもなく。

結果、寂れた田舎町といった様相を呈しているというわけだ。

そんな山奥の町の片隅で、ぼくは今、ひっそりと生活している。

通勤先の会社は、今登ってきたこの山の上にある。

日本中央電力株式会社。

最大手の電力会社だ。

本社は東京の都心にあるのだけど、ぼくが勤めているのはここ、雛森支社。

……支社というよりは、研究所といった雰囲気なのだけど。実際のところ、昔は本当に研究所だったらしい。

そんな、山奥に建設された研究開発を行うための施設。そこでは働いている。

ぼくがこうして、毎朝時間をかけて山に登らなくてはならなかったのには、とある理由があった。  
社員寮に入ることができなかつたのだ。

雛森支社の近くには何棟かの社員寮が完備されていて、ほとんどの社員はそこから会社に通っている。

でも、ぼくはその申請をすっかり忘れていた。  
気づいて申請したときにはすでに遅く、部屋はもう空いていなかったのだ。

……つまり、自業自得というやつなのだけだ。

とはいえ、こうやって毎朝自然の中を歩いてくるのは、それなりに気持ちのいいものだった。

色とりどりの木々や草花が生い茂り、ちょうちよが舞い、鳥たちのさえずりが響き渡る。

そんな温かい風景に包まれる日々。

朝の日差しが、まぶしくぼくと周りの景色を照らし出す。

「今日は、いい天気だなあ。ちょっと暑くなるかも」

汗を拭いながら、ぼくは再び、独り言をつぶやく。

この自然を、ぼくたちは守らなければならない。そんな使命感すら湧き上がってくる。

いや、実際にぼくたちは、この自然を、  
そしてこの、太陽系第三惑星、青くて美しい惑星である地球を、  
守るべき立場に立っているのだ。

「ふう……」

山に登りきったときと同じように、ぼくは再び、ため息をつく。そしてそのまま、机にぐたぐたと突っ伏す。

会社までたどり着き、所属する部署のドアをくぐり、自分の席に座った、まさにそのタイミングだった。

山歩きの疲れによつて、業務時間が開始される前だというのに、このありさま。

社会人一年目にして、ダメダメな感じが溢れていると言わざるを得ない。

でもまあ、ぼくの所属しているこの部署なら大丈夫なはずだ。緊急事態なんて、そうそう起こるはずがないのだから。

ぐた~~~~ぐた~~~~。

ぼくは机に突っ伏しながら、疲れを癒す。

机の表面の冷たさが、なかなか心地よい。

「……つて、こら！ なに朝から、だらけきつてるのよ！」

突然耳もとから怒鳴り声が飛び込んできた。

でもぼくは、慌てず騒がず、その声に答える。

「ん〜、だつてさ〜、疲れるんだもん、ここまで来るの」

「そりゃまあ、毎朝町からここまで来てりゃあ、疲れるのもわかるけどさ〜。だからって、アトリはだらけすぎだよ。昼休みだけは、



超絶元気になるってのに」

「だってさ〜、この会社での楽しみっていったら、ご飯くらいしかないじゃん〜」

「そりゃまあ、この会社の食堂は超絶美味しいから、それもわかるけどさ〜」

怒鳴り声もだんだんとぼくの勢いに流されてしまったのか、のんびりとしたテンポへと変わっていく。

「そう思うでしょ〜?」

「うん、それもそうね〜」

いつのまにやら、その声の主も、ぼくの隣の机に突っ伏しているようだった。

ようだった、と表現しているのは、ぼくの視界からは彼女が見えないからだ。

彼女の机はぼくの右隣にあるのだけど、ぼくは机の左方向に顔を向けていた。

でも、見えなくても声の響きやら物音やらで、どんな状態なのかはだいたい予想できる。

彼女も彼女で、やっぱりだらけきつていえるだろう。

辻ゆりかもめ。

ぼくと同じく、今年入社したばかりの新人社員だ。

そして、ぼくの幼馴染みでもある。

とはいえ、幼稚園の頃に一緒だったというだけで、あまり記憶には残っていなかったのだけだ。

ぼくは幼稚園を卒園したあと、すぐ東京に引っ越した。

ゆりかもめのほうも、小学校低学年の頃に引越して、雛森町を出ていったらしい。

彼女もぼくと同様、この会社に入るということで、実家から出てきた。

ぼくと違うのは、しっかりと社員寮の申請をしていたことだ。

というわけで、彼女は会社から徒歩一分という近場にある社員寮に住んでいる。

社員寮は広い敷地の中に数棟の建物があつて、さらに食堂までも完備されているのだとか。

うーん、申請し忘れて入居できなかったことが、ものすごく悔やまれる。

毎朝の山登りで疲れなくて済むというのは、正直うらやましい。

……あれ？ それじゃあどうして、ゆりかもめはぼくと一緒になつて、机に突っ伏してるんだ？

ぼくは山登りで疲れたから仕方がないかもしれないけど、彼女はべつに疲れてなんていないはずだよね……？

ふと、彼女のほうを振り向く。

もちろん、机に突っ伏した頭が左向きだったのを、右向きに向き直したただけなのだけだ。

同じように突っ伏しているゆりかもめの顔が視界に映り込む。

目をつぶっている彼女は、化粧っ気もまったくない。それどころか、髪もボサボサなように見える。

机に突っ伏しているからという理由だけではなく、完全にはねていると思われる寝グセも、たくさんついているようだ。

おそらく、ついさっき起きたばかりで、急いで服だけ着替えて出

社してきたのだろう。

ぱつと見、結構可愛い感じの顔立ちをしているというのに、実にもったいない。

と、そんな彼女がパチツと目を開く。

「……………」

「……………」

思わず無言で見つめ合う、ぼくとゆりかもめ。

彼女の頬がほのかに染まっていくように見えたのは、気のせいだっただろうか。

「朝っぱらからお前らは、そんなだらけた格好で、なに見つめ合っ  
てんだか」

不意に頭の後ろのほうから声がかかった。

「あつ、セキレイ。おっはよ〜！」

「おはよ〜」

ゆりかもめの声に、ぼくも挨拶を重ねる。

彼女が名前を呼ぶまでもなく、誰が声をかけてきたのかはわかっていたのだけど。

「お前らは、まったく……。せめて、頭くらい上げたらどうだ？  
というかアトリ、こっちを見もしないなんて、失礼すぎないか？」

さすがに文句の言葉が飛んでくる。

「そうだよね〜。親しき仲にも礼儀ありだよね〜。でも、疲れてる

からさ〜」

「そうそう〜。疲れてるからさ〜」

ぼくの言葉に、今度はゆりかもめが声を重ねる。

「バカたれ！ だいたい、ゆりかもめは疲れてなんてないだろうが！ 寝疲れは、疲れてるうちに入らないんだぞ！？」

怒鳴り声は、主にぼくを通り越して、目の前にいるゆりかもめに向けられたものではあつたけど。

背後からぼくの目の前の彼女に対して向けられたその声は、もちろんぼくの耳にも痛いほどに響く。

「まったく……。落ち着いて寝てられないじゃんか〜」

「アホかつ！ 寝てるんじゃない！ もう始業のベルも鳴ったぞ！」

のそのそと身を起こすぼくに、素早くツツコミが入られた。頭をひっぱたく平手打ちを添えて。

「おおう！？ いつのまに！」

「あははっ！ あたしは、わかつてたけどね！」

「わかつてたなら、一緒になって寝てるんじゃない！」

「寝てたわけじゃないよ〜う！ 机さんと一体化してただけだよ〜う！」

「それを寝てるというんだ、ボケっ！」

「あうあうあう〜、セキレイが超絶いぢめるよ〜う！」

「いじめてない！ 教育的指導だ！」

なんとというか、朝からバカなやり取りだと思わなくもないけど。

というか、これで三人とも社会人だというのが、不思議なところ

でもあるけど。

そんな光景も、毎朝恒例といった感じだった。

この教育的指導とか言っている男は、春香川セキレイ。はるかかわ

指導なんて言って立場も上っぽい口調ではあるけど、ぼくやゆりかもめと同じ、入社一年目の新人だ。二年間フリーターをやっていたとかで、二歳ほど年上ではあるのだけだ。

初日にお互い自己紹介をしたとき、本人から気にする必要はないと言われたので、ぼくたちは普通にタメ口で話している。

始業のベルが鳴ったあとだというのにこんなバカ騒ぎをしていて、本当に大丈夫なのかというと、それは全然問題なかった。

ここには今、ぼくたち三人だけしかないからだ。

もちろん上司は存在する。

でもその上司は会議に出ることも多く、朝はほとんど部署にいないのだ。

もっとも、ぼくたちには資料を作成するという仕事を与えられているから、それを提出する必要はあるのだけだ。

ただ、ぼくたちの一番の任務は、いわば緊急事態に備えて待機すること。だから普段はゆっくりしていても支障はないのだ。

……などと余裕をぶちかましていたからだろうか。

そのとき、緊急事態を告げるサイレンが、けたたましく鳴り始めた。

鳴り響くサイレンの音。

そして、部署の一面の壁すべてを使ったサイズ的大型モニターに、上司の顔が映し出される。

「あなたたち！ 出番よ！」

「はいっ！」

ぼくもゆりかもめもセキレイも、さっきまでバカ騒ぎしていたことなんておくびにも出さずに、ハキハキとした答えを返す。

三人の机の上には、すでにキーボードとモニターが用意されている。

「担当各地の風向き、気圧、天気など、異常がないかの確認、急いでね！」

「了解！」

素早くキーボードを叩き、ネットワークでつながれた世界各地にある観測所の情報を引き出す。

異常があれば色が変わって表示されるそれらを目視。

すべての場所で異常がないことを確認していく。

ひとりあたり、百ヶ所以上の担当場所が与えられているそのデータを、どんなに遅くても五分以内に処理する必要があった。

通常は三分以内に終わらせる。

すべての観測所の確認が終わると、実行部隊の出番となる。

この研究所を含む、世界各地の数ヶ所にある施設から、とある気

体を噴出させるのだ。

気体の噴出後、世界各国で緊急のアナウンスが流れる。日本全国に流されるアナウンスも、この会社内のアナウンス室で行う。と同時に、各テレビ局にテロップで緊急ニュース速報を流してもらおうことになる。

世界各国に関しては、それぞれの国に任せることになるのだけど、ただ、中心となっているのはこの日本。すべての国の状況が、データとしてこの会社を集められることになっている。

そしてそれらすべての責任を担っているのが、表向きは日本中央電力の雛森支社ということになっている、この施設だった。ともかく、ぼくたち三人は担当するデータの確認を終える。

「アトリ、確認終わりました！」

「セキレイ、確認終了です！」

「ゆりかもめも、問題ありませんでした！」

三人が声を合わせて報告する。

モニターの向こうに映し出されている上司も、同じように担当場所の確認をすでに終え、ぼくたちの報告を待っていた。

「よしっ！ 各人はそのまましばらく待機！ これより、リバーシブル・アースを起動します！」

上司の声とともに、サイレンの音が変わる。

それは、リバーシブル・アースが、準備フェーズから実行フェーズへと移行したことを表していた。

上司からの待機命令を受け、ぼくたちは一瞬だけ息をついていたけど、それで気を抜いてしまうわけにはいかない。

リバーシブル・アースが実行され、気体の噴出が始まったら、各地での気体の広がりや濃度といったデータが次々と送信されてくる。それらを、準備フェーズのとき同様、異常がないか逐次確認していかなければならないのだ。

大型モニターに映し出されている上司の顔にも、焦りの色がうかがえる。

実際に緊急事態が発令され、リバーシブル・アースが実行されるのは、それほど頻繁なわけではない。

でも、地球の未来がかかっている、重要な任務なのだ。だからこそ、失敗は許されない。

バカ騒ぎしていたぼくたちが一瞬にして静まり、素早く席に着いて真面目に任務に取り組んでいるのも、その責任の重大さがわかっているからだ。

もしぼくたちが失敗すれば、地球は侵略されてしまうのだから。

部署の片隅には、テレビも用意されていた。

それにより緊急時に流される速報を確認できるようになっている。なにかのニュース番組が放送されている画面上部に、ニュース速報の文字が入った。

『リバーシブル・アースが発動されました』の文字が表示されるとともに、番組のアナウンサーにも情報が届いたらしく、

「臨時ニュースをお伝えします」

と前置きをしたあと、臨時ニュースの内容が読み上げられた。



「先ほど、超紫外線警報が発令されました。リバーシブル・アースの発動により、しばらくのあいだ、昼間は空が七色に輝くことになります。なお、警報の解除時期は未定ですが、状況がわかり次第、続報をお届け致します」

スーツを着た男性アナウンサーが、落ち着いた声で緊急事態を伝え終えた。

まったく慌てた様子を見せないのは、さすがプロといったところか。

アナウンサーが読み上げた臨時ニュースにもあった『リバーシブル・アース』とは、世界各地にある施設から特殊な気体を噴出することで、地球全体を覆い尽くす計画のことだ。

近年、太陽の膨張に伴い、『超紫外線』と呼ばれる人体に悪影響を与える光が地球にまで届くようになった。

少量であれば浴びても問題はないのだけど、このところ急激に強くなり、頻度も増してきた超紫外線。

事態を重く見た各国の研究機関で、対策を考え始めた。

研究は難航したものの、やがてひとつの有効な手段が発見される。

それを発見し、実用段階にまで開発したのが、日本中央電力の所有する施設だった。

そのため、リバーシブル・アースと名づけられた計画は、ぼくの勤めるこの会社が主導してすべてを取り仕切っている。

地球を覆い尽くす特殊な気体　　神素しんそと呼ばれるその気体は、空気よりも軽い。

施設から噴出された神素は上昇していき、成層圏の手前で止まる。

神素は温度の低いほうへと進む性質も併せ持ったためだ。

成層圏ではオゾン層が太陽光を吸収して温度が上がっているらしく、そこで神素の上昇が止まり、溜まっていく。

拡散性も強い性質のため、成層圏の手前に溜まった神素は地球の自転と相まって急激に広がっていき、やがて地球全体を包み込む。

その神素が超紫外線を吸収し、安全な光だけを地表に通してくれるのだ。

神素には、くすんだ色の光だけを反射する効果もある。その影響で、神素が広がった状態の地球を宇宙から見ると、地味な茶色っぽい惑星に見えるらしい。

普段は美しい青色をしている地球が、正反対のくすんだ色の惑星に様変わりすることから、地球表面を裏返したような様子をイメージして、「リバーシブル・アース」と名づけられた。

反対に、くすんだ色の光以外は普通に通すものの、神素の粒子によって乱反射が起こってしまうため、地表から見上げると空は七色に輝いて見える。

明るさとしては普段と大差ないほどではあるけど、空が七色に輝いているとさすがに人々は驚いてしまうだろう。

というわけで、リバーシブル・アースの発動は、全世界的にアナウンスすることになっている。

一般的に認識されているのは、以上のような感じなのだけでも、実は。

神素によって有害な超紫外線を吸収させるため、という根本的なその理由からして、まったくのデタラメだった。

神素という気体によって、宇宙から見た地球がくすんだ色に見えるようになる。

それは事実だった。

超紫外線という人体に有害な光を防ぐため、というのが、真つ赤な嘘なのだ。

では、どうしてそんなことをする必要があるのか。しかも、嘘のアナウンスを流してまで。

その理由はただひとつ。

地球の平和を守るためだ。

いったいそれは、どういうことなのかというと。

地球のような美しい惑星は、宇宙ではごく稀にしか存在しない、奇跡的な事例なのだという。

そんな美しい惑星の存在を奴らが知ってしまうと、地球を手に入れようと侵略してくる可能性がある。

それを未然に防ぐため、地球は美しい惑星ではないということを偽装する。

リバーシブル・アースは、そのための計画だった。

そう、ぼくたちの本当の任務は、地球を美しくない惑星だと見せかけ、宇宙人の侵略から守ることなのだ。

地球をくすんだ色の惑星だと見せかける使命を持った、ぼくたちの組織。

日本中央電力株式会社の雛森支社であることは、紛れもない事実

だ。

ただその業務内容は、一般には絶対に秘密となっている。

宇宙人の存在は、昔から噂されたりはしていた。

広い宇宙に無数に存在する恒星が、それぞれ太陽のように自ら光と熱を放って存在しているのだから、その周りに地球と同じような環境の惑星があったとしてもなんら不思議ではない。

仮に地球での生命の誕生が奇跡的な事例だったとしても、無数にある恒星それぞれの周囲に複数の惑星が回っていると考えるなら、そのうちのどこかに生命が誕生してもおかしくはないだろう。

そしてそんな中に、地球よりも文明の進んだ生命体が生活している惑星があったとしても、とくに驚くべきことではないと言えるはずだ。

十数年前、ついに宇宙人の存在を極秘裏に発見したのが、当時は雛森研究所と呼ばれていた、この日本中央電力の雛森支社だった。

その頃、宇宙を研究することで新たな発電方法を開発できるのではないかと考え、雛森研究所では、宇宙観測を中心に研究が続けられていた。

大型の天体望遠鏡を使い宇宙を調査していた研究員たちが、あるとき不可解な動きをする影に気づく。

詳しく調べれば調べるほど、それは宇宙人の乗る宇宙船に違いないという結論が導き出されていった。

さすがに半信半疑ではあったものの研究は続けられ、やはりそれは宇宙船だということが確認される。

ここはぜひ、宇宙人と友好関係を結ぶべきだ。そんな意見も出た。でも、危険だと反対する意見もあり、どうするべきか対応に困っていた。

今のところ、宇宙人たちは遠く離れた場所にいる。まだ地球の存在にも気づいていないと思われた。

とはいえ、いつ地球に気づいてしまうかわからない。

場合によっては侵略を開始するかもしれないという危険性を考えると、時間的な猶予はなかった。

宇宙人発見のニュースは、会社から日本政府に報告されていた。

それを知った政府は、混乱を避けるため一般には公開しないという選択肢を選んだ。

ただ、各国の首脳陣には連絡を入れ、国際的に対策を講じる準備をしていた。

そんな折、雛森研究所でさらなる研究成果が出る。

それが、「神素」という新たな気体の発見だった。

この神素を使って地球全体を覆ってしまえば、宇宙人に存在を気づかれても単なるガスの惑星にしか見えないから、侵略されることもないはずだ。

そういつた憶測のもと研究された、この神素という気体を使った計画を、政府や各国の首脳陣は受け入れた。

日本の研究施設から気体を噴出するだけでは、地球全体に行き渡らせることまではできない。

というわけで、世界各国に神素を噴出できる施設が建設された。

また、神素に危険は少ないものの、気候などの状態によっては過剰反応してしまい、発光や発熱を引き起こすといった性質もあった。そのため、人の多い都市などには必ず、細やかなデータを観測する機械を設置するようにした。

それらの設備を整え、数年前から活動しているのが、ぼくの勤め

る日本中央電力雑森支社なのだ。

不意に、緊急事態を知らせるサイレンの音が、けたたましい音から静かな音へと変わる。

サイレンは、準備フェーズから実行フェーズに移る際にも変わっていた。

その実行フェーズの段階で、危険度レベル1の状態となる。そして危険度が高まるに従って、レベル2、レベル3まで、サイレンの音で知らせるようになっていく。

だけど、危険度が高まったことを知らせるサイレンは、レベル1よりもさらに緊迫感を増した激しい音となる。

今鳴っているのは、そういった種類のサイレンではない。

この音は、危険が去ったことを知らせ、後始末を開始するように促す、終了フェーズのサイレンだった。

宇宙人たちの乗る宇宙船が遠ざかり、地球が発見される危険性はなくなったのだ。

終了フェーズへの移行に合わせて、すでに神素の噴出も止められているはずだ。

神素が上空に昇っていく速度は極めて速い。

ぼくたちは素早く、各地の観測所のデータを確認する。

もう、どの観測所からも、神素の成分は検出されなくなっていた。

成層圏の手前に溜まっている神素も、拡散性が高いことと太陽光

によって分解されることから、すぐに消えてなくなってしまう。  
だからこそ、実行フェーズ中には神素を噴出し続ける必要がある  
のだ。

おそらく数時間後には、普段どおりの青空が拝めることだろう。  
こうして、ぼくたちの今回の任務は、無事に終了した。

「お疲れ様〜！」

ぼくたちのいる部署のドアを開けて、女性が入ってきた。

それは、ついさっきまで大型モニターに映し出され、指示を出していた女性だった。

ぼくたちの直属の上司ということになる、この部署の部長、古女<sup>ふるめ</sup>ヒバリさん。

メガネをかけて髪を首筋の後ろで束ねているため、ちょっと地味な印象を受ける。

落ち着いた雰囲気だからなのか、三十代半ばくらいに見られることが多いけど、まだ二十六歳らしい。

……年齢を詐称していなければだけど。

なんて言ったら、メガネ越しの鋭い瞳でギロリと睨まれてしまうかな。

若くして部長という立場にいるというのも、年上に見られてしまう原因になっているのだろう。

気にすることもないと思うのだけど、彼女は「古女」という名字を名乗りたがらない。

年齢に敏感になっていることを考えれば、それもわからなくはないのだけど。

「ヒバリさんも、お疲れ様です」

セキレイが、礼儀正しい部下を演出しているのか、とても爽やかな顔でヒバリさんの言葉に答える。



ぼくやゆりかもめの前では、真面目っぽいことを言うわりに、結局は一緒になってバカをやっているというのに。

上司の前でまでバカなことをしてたら、サクッとクビになってしまいかもしれない、という思いがあるのかもかもしれない。

でもこの会社、というかこの部署の場合、大丈夫だとは思うのだけだ。

「今回はすぐに宇宙人警報が解除されて、よかったね」

ヒバリさんに続いてもうひとり、男性がこの部署のドアをくぐって入ってきた。

水瀬雷鳥さん。

彼ももちろん、この部署の一員だ。

ヒバリさんと同期の人で、この部署の副部長ということになっている。

とても優しい感じの声で語りかけてくるのが印象的だった。

基本的にいつでも微かな笑顔を浮かべているように見える。おそらくは、それが地顔なんだろうけど。

雷鳥さんの言う「宇宙人警報」というのは、一般の人には「超紫外線警報」として発令されている警報と同義だ。

一般の人たちには宇宙人の存在を明かしていない関係上、そういう定義となっていた。

社内で話す場合には、正式な「宇宙人警報」という呼び名を使う場合が多い。

ところでぼくたちの部署のメンバーは、ヒバリやら雷鳥やらゆりかもめやら、なにやら鳥の名前ばかりだけど、それは世間的にも珍しいことではない。

一時期、数年間くらいのようなけど、どういったわけか、鳥の名前をつけるのが流行った時期があった。

ちょうどヒバリさんたちが生まれた頃から、ぼくたちが生まれた少しあとくらいまでだろうか。

その期間に生まれた子供は、全員ではないものの、鳥の名前やそれに近い名前がつけられている人が多いのだ。

セキレイやアトリも、もちろん鳥の名前だ。

大空に羽ばたいてほしいという願いを込めて、ということなのだと、両親からは聞いたことがある。

そのブームのもととなったのは、数年間にわたって続編も製作された大人気ドラマだったというのだから、日本国民、テレビ番組に流されすぎだろうと思わなくもないのだけど。

そんな鳥の名前に、なんとなくコードネームっぽいイメージがあるからなのか、社員がお互いを呼び合う場合、名字ではなく、それぞれの名前で呼ぶのが通例となっていた。

ぼくたち新入社員三人を含めて、ヒバリさんと雷鳥さん、以上五名がこの部署の人員だった。

大きな会社のはずなのに、やけに人員の少ない部署となっているのには理由がある。

この雛森支社は特殊な役目を担った研究施設のため、細かく役割分担されているからだ。

ぼくたちの所属するこの部署の名前は、「第三十八対策執行部」となっている。

そして、対策執行部は全部で三十八ある。つまり、ぼくたちの部署は末番ということだ。

だからこそなのか、一番少人数で、一番若い部長によって統率さ

れている。

この少人数制というのは、ぼくたちにとっても居心地がよかった。……上司のふたりが会議で部署を出たら、だらけ放題だから、というのもないわけじゃない。

確かにさつきみたいなのバカ騒ぎを毎日のように繰り返しているぼくたちではある。

だけど、それだけではなくて、ヒバリさんや雷鳥さんも含めて、楽しい職場になっていると常々思っていた。

会社側としては、しっかり目の行き届く範囲の少人数で指導する、という意味合いもあったのだろう。

そういった割り振りになっているのは、この雛森支社の所長さんの意向のようだ。

「おや、みんなちゃんと集まっていますね」

にこやかな笑顔を振りまきながら会話に割り込んできたのはその所長さん、しんせんじみかど 神仙寺御門さんだった。

のほほんとした言動で、目尻のシワが穏やかな雰囲気を与える、気のいいおじさんといった様子。

四十代前半らしいのだけど、その落ち着きぶりからは、すでに六十過ぎだと言われても誰も驚かないほどだ。

雛森支社なのに「所長」という肩書きなのは、もともとここが、雛森研究所という名前だった頃の名残だ。

今でもまだ、研究所と呼ばれることも多い施設だし、山奥にあつて様々な研究開発用の建物が並ぶこの支社の雰囲気を考えたら、研究所という呼び名のほうが合っているとと言える。

それはともかく、所長はこうやって頻繁に、各部署に足を運んでいた。

社員たちがしっかりと働いているか見回りに来る、というよりもコミュニケーションを大切にしているということなのだろう。

いつもこうやって、しばらくのあいだ優しい笑顔を浮かべつつのんびりとお喋りに興じる。そしてひとしきり喋ると、また次の部署へと向かう。

各部署にはあらかじめ「所長席」が設けられているくらいだから、そうやって各部署を回るのも仕事のうちだと考えているのかもしれない。

もっとも、普段は来客用の席として使っていることになっているので、所長さん専用の席というわけではないのだけど。

でも、ぼくたちの所属するような末端の部署の場合、来客もほとんどないし、ほぼ所長さん専用と言ってもいい。

上司や所長さんを含め、こんな感じでなんとなくのんびりとした雰囲気に含まれている雛森支社の第三十八対策執行部。

だからこそ、ぼくはこの会社が好きなのだ。

と、不意に正面の大型モニターに映像が映し出された。オペレーターの女性が、慌てた声を上げる。

「所長、こちらにいましたか！ 報告します！ なにかよくわからない物体が、雛森山へ落下してきています！ 今から、そちらのモニターに映像を送ります！」

所長さんの顔からはフツと笑顔が消え、鋭い眼光でモニターを見つめ始める。

素早く用件を告げたオペレーターの言葉が終わると同時に、モニターの映像が切り替わった。

カメラが超望遠で捉えた映像のようで、かなりぼやけてはいるものの、青空を背景に猛烈な速度で落下してくる物体が確認できた。燃え上がっているらしく、その物体がなんなのかは、はっきりとはわからない。

そしてその物体は、山の中へと落下した。

オペレーターの報告にもあったとおり、そこは雛森支社がある雛森山だった。

ただ、衝撃音や振動はない。

雛森支社のすぐ近くではなく、どうやら山の中腹辺りに落ちたようだ。

「あの映像からではよくわからないけど、さほど大きな物体ではなかったようね」

「そうですね。ある程度の大きさがあるなら、衝突で山が削られたりするはずですし。そういった形跡は、映像からは見られなかった」

ヒバリさんと雷鳥さんが分析の言葉をこぼす。

ぼくは、ただ呆然とその声を聞いていることしかできなかった。

「……単なる隕石でしょう。振動もなかったようですし、山にぶつかるギリギリで燃え尽きた、といったところでしょうか」

所長さんも険しくなっていた表情を緩め、普段どおりの落ち着い

た声でそう予想する。

「結構多いものなんだよ、隕石が落下してくるといのはね。宇宙を観測している施設では、ごくありふれたことなんだ。ここ最近あまり見かけていなかったけどね」

雷鳥さんがぼくたちに解説を加えてくれた。

新入社員であるぼくたちには状況が理解できず、思わず目を丸くしていたからだろう。

「念のためヘリを回して落下地点を確認してみてください。もし力ケラでも山の中まで達していたら、燃え上がっていましたし、山火事になる危険性もありますから」

「はい、わかりました」

素早く指示を出す所長さんに、オペレーターも迅速な応答を返す。さすがに手馴れた対応だ。

「それでは、わたしはこれで失礼しますよ。みなさんも、気を抜きすぎないようにね」

所長さんは軽やかに立ち上がると、部署を出ていった。

「ふう、それじゃ、通常業務に戻るわよ」

ヒバリさんの号令により、ぼくたちは通常業務に戻る。

といっても、パソコンを使って資料のデータを整理するとか、その程度のデスクワークなのだけど。

ぼくはキーボードを叩きながら、のんびりと仕事をこなしていく。

思わずあくびも出てしまってものだ。隣ではゆりかもめも同様にあくびをしていた。

そんなぼくたちの様子を見ても、ヒバリさんは諦めているのか、とくに注意の聲が飛んできたりもしない。

諦めているというよりは、いざというときにしつかりと仕事ができれば、それ以外の時間についてはうるさく言わない、というスタンスなのだろう。

というわけで、上司がいてもいなくても、結局ぼくたちがだらけきっているのは変わらないのだった。

「さてと、今日はなにを食べようかな」

ぼくは寂れた商店街をのんびりと歩いていた。

今日は休日だから、仕事は休みだ。

会社のある山道を歩く必要もなく、朝というよりは昼と呼ぶべき時間に目を覚まし、ぼーっとしたまま着替えて外に出てきた。

緊急事態がいつ起こるかはわからないから、あまり遠出はできない。

もつとも、この町からだ会社まで三十分はかかるし、緊急を要する場合には間に合わないのだけだ。

それは会社側もわかっているだろうし、どうにかして寮に部屋を用意してくれればいいのに。

つつい不満が口をつく。

とはいえ、相部屋になるのも嫌だった。

そもそも、寮の部屋はひとりで暮らすにも狭いと、セキレイは言っていたし。

ま、休みの日にまで会社のことなんて、考えないほうがいいな。

ぼくは頭を切り替える。

基本的に自炊ができないぼくは、食事を外食かコンビニで済ませることが多かった。

木造建築がほとんどの静かな商店街ではあるけど、そんな中に一軒だけ、小さいながらもコンビニがある。

こんな田舎町だと、外食してもリーズナブルな値段だったりする



のだけど、パンとかおにぎりとかを買っておくと、小腹がすいたときに便利だ。

とりあえず今日は、いつもの食堂で朝兼お昼を食べてから、コンビニでちょっとだけパンと飲み物でも買っておこうかな。

そう考えて歩いていると、人通りのほとんどない道の脇に、女性の姿を目にする。

女性、というよりは、女の子と言ったほうがいいかもしれない。

見かけたことのない子だな。

なんとなく彼女に目を向けながら歩くぼく。

彼女はぼくがいつも行く食堂の前で、サンプルウィンドウにへばりつくようにしながら、その中を見ているようだった。

あの子も、この食堂で食事をするつもりなんだな。

そう思いつつ、ぼくは食堂の引き戸に手をかけようとして

ドサリッ。

突然なにかの音がすぐ横から聞こえた。

振り向くと、さっきの女の子がぐったり倒れていた。

「うわっ！ キミ、大丈夫!？」

彼女のそばにしゃがみ込み、肩に手をかけて揺すってみる。

見たところ、十代後半といったところだろうか、なかなか可愛らしい印象を受ける女の子だった。

それに、倒れているから余計にそう感じるのか、すごく小さい。

軽く触れた彼女の肩は、強く揺するだけで壊れてしまいそうな、そんなふうですら思えた。

肩を揺するぼくの存在に気づいたのだろう、彼女は微かに顔を上げる。

ぼくを見つめるその綺麗な澄んだ瞳に、吸い込まれてしまいそうな錯覚に陥る。

と、彼女は震える声で、こう言った。

「お……おなか、すいた……」

ガツガツガツガツ、ぱくぱくぱくぱく、じきゆじきゆじきゆじきゆ  
ゆ、もぐもぐもぐもぐ。

「ん……む……おい、ひい……くちや、……いき、かえつ……ぴち  
や……」

揚げたカツやら千キャベツやらご飯やら味噌汁やらを、それほど大きくないはずの口の中へと次々に押し込みながら、女の子はジャンボカツ定食（三百八十円）をたいらげていく。

「いらら、食べてるときに喋るなんて、はしたないよ」

思わずお母さん染みたセリフだって飛び出してしまうってものだ。食べるのに夢中で、まったく聞いてくれないかもしれない。そう考えながらではあったけど。

そんなぼくの言葉がすっかりと聞こえていたのだろう、一瞬だけ視線をぼくのほうに向けた彼女は、

「……………むくつ……………!?」

と、うなり声を上げたかと思うと、

「ゲホツ、ゲホツ、ゲホツ！」

思いつきり咳き込んだ。

その勢いで、口に含んでいた揚げたカツやら千キャベツやらご飯つぶやら味噌汁やらが、そこかしこに飛び散る。

ぼくの顔面やら服やらぼくの注文したジャンボカツ定食やらにも、飛び散った物体がくつついたりしてゐるし……………。

「うあつ！ まったく、もう……………、落ち着いて食べなよ。ジャンボカツ定食は、逃げたりしないんだから……………」

「ゲホツ、ゲホツ！ お前が急に、話しかけるからだわさ！」

文句の声を上げるぼくに、そんな自分勝手な反論を返してくる女の子。

「ご飯をおごつてあげているというのに、この態度はいったいどういうことなのやら。」

ま、つまり、こつこついう子なんだな、この子は。そう結論づける。

「……………はいはい、ま、落ち着いて食べな」

諦めたぼくは、そう締めくくった。

ガツガツガツガツ、ぱくぱくぱくぱく、じきゅじきゅじきゅじきゅゆ、もぐもぐもぐもぐ。

そして再び、彼女の豪快な食べっぷりが目の前で展開されるのだった。

「ふう、美味しかったただわさ！」

「……それはよかった」

さすがにあんな言葉を受けていれば、こちらもぶっくらぼつな対応になってしまう。

目の前で豪快に食べ続ける彼女を見ていて、それだけで食欲も削がれてはいたけど、もったいないし自分のジャンボカツ定食はぼくもたいらげていた。

彼女が咳き込んで飛び散ったカツやらご飯つぶやらの残骸をよけながら。

食堂のドアを開けて、ぼくと女の子は外に出る。

「それで、キミはどうしてこんなところで、おなかをすかせて倒れたりしてたの？」

とりあえずは元気にはなっただけだけど、状況がわからないままなのは気になる。

ということではくは質問してみた。

なんとというか、この辺りでは珍しいと思うけど、もしかしたら家出少女なのかもしれないし。

「キミじゃないわさ。あちきは、ホトトギスだわよ」

「あつ、ごめんね。ぼくはアトリだよ」

文句を向けてくる彼女に、ぼくは反射的に名乗り返していた。

「あちきが倒れてたのは、その……たまたま持ち合わせがなかったからだわさ！」

続けられた彼女の答えに、ぼくの心配は募る。

この子、ほんとに家出少女だったりするのだろうか？

そんなぼくの視線を感じ取ったからか、ホトトギスと名乗った女の子は少々慌てた様子で、

「あゝ、急がないとただただわさ！ それじゃ、あちきはこれにて！ アトリ、ご飯、ありがとでしたわさ！」

それだけ言い残すと、トタトタと覚束ない足取りで走り去っていった。

喋り方も行動も含めて、とっても変わった女の子だったけど。

でもなんというか、すごく危なっかしくて、思わず手を差し伸べてあげないと、なんて気になってしまっただった。

うーん、やっぱりぼくってちょっと、お母さん染みているのかもしれないな。

ぼくはなんとなく、このあいだのホトトギスという女の子のことが気になっていた。

とっても危なっかしい子だったから、お母さん染みだ心配の念からなのだろうと、自分では分析しているけど。

ともかくそんな感じでぼくは、入社してきて早々、自分の机に頬づえをつきながらぼーっとしていた。

いやまあ、普段からぼーっとしているのは確かなのだけど。

「アトリ、今日もだらけきってるぞ」

「そういうゆりかもめだって、だらけきった声だけどね」

隣の席では、ゆりかもめがぼくと同じように、頬づえをつきながらぼーっとしている。

彼女の場合はぼくとは違って、考えごとではなく、単純に寝起きだからなのだろう。

いつもどおり彼女の寝グセのついた髪の毛が、開け放った窓から入り込んでくる風によってゆらゆらと揺れていた。

「まったく、お前らは……」

セキレイから、ため息まじりの言葉が向けられる。

毎朝恒例のごくありふれた光景だった。

と、突然サイレンが鳴り響いた。

けたたましいサイレンの音は、ぼーっとしたぼくの頭を現実に戻す。

「うきゃっ！ こないだあつたばかりなのに、また緊急事態だなんて、超絶ありえないよ〜う！」

ゆりかもめのボヤキ声が聞こえてくる。

前回からまだ数日しか経っていないというのに、こんな早く次の警報が発令されるのは確かに珍しいことだ。

でも、いつ起こるかわからないのが緊急事態ってものなのだし、ぼやいていたって仕方がない。

「ほら、ボサツとしてないで！ 出番よ！」

凜とした大声とともに、前回と同じく、大型モニターにはヒバリさんの顔がアップで映し出された。

必要以上にカメラに近づいているのか、彼女の顔は画面いっぱいに映っている。

大型モニターにドアップだから、肌の細かなくすみなんかまで、見えてしまっているのだけど……。

そんなことを言ってしまったら気を悪くするだろうから、ぼくは絶対に口にしない。

もっとも、あとで気づかれたら、知ってたのに教えなかったのね〜！ と暴れられてしまうという可能性もある。

ま、そうならそうなら、どうにかしてなだめればいいるらう。

ともかく、今は任務に集中しないと。

このあいだと同様、ぼくたち新入社員三人がキーボードを操作して、それぞれの担当場所を確認していく。

『準備OKですっ！』

三人の声が、ぴったり重なった。

「了解！ これより、リバーシブル・アースを起動します！」

ヒバリさんの声に合わせて、サイレンの音が変わる。実行フェーズへと移行したのだ。

と、そのすぐあと。

さらに音が変わった。

前回最後に鳴り響いた、終了フェーズの静かなサイレンとは明らかに違う、激しく緊迫感のある音。

そう、それは危険度が高まったことを示すサイレンだった。

すなわち、いきなりレベル2の危険度へと突入してしまったのだ！

「わっ！？ なによこれえ〜？」

「レベル2だよ、落ち着いて！」

焦りまくった声を上げるゆりかもめに、セキレイが的確に状況を伝える。

だけど、セキレイのその声も、かなり上ずって焦りを含んでいた。そしてぼくは、声を発することすらできない。

この日本中央電力の雑森支社に入社して以来、レベル1以外の状況なんて、初めての経験だったのだ。それも当然の反応と言えるだろう。

レベル2といえば、すぐにでも地球の存在を感知され、宇宙人たちが襲来してくるかもしれない、といった危険度になるのだから。

なお、レベル3になると、すでに宇宙人が地球を目指して侵攻を



開始した場合と定められている。

そうなってしまうたら、地球をくすんだ色にしてごまかすというリバーシブル・アースなんて、なんの意味も成さないだろう。

つまり、レベル2のうちどこにかしなれば、地球の未来はな  
いと言っても過言ではない。

緊張で汗が滝のように流れ出す。

春先としては暑すぎる今日の陽気も、それに拍車をかけていた。

もちろん社内には空調設備がある。

でも、宇宙人警報が発令され、リバーシブル・アースが起動すると、神素を噴出する装置のために施設内の電力の90パーセント以上を消費してしまう。

そのため、リバーシブル・アースの起動中には、空調がほとんど効かない状態となってしまうのだ。

春や秋なら耐えられるだろうけど、真夏や真冬だと、かなり厳しい状況になると考えられる。

ぼくたち新入社員はまだ、そんな厳しい状況を体験してはいないのだけだ。

真冬ならカイロとか、真夏ならカキ氷とか、用意されたりするのかなあ……。

ぼくがそんなふうに妄想に浸っていると、ヒバリさんからの叱責の聲が飛んできた。

「こら、アトリくん！ ポケッとしなさい！」

「は……はいっ！」

慌ててぼくは目の前のモニターに映し出される情報に集中し、キーボードを操作する。

地球の未来がかかっているのだ。

ぼくがぼーっとしていたために地球が侵略されてしまった、なんてことのないように、しっかり仕事をしないと。

そんなことを考え、余計に重苦しいプレッシャーを感じてしまっていたぼく。

「こら、アトリくん！ 緊張しすぎ！ 手が震えてるぞ！」

再びヒバリさんからの叱責を食らう羽目になるのだった。

「うーん、状況はこう着状態に入ったわね」

バリボリ。

ヒバリさんが、うま 棒を食べながらつぶやく。

こんな時間にそんなものを食べてたら、太りますよ。

なんてことは、口が裂けても言えない。言ったら地獄を見ることになる。

ヒバリさんと雷鳥さんは、リバーシブル・アースが安定したところで、第三十八対策執行部に戻っていた。

そのあとも緊迫した状態が続き、結局レベル2の状態は解除されないまま、すでに終業時間をはるかに越えている。

もう夜もすっかり更けてきていた。

「仕方がないわね。あなたたちはもう帰っていいわ」

「気をつけて帰るんだよ」

ヒバリさんの声に合わせて、雷鳥さんも言葉をつなぐ。

「はい……でも、ヒバリさんたちは……」

ぼくは遠慮がちに答える。

「ふふつ。もちろん、泊り込みね。ま、仕方がないわ。立場上、つてやつよ。でも明日あんなたちが出勤してきたら、少しゆっくりさせてもらうから、今日はしっかり休むのよ」

そう言ってくれたヒバリさんの声からは、その笑顔とは裏腹に、  
渋々ながらという様子がありありとうかがえた。

仕事に情熱を燃やす真面目なヒバリさんでも、泊まり込みはさすがに嫌なのだろう。

ぼくは家まで結構歩くことになるし、会社の仮眠室なんか泊まるといふ選択肢だって考えられたけど、緊迫した現状を考えれば泊り込みの社員が使う可能性も高い。

ここはヒバリさんの言うとおりにするのが、最良の選択だと思えた。

休むときにはしっかりと休む。それは社会人としての務めでもあるのだ。

「それじゃあ、お先に失礼します」

ぼくたち新入社員三人は素早く帰り支度を整え、そろそろ会社を出ていく。

社員寮に帰るだけのゆりかもめとセキレイに別れを告げ、ぼくはひとり、山道を下るのだった。

とりあえず、夕飯も食べていなかったぼくは、コンビニでインスタントラーメンを買って帰る。

カップラーメンでもよかったのだけど、五袋セットのインスタントラーメンを買うほうが経済的なのだ。

中に入れる具も、ほとんどいつもタマゴだけと、ちょっと寂しい

けど。

自分なりのこだわりとして、最初にどんぶりに水を入れて、それを鍋に移す。

きつちり一杯分の水で、スープが薄すぎず濃すぎず、確実にちよつとよく仕上げられるのだ。

お湯が沸騰し始めたらいんスタントラーメンを鍋の中に入れ、箸で適度にほぐす。

そして時間を見ながら、好みの固さに麺を茹で上げていく。

麺がある程度やわらかくなってきたタイミングで、タマゴを落とす。

最終的にタマゴが半熟の状態となるように、上手く調節するのがポイントだ。

それを全部どんぶりに注ぎ込めば、ひとり分のラーメンの出来上がり。

べつに威張れるようなものでもないけど、麺の固さとタマゴの半熟加減に、なんとなく満足感を得られる。

……もっともそれ以上に、空しさのほうで胸がいつぱいになるのだけ。

ともかくぼくは、自分の住んでいるアパートへと戻ってきた。

「ぶっつ」

いくらオンボロなアパートだといっても、自分の居場所に戻ってくると、やっぱり落ち着くもので。

敷きっぱなしの布団の上に、大の字に寝っ転がる。

と、そんな安息を迎えた瞬間。

ピンポン、と、チャイムの音が響いた。  
時計の針はもう、十時を回っている。

こんな夜遅くに、いったい誰だろう？

首をかしげつつ、ぼくは重い腰を持ち上げ、ドアを開ける。  
そこには、ひとりの女の子が立っていた。

ずるずるずるずる、もぐもぐもぐもぐ、ずずずずずずずずずず。

うーん、どうしてこうなっているのだろうか？

ちゃぶ台を挟んだ反対側には、ちょこんと正座をしながらラーメンを一心不乱にすすむ女の子。

それは、このあいだもジャンボカツ定食をおごってあげた、ホトトギスという女の子だった。

「こんな時間に、どうしたの？」

ぼくの問いかけに、

「もぐもぐ、あふあふえ、もぐ、ふおのあふあーふおに、もぐらぶあいうのをみあふえああら、もぐぐ、しほっ、ごげっ、ぶぶおっ  
！」

ラーメンを口いっぱい含みながら答えようとして、豪快にぐち

やぐちやになつた物体をまき散らすホトトギス。  
もちろん、ぼくの顔面や服、ちゃぶ台やその上に置いてあつたぼくのラーメンにも、それらの物体が襲いかかつてきた。

「だ、まったくもう、学習能力ないなあ……。って、ぼくもか……」

思わず文句が飛び出したけど、話しかけたのはぼくのほうなのだから、こっちに責任がまったくないとは言いきれない。

ぼくは顔やら服やらちゃぶ台やらをフキンで拭きながら、ホトトギスに言う。

「ともかく、食べ終わってから話そう」

こくん。ホトトギスは黙って頷く。

学習能力は、一応あつたということか。

じつと、ぼくは自分のラーメンを眺める。

う〜ん……。飛び散つたの、この中にも入つただろうなあ……。

でも、捨てるのもつたいないし、ま、いいか。

再び豪快にラーメンをすすり始めたホトトギスと一緒に、ぼくもずるずると音を立てながら遅い夕飯をたいらげるのだった。

「……で？」

ラーメンを食べ終え、お茶を用意してひと息ついたぼくは、ホトトギスに再び問いかけた。

彼女は素直に口を開く。

「うん、あのね、このアパートに入るのを見かけたから、来てみた

んだわさ」

「こんな、遅い時間に？」

「うん。……迷惑だった？」

瞳をうるうるさせながら、ホトトギスは上目遣いで訊いてくる。

そういう仕草は、反則じゃないだろうか。もし迷惑だと思っただとしても、そんなこと言えなくなってしまう。

もっとも、ぼくはべつに、迷惑だなんて全然思っていないかったのだけ。

というより、彼女のことを少し気になっていたから、会えて嬉しいというのが正直な感想だった。

でも、こんな時間　もう十一時近いこの時間に、女の子とふたりきりだなんて……。

そう考えて、自分の置かれた状況に、今さらながらに赤面してしまふ。

そんなぼくに、ホトトギスからトドメの一言。

「ひとりじゃ、寂しいかな」と思って……」

ドキッ。

「そ……それって、どういう……」

どぎまぎと挙動不審気味になりながらも、どうにかぼくは言葉を返す。

喋り方とか行動とか、なんだかちょっとおかしい部分はあるものの、最初に会ったときにも思ったけど、顔立ちはとても可愛い。幼く見える感じではあるけど、おそらく十代後半だろうと思われる女の子が、こんな夜遅くに男のひとり暮らしの部屋に来て、こん



なことを言うなんて。

「あちきも、寂しかったから……」

ドキ、ドキ、ドキ。

鼓動が高鳴る。

これって、つまり……。

ゴクリ。ツバを飲み込むほど。

でも。。

「というか、おなかすいてたから……」

ん？

「また、ご飯にありつけるかな、なんて思ったんだわさ」

戸惑うことなく、そう言っただけのけるホトトギス。

え〜と……。

彼女の様子は、そういうふうに出て恥ずかしさを紛らわそうと  
している……なんて雰囲気では、もちろんなかった。

呆然としたまま声も出せずにいるばかりに構うこともなく、ホトト  
ギスはさらに言葉を続ける。

「おなかいっぱいになったわさ。やっぱりご飯は、誰かと一緒じ  
ゃないとだわね。それじゃ、あちきは帰るとするだわさ！」

そう言うが早いか、彼女は素早く靴を履き、玄関のドアを開ける。

「ごちそうさま。ありがとねん！」

どうにか立ち上がり玄関までふらふらと近づくと、ウィンクと短いお礼の言葉だけを残して、ホトトギスは去っていった。

夜遅い時間なのだから、ホトトギスは女の子だし送ってあげるべきだったとは思っただけだ。

だらしなく口を開けて呆然としていたこのときのぼくに、そんなことを考える余裕なんてあるはずもなかった。

「うっうっ……」

「アトリ、どうした？」

モニターに目を向けながらも集中できず、うなり声を漏らしていたばくに、隣の席のセキレイが声をかけてきた。

「いや、ちよつと体調が悪くてさ……」

弱々しく答えると、反対側の隣から耳にキンキンと響く声が割り込んでくる。

「ちよつと、アトリ、大丈夫？ 無理しちゃダメだよ？ 帰ってもいいよ？ ヒバリさんと雷鳥さんが休憩中だから、ちよつと大変だけど、でもあたしたち、超絶頑張るから！」

それは、ゆりかもめの声だった。

心配してくれているのは伝わってきたけど、そんな言い方をされたら余計に帰れなくなってしまう。

「ん……大丈夫。でもちよつと、テルリンのとき、行ってこようかな」

「そうだな、行ってこい。薬をもらって飲めば、すぐ治るかもしれないしな」

「うん、けどなんか、怪しい実験薬を飲まされそうでちよつと怖いかも」

「ははは、確かにそうだな！ ま、ひどくならないうちに、行ってこいよ。こっちは任せておいて大丈夫だから」

「アトリもセキレイもひどいな。テルリン、怒っちゃおうよ？」  
「ほうほう、ゆりかもめは今度体調崩したら、テルリン直行だな？」  
「はっつ、それは嫌だよー！」

そんな他愛のない会話を残し、ぼくは部署を出る。

目指すはテルリン。というか、医務室。

テルリンというのは、この雛森支社に常勤している保険医だ。

てるはじゅりん  
照葉樹林さん。年齢はヒ・ミ・ツ と、本人は言っている。

二年ほど前に三十路を越えたことを、すごく気にしているらしい。  
だから、年齢の話題はタブーだ。

新入社員のぼくにまで年齢が伝わっちゃってることを考えると、  
今さら隠したところで無駄だとは思っただけ。

それはいいとして、彼女には他にもふたつほど、厄介な部分がある。  
る。

そのひとつが、さっきも話題に出た実験薬だ。

なにやらいつも研究開発に余念がないテルリン。

たいていは、どんな症状にも効くとかいう激しく怪しい薬の開発  
だったりするわけで。

具合が悪くて医務室に行った社員をつかまえ、「おお、ちょうど  
いい薬があるぞ！」と言って自分の作った実験薬を飲ませる、とい  
ったことを頻繁にやっているのだ。

もちろん、成功したためしなどない。

だからこそ、医務室に行くくらいなら山を下りてでも病院へ行く、  
という人が多いのが実情だ。

うーん、そんなふうに考えていたら、行きたくなくなってきた

た……。

とはいえ、ゆりかもめやセキレイに負担を強いるわけにもいかないのだから、ここは覚悟を決めるしかないか。

ぼくはグツとこぶしを握りしめ、医務室を目指した。

それにしても、こんなに体調が悪いのは、どうしてなのだろう？  
軽い頭痛と吐き気、微妙な腹痛が同時に襲いかかってきていた。  
普段からぼくは、あまり体調を崩すことがないというのに。  
少し考えて、ある原因に思い至る。

昨日ラーメンに入れたタマゴ、賞味期限をかなり過ぎてたかも……。

このところ食堂で食べるが多かったから、冷蔵庫に入れてあったとはいえ、あのタマゴはかなり古くなっていた可能性がある。  
いつ買ったのか、まったく覚えていないし……。

ホトトギスもあのタマゴを食べたけど、大丈夫だったかな……？  
もし体調を崩したりしたら悪いよね……。

ぼくはそう考えながら、廊下を歩いていた。  
と、ふと気づく。

でも考えてみたら、完全にタダ飯食いじゃん、あの子。もし  
体調を崩しても、それは自業自得ってやつだ。ぼくが悪いわけじゃない。  
だいたい金銭的にあまり余裕のないぼくなんかにたかるなん

て、それ自体がひどいことだし。

今さらながらそのことに思い至った。

ただ、それでもぼくは、あのホトトギスという女の子に怒りの念を持ったりはしなかった。

やっぱり最初に会ったときのお母さん染みた感覚が、まだ残っているのだろう。

ほどなくして、医務室のドアが見えてきた。

ホトトギスのことより、今は自分の体調について考えないと。

頭を切り替え、ぼくは医務室のドアノブに手をかけた。

「うん、これはただの風邪だな。よし、ちょうどここに、いい薬が

……」

「いえ、市販の風邪薬をお願いします」

容態を診てくれたテルリンが、嬉々とした表情で棚の中から紫色の液体が入った怪しげなビンを取り出そうとするのを、ぼくは素早く制止する。

明らかな不満顔をこぼしつつも市販の薬を取り出し、それを渡してくれる彼女。

「ほらよ。水は自分でどうにかしろ。無理矢理そのまま水なしで飲むのがお奨めだ」

「こらこら、そんな意地悪な言い方するもんじゃないよ、テルリン」

ぶつきらばうな声で箱入りの市販薬を投げつけるテルリンに、突然やけに軽い声が向けられた。

「すまないね、ぼくのテルリンが意地悪なことを言って。自慢の  
実験薬を試すことができなくて、ふてくされてるんだよ」

ニコツ。

爽やかな笑顔を浮かべながら、そう話しかけてきたのは、あずまやしゅん東屋純  
さんだった。

確か、第二十七対策執行部の人だったはずだ。

「ぼくのテルリンってなんだ、こら！ 撤回しろバカ！」

ボカボカボカボカ！

テルリンから思いつきり後頭部を連続で殴られながらも、笑顔を  
崩さない純さんは、ある意味すごい人なのかもしれない。

なんとというか、かなり軽い喋り方である上に、見た目的にも赤に  
近いような茶髪だったり派手な服装だったりで、チャライ感じとい  
うのがしっくりくる言い方だろうか。

そんな雰囲気ではあるけど、純さんは二十九歳で、テルリンが「  
早くこつち（三十路）の世界に來い！」なんて言っていた。

……というかテルリン、年齢は秘密なんじゃなかったっけ？

「純さんは、どうしてここにいるんですか？ まだレベル2の警報  
が継続中のはずですけど……」

「ふっ、ぼくも体調を崩してしまっただね。テルリンの愛で治しても  
らおうと思って、ここまで来たってわけさ」

前髪をかき上げながら、純さんは恥ずかしげもなく言っただけのける。

「ウチに愛なんてない！ とくに純なんかには絶対ない！ ある  
のは実験薬だけだ！」

言いきるテルリン。

「ふっ、そんなに恥ずかしがることないのに、マイハニー」

「くだらん呼び方するな！ 純の診察はとっくに終わってるだろうが！ 仮病は病気じゃない！ 早く任務に戻れ、このバカタレが！」

「はっはっは、相変わらずツンデレだなあ、テルリンは！ そんなところも、素敵なんだけどね！」

「デレなんてない！ 早く出ていけ！」

なんとというか、すっごくお似合いなのではないだろうか、このふたり。

もちろんテルリンは即刻否定するだろうけど。

「あっ、そういえば……」

医務室から出ていこうとする純さんが不意に立ち止まり、真面目な口調でつぶやいた。

「ちょっと小耳に挟んだんだけど、宇宙人が忍び込んでるって噂、聞いているかい？」

「え……？」

まったく思いもよらなかった言葉に、ぼくは疑問符を浮かべるだけだったのだけど。

「ああ、そうらしいな」

テルリンは落ち着いた様子でそう答えていた。



「あの、それってどういうことですか？」

ぼくの疑問に、純さんが説明を加えてくれる。  
今回、宇宙人警報のレベル2が発令された。  
でも通常、そんな急速にレベル2になるなんて、ほぼありえない  
ことなのだという。

どうしてそうなったのかを説明づけるためには、前回のレベル1  
の警報のときに宇宙人がすでに地球に忍び込んでいたと考えるのが  
妥当なのだそうだ。

つまりは、その宇宙人がスパイとして侵入し、仲間の宇宙人たち  
を地球へと向けて導いている、ということだ。

あくまでも噂でしかない段階とはいえ、会社側としては無視でき  
ないと判断した。

すでに始められているという調査の途中経過によると、どうやら  
宇宙人がいるとすれば、雑森町に潜伏している可能性が高いらしい。

「宇宙人……ですか……」

いろいろと説明してもらったものの、いまいちぼくには信じられ  
なかった。

宇宙人警報というのは、レベル2でもまだ気づかれていないこと  
が前提になっているはずだ。

もし宇宙人が地球にまで到達していたなら、すでに気づかれてレ  
ベル3になってもおかしくないような気がする。

だいたい、前回のレベル1のときに宇宙人が来ていたのだとして  
も、宇宙船かなにかで来るとすれば、さすがに気づかないはずはな  
いだろう。

この日本中央電力難森支社の宇宙観測設備は、かなりの精度を誇っているのだから。

「ま、あくまでも噂だよ。気にすることはないさ。なにかわかれば、会社側から連絡が入るはずだしね」

純さんはそう言い残して、医務室を出ていった。

「それじゃあ、ぼくもこれで……。テルリン、ありがとうございませした」

市販の薬をもらっただけとはいえ一応お礼を述べて、純さんに続いて出ていこうとするぼくに、背後から声がかかった。

「お大事にな。大切な部下を診てやったのだから、ヒバリには感謝してもらわねばならんな。今度思いっきり抱きつかせてもらうから、覚悟しておくようにと、伝えておいてくれ」

「あゝ……、はい……」

苦笑をまじえながら、ぼくは曖昧な返事だけしておく。

ふたつほどあると言ったテルリンの厄介な部分、そのもうひとつは、これ。

彼女は女性が好きなのだった。

「女性同士だから、構わないだろう？」なんて言いながら、ことあるごとに抱きついたりキスしたり……。

怪しい実験薬の件と、この件によって、この医務室にはほとんど誰も訪れない。

でも、単にテルリンがサボりたいがために演技しているんじゃない

いだろうかと、ぼくはこの人と会ったびに考えているのだけど。  
真相は謎のままである。

「アトリ、大丈夫〜う？」

ぼくたちの部署まで戻ると、ゆりかもめが飛びつかんばかりの勢いで心配顔を向けてくれた。

「うん、大丈夫だよ。ただの風邪だつて。薬をもらって飲んできたから。……あつ、もちろん市販の薬だよ」

「は〜、よかった〜」

その安堵は、ただの風邪だったことに対してなのか、もらったのが市販の薬だったことに対してなのか。

「ま、大丈夫だとは思ってたけど、よかったな」

セキレイはそう言ってぼくの肩をポンポンと叩く。

軽く話しかけているけど、ぼくが医務室に行っているあいだ、ぼくの担当場所の確認も受け持ってくれていたはずのセキレイ。

そんな様子をまったく見せないし、ましてや恩に着せようとする素振りなど微塵もない。

ゆりかもめもセキレイも、やっぱり最高の同僚たちだと言えるだろう。

「でも、無理は禁物よ？ 悪化するようなら、すぐに帰って休んでいいんだからね？」

「そうだね。体調が悪い状態で無理なんかして、重要な情報を見逃したり、普段なら起こさないミスを犯したり、といったことがあっても困るからね」

ヒバリさんと雷鳥さんから心配の言葉をかけられた。ふたりとも、休憩から戻ってきていたようだ。

雷鳥さんの言葉はちょっと厳しい内容ではあったけど、でもぼくのことを気遣ってくれているのは、その優しげな瞳からも伝わってきた。

「はい」

ぼくは素直に答える。

「あっ、そうだ、ヒバリさん」

伝える必要があるのかどうか判断に迷うところだったけど、一応テルリンから受け取った言葉を伝えることにした。

「テルリンが、今度思いっきり抱きつかせてもらうから、覚悟しておくように、だそうです」

「……あ、あの人は、まったく……」

ぼくの伝言を聞いて、ヒバリさんはこめかみをピクピクさせながら頭を抱えていた。

「あははは〜！ ヒバリさん、テルリンに超絶気に入られちゃってますもんね〜」

面白い話題を得たとでも言わんばかりの明るい声で、ゆりかもめが茶々を入れる。

でも、

「あつ、ゆりかもめにも伝言。体調が悪くなくても、いつでも医務室に来てくれていいぞ、念入りに可愛がってやるからな、だってさ」「ぎゃう〜！ 超絶危険を感じる〜！ 絶対お断りだよ〜う！」

ぼくの伝言パート2によって、叫び声を上げることになるのだった。

業務時間中はどうにか我慢していたのだけど、結局ぼくは体調がよくなるらず、残業なしですぐに帰らせてもらうことになった。

事態はこう着状態が続いたまま。いまだにレベル2のサイレンが鳴り響いている。

ぼく以外の四人は、このまま残業していくのだろう。

休憩を挟んだヒバリさんや雷鳥さんは、今日も泊まり込みになるかもしれない。

みんなに迷惑をかけるのは心苦しかったけど、体調の悪い状態では余計に迷惑をかけてしまう可能性もある。

素直に帰宅する以外、ぼくに選択の余地はなかった。

山道を歩いたことで体調が悪化したのか、頭がぼーっとしてはいたものの、ぼくはどうかボロアパートまでたどり着くことができた。

部署のドアの前に立ち、カギを取り出した、そのとき。

ぶらっ。

微妙な浮遊感が襲いかかってきた。

いや、ぼくは倒れかけてしまったのだ。

でもぼくの体は、そのまま床までたどり着きはしなかった。

「ちよつと、大丈夫かや？」

この声は……。

聞き覚えのある声に安堵したのか、ぼくの意識はそこで途切れてしまった。

気づくとぼくは、布団で眠っていた。

「あれ、ぼく……」

「あつ、起きたかや？ 今、おかゆができるから、待ってるだわさ」

上半身を起こした音に気づいたのか、台所から声がかげられた。

それは、ホトトギスだった。

彼女がぼくを部屋の中まで運んでくれたんだ。

それに、おかゆまで作ってくれてるなんて。

じーんと心が温かくなる。

やがて、出来上がったおかゆを持って、ホトトギスがそばに寄り  
てくる。

「あ……ありがとう……」

「いえいえ。あつ、そのままそこについていいだわさ」

ちゃぶ台の横に移動するため起き上がるつとするぼくを、ホトトギスが声で制する。

「え、でも……」

戸惑っているぼくの横にちょこんと座り、茶碗に盛ってくれたおかゆを左手に持ち、右手にはおかゆ用の木のスプーンを持つ。

サラサラのおかゆをスプーンでひとさじすくうと、彼女はそれを自分の口のほうへ。

今まで何度も見ていた彼女の行動パターンから考えると、もしかしたら自分で食べちゃったりするかも。

なんて、ある意味妙な期待を込めて眺めていたのだけど。

「ふーふーふー」

ホトトギスはスプーンのおかゆに息を吹きかけ始める。そして、

「はい、あーん」

と言いながら、ぼくの口の前にスプーンを差し出した。

「……あーん」

彼女に言われるがまま、ぼくが口を開けると、ホトトギスはスプーンを優しくぼくの口の中へと進める。

ぼくがスプーンをぱくつとくわえると、すかさず彼女はそのスプーンをゆっくりと、微かに上のほうへ引き抜いていく。

口の中には、ほどよい塩味が絶妙なおかゆだけが残された。



今まで会っていたホトトギスのイメージから、彼女は料理なんてしなさそうで、したらしたで、すごい味だったり黒コゲだったりとかしそう、なんて思っていたのに。

それはとても失礼な想像だったようだ。  
食べさせてもらったおかゆは、すごくまともな味だった。

茶碗に盛られたおかゆをたいらげたぼくに、彼女は優しく微笑みかけてくれた。

「大丈夫かや？ 熱はないかや？」

茶碗をちゃぶ台の上に置くと、ホトトギスはそっと顔を近づけてくる。

「あ……」

こっん。

ぼくのおでこと、彼女のおでこが、ピッタリをくつついた。

「ん……少し熱があるみたいだわさ。ゆっくり休むのがいいだよ」  
「う……うん……」

頭が激しくぼーっとなっていたのは、はたして熱のせいだけだったのだろうか。

ともかくぼくは、言われたとおり再び布団をかぶり、眠りに就いた。

次の日、起きてみると、額の上には水に濡れたタオルが置かれていた。

すでにタオルはぬるくなっていたけど、ホトトギスはあのあと、しばらくぼくを看病してくれたということになる。

さすがに朝までいてくれたりはしなかったらしく、ドアはカギが開いたままだった。

カギを持っていくわけにもいかないし、かといってぼくを起こすのも悪いと思っただろう。

体調は、すっかりよくなっていた。

おかゆが、よかったのかな。ホトトギスには感謝しないと。

そう思いながら台所へ向かうと、空っぽになったレトルトのおかゆのパックが、ごみ箱に捨てられていた。

あ……ちょっと前に買って、置いておいたんだっけ。

ホトトギスはそれを温めただけだったということか。

なんとなく彼女らしいと思い、笑みがこぼれてしまった。

会社に向かって雛森山へと足を踏み入れると、山の上方からは微かにレベル2のサイレンが聞こえていた。空も神素の影響で七色に輝いている。

状況はまだ、変わっていないのだ。

でもぼくは、ホトトギスのおかげで朝から清々しい気分にも包まれながら、山道を歩いていった。

舗装はされていないし、それなりに傾斜もある山道ではあったも

の、そんなに歩きにくいというわけでもない。

ちよつとしたハイキングコースのような感じだ。

だからまだ眠気の残る朝早い時間から歩いていたとしても、いつも清々しい気分ではあるのだけど。

今日は普段にも増して、いい気分だった。

「……ぼくって、単純だな」

ホトトギスが見せた優しい笑顔を思い浮かべながら、ぼくはつぶやいていた。

「噂はどうやら真実のようです」

会社に着いて自分の席に座るなり、ドアを開けて入ってきた所長さんから、間髪を入れずそんな言葉が投げかけられた。

「ほえっ？ 所長さん、どういふことですかあ？」

ゆりかもめが寝ぼけまなこのままで質問する。

まだ始業時間前だったから、彼女は机に突っ伏して眠りこけていたのだ。

もっとも、社員寮に住んでいるゆりかもめやセキレイは、昨日も遅くまで残って仕事をしていたと考えられる。

ぼくが体調を崩して帰ってしまった穴を埋めるために、というのが理由なのだから、本当に頭が下がる思いだ。

「とりあえず、落ち着きなさい。というか目を覚まさない、ゆりかもめさん」

すかさずヒバリさんから注意を受ける彼女。

始業時間前だったとはいえ、すでにヒバリさんも雷鳥さんも席に着いていた。

レベル2状態は続いているのだ、そうそう休憩してもらえないのだろう。

会議があれば出ていってしまうかもしれないけど、それまではここにいて作業をするはずだ。

それにしても、こうして所長さんが入ってきて、しかも雑談を始めるでもなく、深刻な表情で語りかけてくるなんて。

いったいどんな状況になっているのか、ぼくには皆目見当もつかなかった。

「あう……。はい、わかりました。おはようございます」

まだいまいち寝ぼけている様子ではあったけど、ゆりかもめはヒバリさんに素直な声を返す。

そう返しながらも、なんとなく口を尖らせて不満顔ではあったのだけど。ゆりかもめは寝起きが悪いからなあ……。

「それで所長さん、いったいどういことなんですか？」

意図的にだったのかはわからないけど、セキレイが助け舟を出す。彼の質問に、ゆっくりと席に腰を落とした所長さんは、いつものなからの優しいな落ち着いた声で、さっきの言葉についての説明を加えた。

ここ最近、宇宙人が忍び込んでいるという噂が、会社内で流れていた。

もちろん一般市民にまでは広まってはいなかったし、仮にそんな噂を聞いたとしても、普通の人ならば信じたりはしないだろう。

宇宙人の存在は、おおやけにはされていないのだから。

でも噂の出どころは、この雛森支社の研究施設内だった。

どうやら、前回の宇宙人警報レベル1のときに落ちてきた隕石のようなもの、あれが実は宇宙人の乗った小型の宇宙船だったのではないかという話らしい。

小型の宇宙船なら、隕石との区別もつかない可能性があるからだという。

ともかく、そうやって地球に不時着した宇宙人が、地球人に紛れ込んでスパイ活動をしているのではないか。

いつしかそんな噂へと、発展していった。

半信半疑ではあったものの、無視はできないと考えた会社が調べた結果、とある推論へとたどり着く。

雛森町に潜伏している宇宙人は、地球人の女性……というよりも少女の姿をしているということだった。

しかもそれは。

「……确实とは言えないのですが、最近アトリくんに接触してきた女の子　ホトトギスさんが宇宙人である可能性が高いのです」

若干ためらいながらではあったけど、所長さんははっきりと、そう言い放った。

「な……なによそれ！？ アトリに接触してきた女の子って、誰よ！？ どういうこと！？」

ゆりかもめがすごい勢いで、なにやら微妙にずれた方向に食いついた。

彼女は鬼のような形相で、どういわけかぼくに対して怒鳴りつけてくる。

どうしてぼくが責められているのだろう？

そう思わなくてはなかったけど、ゆりかもめの勢いに圧されたぼくは、素直に説明する。

「いや、ホトトギスは最近知り合った女の子だよ。といっても、三回くらい会った程度だけだね」

回数としては正しいけど、実際にはそのうち二回はアパートのぼくの部屋に上げていたりする。

ただなんとなく、そこまで言うてしまうと大変なことになりそうだったから、こういう言い方にとどめておいたのだけ。

ゆりかもめは、じとーっとした目でぼくを見つめていた。

思わず目を逸らしてしまうぼく。

べつに、やましいことがあるわけじゃないというのに。

というか、どうしてゆりかもめに、ここまで責められなきゃならないのだろう？

……あれ？ そつえば……。

「所長、どうしてホトトギスのことを知っているんですか？」

ぼくの疑問に、所長は事もなげにこう答えた。

「それはもちろん、彼女を監視していたからですよ。アトリくんが彼女と一緒に食堂でご飯を食べたり、アパートの部屋に連れ込んだりしていたことも、ばっちり報告されていますよ。」

その言葉に異常なまでに食いついたのは、やっぱりゆりかもめだった。

彼女は執拗に、ホトトギスと知り合ってから経緯を事細かに説明しろと怒鳴りつけてくる。

わざわざ説明するのも面倒だけど、ゆりかもめに逆らうとあとが怖いよなあ……。

そんなことを考えていると、

「どうどう、ゆりかもめ、落ち着いて。今はそれよりも、所長さんの話を聞こう。」

絶妙なタイミングで、セキレイが彼女をなだめるように声をかけてくれた。

セキレイ、グッジョブ。

「そうだね。……所長さん、それで、アトリくんはどうすればいいのでしょう？」

雷鳥さんも場を取りまとめるように質問の声を上げた。

「この部署まで来たのは、彼と直接話したかったからなんですよね？」

さらにヒバリさんも質問を重ね、所長さんに話を続けるよう促す。ふたりの思いに応え、所長さんはぼくのほうに向き直ると、こう言葉をかけた。

「先ほどホトトギスさんを監視していたと言いましたが、正確には監視ではありません。町の巡回に当たっている所員が偶然見かけ、追ってみたらアトリくんと接触したというだけです。とはいえ……慎重に調査は続けています。もしも彼女が宇宙人のスパイだったとしたら、地球の未来はアトリくん、キミにかかっている可能性もあるんですよ。ですから、慎重に行動してください」



所長さんはぼくに言葉をかけたあと、すぐに部署を出ていった。ヒバリさんも雷鳥さんもセキレイも、ゆりかもめですらも、なにも言わなかった。

宇宙人警報レベル2の危険な状態は続いているのだから、仕事に戻る必要があったのだ。

ゆりかもめはときどき、なにか言いたそうな目線を向けてきていたけど。

ぼくとしては、とくになにも言うつもりはなかったし、体調も戻ったのだからと、しっかり仕事に集中することにした。

夜、残業も終え、帰宅を許された。

今日は金曜日。普通なら週末は土曜日曜と続けて休みになる。だけど、いまだにレベル2の状態は続いている。

というわけで、週末のどちらか一日は出勤するように言われた。ぼくは病み上がりということで、明日は休んで日曜日に出勤することになった。

帰りの暗い山道を、懐中電灯を片手に歩きながら、ぼくは考える。所長さんからあんなことを言われてしまったけど、そう言われても困るだけだ。

だいたいホトトギスが宇宙人だなんて、そんなの信じられない。そりゃあ、彼女の言動はちょっと、というかなんか、普通の人とずれているのは確かだと思う。

加えてぼくは、彼女の下の名前以外、なにも知らない。

ホトトギスという名前だって、本名なのかどうかわからないわけ

だし、いつもご飯をたかっているだけという気もするけど……。

だけど昨日は、体調の悪いぼくを看病してくれた。

ぼくの家置いてあったものとはいえ、おかゆも作ってくれた。

そんな彼女を宇宙人だと疑うなんて、そんなこと、ぼくにはできなかった。

いや、そんなふうに思いたくはなかったのだ。

所長さんの話によれば、ホトトギスの件はまだ調査中ということだったし、念のため忠告しただけなのだと思われる。

もし本当に危険だと考えているなら、所長さんだってわざわざぼくに話したりはしないだろう。

逆に秘密にしておいて、監視を強めるとか、そういった対応になるはずだ。

だから、少なくとも所長さんに関してだけ言えば、今のところホトトギスが宇宙人だなんてことを本気で考えているわけではないと言える。

あまり気にする必要はないのかもしれない。

とはいえ、どうしても気になってしまう。

ホトトギスに会って、いろいろと話を聞きたいな。

そう思いながら、ぼくは自分のアパートまでたどり着いた。

もしかしたら玄関の前で彼女が待っていてくれるかも。

なんて期待をしまっていたのだけど、もちろん彼女がいるわけもなく。

ぼくはひとり寂しく布団にくるまると、山歩きで疲れた体を癒すのだった。

次の日、いつもの食堂にでも行こうと、ぼくは家を出た。  
もしかしたら、町を歩いていれば彼女と会えるかもしれない。  
そんな思いがあったのも事実だった。

ホトトギスの連絡先を、ぼくは知らない。  
だから、偶然会う以外に方法はないのだ。  
見慣れた食堂の温かさ漂う木造のたたずまいが、ぼくの視界に映  
り込む。

そして。  
食堂のサンプルウィンドウの前には、彼女が立っていた。

「ホトトギス！」  
ぼくは思わず声をかけていた。  
彼女は振り返ると、笑顔を浮かべる。

「アトリ！ 来てくれて、ありがとだわさー！」  
べつに約束していたわけじゃないのに、そう言われた。  
つまりそれって、ぼくにたかるつもりで、ここで待っていたって  
こと？

そう思っって、ちょっとムツとした表情を浮かべてしまったけど。  
「具合、よくなったのね。よかっただわさー！」

なんて満面の笑顔を向けられたら、怒ったりなんてできなくなってしまう。

「うん。それじゃ、なにか食べようか」

「わーい、なににしようかなあ！ 迷っちゃうだわさ！」

ぼくの言葉を聞いた彼女は、次の瞬間にはサンプルウィンドウにべったりと張りついていた。

食事を終えたぼくは、ホトトギスを誘って町を歩いていた。

といつても、なんとなく店をのぞいたりしながら、ふらふらと歩き回っているだけなのだけど。

少しでも長く彼女と一緒にいたかったのだ。

そう考えている自分にハツとする。

これは前に思ったような、お母さん染みだ心配からくる感情ではないことに、改めて気づいた。

ぼくはホトトギスのことを 女性として意識しているのだ。

確かに最初から、可愛い女の子だとは思っていた。

でもそれだけではない。

ちよつと変わった子ではあるけど、それが余計に、ぼくの心を惹きつける。

そんな感覚が、ずっと心の中にはあったのだ。

所長さんから言われたことは、もちろん気になっている。

でも、一緒に寂れた商店街を歩く彼女の楽しそうな笑顔を見ると、なにも訊いてはいけないように思えてしまう。

次に会ったら、いろいろと話を聞きたい。

そう考えていたはずなのに、結局ぼくはなにも訊けないまま、彼女とふたりの時間を過ごし、そしてそのまま別れた。

「また、会おうね」

別れ際のぼくの言葉にホトトギスは、

「うん、もちろんだわさ！」

と言ってちよつと不器用なウィンクを返してくれた。

レベル2の警報が出たまま、数日経った。

太陽の出ている時間帯は、神素の影響で、空が絶えず七色に輝いている。

カラフルな光が照らし出す景色は、朝の清々しさをも軽減させていた。

ずっと緊張の解けない状況が続いているのだから、そんな空でなかったとしても、あまり清々しくは感じられなかったかもしれないけど。

ぼくはいつもどおり、朝の山道を歩いて会社へと向かう。

社内に入り、第三十八対策執行部のドアをくぐると、中にはセキレイとゆりかもめがいた。

もちろんゆりかもめは、机に突っ伏して眠そうにしている。

一方セキレイのほうはというと、まだ始業前ではあるけど、先行して仕事を始めているようだった。

ヒバリさんと雷鳥さんは、姿が見えない。

すでに出社してきてはいるらしく、ホワイトボードには「会議」の文字が書かれてあった。

朝から忙しそうだ。また泊まり込みだったのかもしれない。

ともかくぼくは、同僚のふたりに「おはよう」と声をかけながら席に着く。

と、ゆらりとゆったりした動作で身を起こし、ゆりかもめが声をかけてきた。

「アトリ、おはよ〜……………」

「おはよう、ゆりかもめ。相変わらず、朝弱いねえ〜」

「うう、だって、夜眠れないんだもん……………」

「え？ どうかしたの？」

ぼくの問いに、ゆりかもめは口をつぐんでしまう。

？ いったい、どうしたのだろう？

「うう、超絶眠いよう……………」

うめき声を上げると、ゆりかもめは再び机に突っ伏してしまった。

「ゆりかもめ……………」

「アトリ、ま、寝かせといてやね。…………もつとも、原因はお前にあるんだろうけどな」

不意に背後から、セキレイが話に割り込んできた。

寝かせておくのは、まあいいとして…………。

「セキレイ、ぼくが原因って、どういうこと？」

思わず振り向き、ぼくは聞き返していた。

「あゝ、つまりだな、ゆりかもめは……………」

「ちょ…………ちよっとセキレイ！ 余計なこと言わないでよ！？」

ガバツとすごい勢いで顔を上げたゆりかもめが、ぼくに言葉を返そうとしていたセキレイを止める。

さっきまであんなに寝ぼけた感じだったというのに…………。

「ゆりかもめ……?」

再び疑問符を浮かべながら、彼女に目を向けるべく。ゆりかもめはそんなぼくをじっと見つめ返し、数瞬のあいだ、時間が止まったように見つめ合う。

「な……ば……べつに、なんでもないわよう！」

だけど、急に顔を真っ赤に染めたと思ったら、彼女はまた机に突っ伏すと顔を隠してしまった。

「ん〜? どうしたんだよ、ゆりかもめ……」

そんなぼくの肩に、ボンと手を置くセキレイ。

「ま、放っておけ。……それにしても、つくづく報われない奴だ……」

「え? 報われないって、ぼくが?」

「いや、そうじゃなくてだな……。ま、それはもういいさ。それよ  
り」

ぼくにはいまいち、よくわからなかったのだけど。

ともかくセキレイはここで、話の流れを変えてきた。

「どうやら、いろいろとおかしな状況になってるらしいな」

「え? どういうこと?」

セキレイの言葉に、ぼくは質問で応える。

さっきまでの話も気にはなっただけど、それよりもずっと気になる話題にすり替わったのだ、当然と言えるだろう。



その質問に、セキレイはさらに説明を返してくれた。

「宇宙人の話さ。コードネーム・ホトトギス。そう呼ばれてるみたいだけどな」

「コードネーム……」

そうつけ加えることで、一応ぼやかしているのかもしれないけど、そのままホトトギスの名前で呼ばれている話……。

ぼくはなんだか、もやもやした気持ちでいっぱいになった。

だって、ホトトギスは宇宙人なんかじゃない、普通の女の子なのだから。

そう思い込もうとしているだけなのかもしれないけど、どちらが現実的かを考えたら、ぼくが思い至った結論のほうが正常だと言えるはずだ。

この会社の人間は、リバーシブル・アースに関わり、宇宙人の存在を知ってしまったている。

だから、普通の人とは違うかもしれないけど。

それでも、あのホトトギスが宇宙人だなんてありえないことだ。

ぼくがもやもやとした考えを頭の中で思い描いていると、セキレイはさらに説明の言葉を続けた。

「彼女が宇宙人のスパイだとするなら、今レベル2を引き起こしている宇宙人たちとの連絡手段を持っているはずだ。ただ、そういった通信の形跡はないらしい。それは通信手段がなんらかのトラブルによって使えなくなったと仮定できる」

彼の説明は、ぼくにはよくわからなかった。

でも、セキレイにしても、聞いた話をそのままぼくに伝えているだけなのだろう。

「とはいえ、強い感情によって、非常通信が発動すると考えられるらしい。もしコードネーム・ホトトギスが泣いたりすれば、それによって宇宙人本体に通信が届き、最悪の場合、地球侵略が開始される。そういつた可能性も懸念されている」

いくらなんでも突拍子もなさすぎる話に、ぼくは困惑していた。ただセキレイは大真面目な顔で語っている。冗談、というわけではないのだろう。

ゆりかもめにもぼくとセキレイの会話は聞こえているはずだけど、彼女は口を挟んだりしてこなかった。

そんな中、セキレイの説明はなお続く。

「その件に関して、どうも三つの派閥ができているらしいんだ」

「派閥……?」

「ああ、そうだ」

腕を組み目をつぶりながら、セキレイは頷き返した。なんだか偉そうだ。

と、いきなり彼は声のトーンを上げる。

「泣かすなら、仲よくしよう、ホトトギス!」

「え?」

いきなりの大声とよくわからない内容に、ぼくは目を丸くしながらセキレイを見据える。

「泣かすなら、仲間を待とう、ホトトギス!」

セキレイはぼくの視線なんて気にすることもなく、大声を発し続

けていた。

「そして、泣かすなら、殺してしまえ、ホトトギス！」

「殺……！？」

突然の物騒な言葉に、ぼくは思わず言葉を失う。

「以上三つが、それぞれの派閥の主張だ」

泣かすなら、仲よくしよう、ホトトギス。

すなわち、ホトトギスと仲よくなり、宇宙人たちのもとへ地球人が自ら出向いて友好関係を結ぼうとする、「友好派」。

泣かすなら、仲間を待とう、ホトトギス。

すなわち、とりあえずこのまま彼女を泣かせたりはしないようにしつつ現状を維持し、そのうち仲間の宇宙人たちが様子を見に来るのを待つ。そして仲間たちが来たら、そのときに改めて対策を考えようという、「保守派」。

泣かすなら、殺してしまえ、ホトトギス。

すなわち、先手必勝！ホトトギスを含めて、仲間の宇宙人たちもすべて殺してしまえばいいんだという、「過激派」。

ぼくたちの会社内、そして会社と密に連絡を取っている政府や各国首脳陣のあいだでは今、その三つの派閥が発生しているのだと、セキレイは語った。

ホトトギスを宇宙人だと決めつけているような現状と、それを前提とした三つの派閥に、ぼくは深い憤りを感じていた。

そしてその中には、ホトトギスをも殺してしまおうと考えるような派閥まであるというのだ。

いったいどんな状況になっているのか、ぼくにはよくわからなかったけど、それにしただってひどすぎる。

ぼくの表情から怒りの念を感じ取ったのだろう、セキレイは、

「ま、あまり気にするな。お前はお前の信じる道を行けばいいさ」と言っ  
て、ぼくの肩を叩く。

「セキレイは……」

セキレイは、どう思ってるの？

そう訊きたかったのだけど、言葉にできなかった。

でも鋭い彼は、ぼくの言いたいことを汲み取ってくれた。

「おれは、放っておくのがいいんじゃないかと思ってるんだけどな。派閥とかなんて興味はないが、あえて言うなら保守派ってことになるだろう」

「セキレイ……」

「ホトトギスって子とお前がどういう関係なのか、べつに詳しく聞くつもりはないが……。ま、聞くまでもなさそうだよな」

ぼくがホトトギスに惹かれていることも、セキレイにはお見通し  
のようだった。

「でも……、もうちょっと、周りも見てやってほしいってのが、おれの見えただけだな」

「え？ 周り？」

セキレイがなにを言いたいのか、ぼくにはさっぱりわからなかった。

ただ、セキレイとぼくの話に聞き耳を立てていたのだろう、机に突っ伏したままのゆりかもめが、一瞬だけピクツと体を震わせたことには気づいた。

とはいえ、どうしてなのかももちろん、わからなかったのだけど。

「おはよう、みんな」

「ちゃんと揃ってるね。ゆりかもめさんは、しっかり目を覚ましてください」

ヒバリさんと雷鳥さんが、第三十八対策執行部の室内に入ってきた。

雷鳥さんから注意を受けたゆりかもめは、飛び上がるように身を起こしていた。

あまり細かくごちゃごちゃと言われないこの部署でなかったら、こっぴどく叱られるところだろう。

もちろん雷鳥さんは、それ以上にも言ったりはしなかった。

ふたりは素早く席に着くと、ぼくたちを見据える。

ぼくたち新入社員の机は三人分が横に並んでいて、その正面に、

部長であるヒバリさんと副部長の雷鳥さんの机が横に並んでいた。ヒバリさんたちの机とぼくたちの机は、向き合うような配置になっている。

だから、うるさく指導されたりしない部署だとはいえ、上司のふたりが席に着くと、ぼくたちは真面目に仕事をせざるを得ないのだ。

上司ふたりの視線を感じながら、モニターに目を向け、キーボードに手を置く。

さて仕方がない、仕事を始めようかな。

そう思った刹那、ヒバリさんからぼくたちに、こんな質問が投げかけられた。

「あなたたちは、コードネーム・ホトトギスに関して、どんな感想を抱いてる？」

新入社員であるぼくたちに、どんな答えを求めているというのか。ぼくはどう答えるか、言葉に窮してしまった。

ホトトギスに関することだから、慎重になっていたというのもあるかもしれない。

そんな中、セキレイが真っ先に口を開いた。

「実際に宇宙人なのかどうか、おれにはわかりませんが、あまり急ぎすぎないほうがいいんじゃないかと考えています」

「……………そう。……………ゆりかもめさんは？」

セキレイの言葉を聞き、ヒバリさんは続けてゆりかもめに問いかけた。

「あ……………あたしは、その……………。正直、よくわかりません。宇宙人って言われても、まだピンとこないし……………」

ゆりかもめは素直に答える。

もつとも、彼女がいろいろと思案して答えるなんて、考えられなかった。

いつも素直に。それがゆりかもめだ。……単純、とも言い換えられるのだけど。

それはともかく、ヒバリさんの視線は続いてぼくのほうへと向く。

「アトリくん」

「……はい。ホトトギスが宇宙人だなんて、ぼくにはやっぱり信じられません」

名前を呼ばれたぼくは、ゆりかもめを見習ったというわけでもないけど、自分の思っていることを素直に返した。

「……そう、わかったわ」

ヒバリさんは小さく頷くだけだった。

「あ、あの……！ おふたりは、どう考えているんですか？」

ぼくは思わずそう尋ねていた。

突然の大声に、一瞬目を丸くするヒバリさん。

彼女はすぐ横にいる雷鳥さんと視線を交わし、やがて前に向き直ると、静かな口調でこう答えた。

「……わたしたちは、慎重に考えているわ。もし本当に彼女が宇宙人のスパイだったとしたら大変なことになる。でも、もし違っていたら、それはそれで大変なことだと思っしね。おそらく会社は、彼女を監視したりして、調査を続けているはずだから」

「だけど、小さな犠牲を避けようと考慮していたら、より大きな犠牲を強いられることもある、といった考えを持っている人たちもいるんだ。その主張もわからなくはないけど、危険だよね」

ヒバリさんの声に、雷鳥さんも解説を加える。

ふたりの言葉を聞く限り、三つの派閥で言えば、保守派に近い考えを持っていることになるのだろう。

つまり、ぼくたちと同じだ。

この部署にいる五人すべてが、同じ立場にあるらしいということ。それは、なにがなんだかよくわかっていない現状を考えると、とても心強く思えた。

「とりあえず、お喋りはここまでよ。レベル2の警報は、まだ続いているんだから。コードネーム・ホトトギスの件は置いといて、今は自分たちの役割をしっかりと果たさなきゃ」

『はい』

ぼくたち新入社員の三人は、声を揃えて答えた。

そして素早くモニターに目を移すと、担当場所のチェックを開始する。

仕事モード、オン。

頭を切り替えて頑張ろう。そう考えた、その矢先のことだった。

部署の壁に設置された大型モニターに、緊急の通信が飛び込んできたのは。



「なにを悠長なことをやっているのだね、キミたちは！ さっさと奴らを追い払うか、始末するかしたまえ！」

大型モニターには、いかつい顔のおじさんがどアップで映し出されていた。

そのおじさんは、額に青筋を立てて怒鳴りつけてくる。

ぼくたちには、ただ呆然とその映像を眺めることしかできなかった。

でも、はて？

このおじさん、会社の人ではないと思うのだけど、ただ、どこかで見たことはあるような……。

首をかしげているぼく。

そんなぼくの様子を、右隣の席に座るゆりかもめがじっと見つめていることに気づいた。

「……アトリ、わからないの？ ニュースとか見てないの？ このおっちゃん、防衛大臣さんだよ〜」

「え？ 防衛大臣……？」

言われてみれば、確かにテレビで見たことがあるような……。  
だけど、その防衛大臣さんが、どうしてこの大型モニターに映っているのだろうか？

「アトリくん、この会社は日本政府と密に連絡を取っているんだよ。宇宙人からの侵攻もありえるということから、防衛省が主導して対

策を練っている。政府に緊急性の高い情報が届くと、さらに各国首脳へと連絡が行く、という感じのネットワークになっているんだけどね。ともかく、日本国内では防衛大臣に主導権があるんだよ」

「もつとも、防衛大臣の権限は警備行動までだから、実際に防衛のため自衛隊を出動させるといった直接行動を決定する権限は、総理大臣にしかないんだけどね」

雷鳥さんとヒバリさんが続けざまに解説してくれた。

「……入社時にも説明されたはずだけどな」

セキレイが呆れ顔でそうつぶやいていたけど。

ともかく、会社と防衛大臣さんとのつながりというのはわかった。でも、その防衛大臣さんがどうして、この部署のモニターに映し出されたのか、その理由まではわからない。

政府側との連絡というのは、会社の上層部とのあいだでやり取りされるはずなのに。

ぼくが疑問を浮かべているあいだも、防衛大臣さんは怒鳴り声をまき散らし続けていた。

「各国の首脳陣からも、再三再四、どうなっているのかと通信が入ってきているんだぞ！ なにかしらの対策を打ち出さなければ、リバーシブル・アースを主導している国として、示しがかん！ 早急な返答を求むぞ、神仙寺くん！」

「……所長さんに対しての文句のようですね」

「ええ、それに、わたしたちの声や映像は届いていないみたい」

ぼくのつぶやきに、ヒバリさんも言葉を重ねる。

「つまり、緊急時用の全モニターへの映像送信モードになってるってことだね。政府側からは、そういう通信もできるようになっているはずだから。きつとあの防衛大臣さんが、焦ってボタンを押し間違えてしまったんだろうね」

雷鳥さんが冷静に分析する。

この人の場合、普段から微かに笑っているような表情だから、優しい声質で丁寧な言い方をしているけど、ちょっと嘲笑気味に思えたりするのだけど。

ともかく、この雛森支社にあるすべての大型モニターに、今あの防衛大臣さんのどアップが映っているということのようだ。

この通信方法の場合、返答できるのは所長室だけらしい。

「ああ、これはこれは防衛大臣殿、お待たせしました。ちょっとトイレに行ってましてね。それで、どういった用向きですか？」

映像には映らないけど、突然所長さんの声が響いた。

おそらく所長室から通信を返しているのだろう。

それにしても、あの怒り心頭な状態の大臣さんに、そんないつものどおりの、のほほんとした口調で応答するなんて。

「ちょ……、神仙寺くん！ この非常時に、いったいなにをそんなにのんびりしておるのだね！？ キミがそんなふうだから」

ぼくの予想どおり、火に油を注いだように、防衛大臣さんは顔全体を真っ赤に染める。

その怒声に対する所長さんの答えは なかった。

「神仙寺くん！ 聞いているのかね！？」

「ん？ ああ、ちよつと爪を切っておりましてね」

『そんなこと、あとでやれ〜〜〜！』

防衛大臣さんの声と、ぼくたち第三十八対策執行部の面々の声が、不覚にもピッタリと重なるのだった。

終始防衛大臣さんの怒鳴り声だけが響いていた感じではあったものの、通信は終わった。

通信の結果としては、もう少し待ってくださいな、と言う所長さんに対し、可能な限り早く事態を收拾しろ、と防衛大臣さんが命令調の言葉を放って締めくくられた。

相変わらず、のほほんとしている所長さん。

でも、防衛大臣さんがあんなにも怒り心頭で通信してきたのだから、さすがにどうにかすべきではないのだろうか？

もちろん所長さんにだって、考えはあるのだろうか。

とはいえ、新入社員のぼくには、地球の危機とも言つべき現状に關して意見するような権利なんかない。

ここは所長さんや、頻繁に会議をしているヒバリさんや雷鳥さんといった、立場が上の人たちに任せておけばいいのだ。

ぼくはそう結論づけ、今やるべき仕事へと頭を切り替える。

事態は、まったく変わる気配がない。

レベル2の宇宙人警報が発令されたまま、神素の放出は続けられ、昼間の空は常時七色に光り輝いている。

いったいいつまでこんな状況が続くのだろう。

ぼくはそろそろ、清々しい青空が恋しくなっていた。

清々しい青空を拝むことができないまま、さらに数日が経過した。日曜日。今週も土日のうち一日だけの休みだった。

ぼくがいつものように、いつもの食堂に足を運ぶと、いつもおりサンプルウィンドウを食い入るように眺める女の子がいた。もちろん、ホトトギスだ。

いつもと同じように、よだれを垂らしながらサンプルウィンドウにかぶりつく彼女。  
相変わらずだった。

「おはよう、ホトトギス」

「あっ、おはようだわさ！ お食事の時間だわさ！ いつもありがとうー！」

……完全にたかられているのも、相変わらずだ。

とはいえ、それでも全然構わなかった。

美味しそうにご飯をほおばる彼女の笑顔が、なによりも心地よく感じていた。

ぼくはいまだに、彼女の連絡先を知らないままにいる。

だから、こうしていつもの食堂に来るのだ。

そこではいつも、ホトトギスが待っていてくれた。

彼女の言葉だけ聞くと、単にご飯目当てなだけ、というふうにか思えないけど。

でも最近の彼女は、それを楽しみにしてくれているみたいだった。

そして食事のあとは、ぼくと一緒に散歩を楽しむ。  
つまりは、デート、ということになるのだろう。

もつとも、ホトトギスがそういうつもりでぼくと一緒にいてくれるのかは、いまいちよくわからない。

だけど、笑顔を浮かべてぼくにいろいと話しかけながら散歩する彼女の様子を見ている限り、嫌われてなんていないのは確かだ。

二十二歳にもなって、なにを思春期の小中学生みたいなことを、なんて思われそうだけど。

それでもぼくは、今のままで充分幸せだった。

「もぐ……んみゅ？ もぐ……どうか、したかや？ ……むぐむぐ」

ホトトギスは首をかしげながら、ぼくに不思議そうな視線を向けている。

食べながら喋るのは直っていないし、彼女のほっぺたにはご飯つぶがくっついてるし。

ああもつ、いつもどおりだなあ、この子は。

食堂に入ったぼくたちは、すでに注文も済ませ、サバの味噌煮定食を食べていた。

彼女とぼくは、いつも同じメニューを注文している。

ホトトギスが自分で決めないから、ぼくが同じものを頼んでいるのだけだ。

彼女と同じ味を楽しんでいると考えただけで、なんとなく幸せなのだ。

「ん……。ホトトギスの食べる姿は、いつもながら豪快だなあ、っ  
て思ってた」

「ぶふっ！ ごほごほっ！ ちょっと、人の食事姿をのぞき見てるんじゃないだわさ！ それになんなのかや、豪快って！？ こんな可憐で清楚なあちきに向かって！」

ぼくの声に、いろいろとツツコミどころ満載なセリフを吐いて答えるホトトギス。

いやまあ、もちろん吐き出したのは言葉だけではなくて、口の中のサバやらご飯つぶやら味噌汁の具の豆腐やらなんかも同時にまき散らされていたわけだけど。

そんなのもすでに慣れてしまっていた。

……この子は、せめて口に手を当てるとか、しようと思わないのだろうか。

ま、いきなりあんな感想を述べたばくにだって責任はある。

というか、最近ではホトトギスの食事中にわざとそういった言葉をかけていたりもするのだけど。

彼女のいろんな表情を見られるのが、楽しいのだ。

ぼくの言葉に対する反応は、焦ったり怒ったり笑ったり恥ずかしがったり、様々で実に面白い。

「まったくもう、アトリってば、変な人だわさ！」

口を尖らせながらそう言い返してくるホトトギスも、充分、変な人だと言えるだろう。

とはいえ、それはそれで構わない。

人と変わってるというのは、個性的だとも言えるのだから。

彼女の場合、かなり突飛すぎる部分もあるかもしれないけど、それを言ったら、ぼく自身も変わり者なのは否めない。

変わり者同士、仲よくやっていければいいや。

ぼくは、そう考えながら、再びホトトギスをじっと見つめる。

「人が食べるのなんて見てないで、アトリも早く食べるだわさ！

というか、お返しにあちきもアトリが食べる姿を、じっと見つめちやるだわさ！」

そんなことを大声で叫ぶ彼女の唇からは、またもやご飯つぶが飛び出してくるのだった。

食堂を出ると、寂れた商店街を歩くのが、ぼくたちのお決まりのコースだった。

毎回同じコースだし、失礼かもしれないけど大したお店もない寂れた商店街だから、ホトトギスが楽しんでくれているのか、若干心配ではある。

たまにはちょっと遠出して、デイズニールランドとかにでも連れて行ってあげようかな、などと思わなくもないのだけど。

ただ、レベル2の宇宙人警報がまだ解除されないままという現状。空は神素に包まれ、七色に輝き続けている。

ぼくの場合、仕事の関係上、この雛森町から離れるというわけにはいかない。

なんにもない田舎町だから、おのずと散歩コースとして選択できるのは、商店街か、公園か、疲れるだけかもしれないけど雛森山か、その程度しかなかった。



ホトトギスはショーウィンドウをぼけーっと眺めているのが好きみたいだ。

もっともこの町の場合、そのショーウィンドウだって、薄汚れていて地味な商品がちらほらと並べられているだけだったりするのだけだ。

それでも彼女が楽しめるのならばと、ぼくは散歩コースとして商店街を選ぶことが多かった。

今日もご多分に漏れず、人通りもまばらな商店街をホトトギスとふたりで歩いていた。

と、そのとき。

前方から見知った男女が歩いてくるのに気づいた。

あつ、あれは。

すぐに向こうもぼくたちに気づいたようで、明るく声をかけてきた。

「やあ、アトリくんじゃないか！ こんなところで、奇遇だねえ！」

軽い口調で声をかけてきたのは、男性のほう。

それは同じ会社の社員であり、数日前に医務室でも会った、純さんだった。

「おや？ 連れもいるみたいだな。デート中だったか」

もう片方の女性も、落ち着き払った声を上げる。

こちらは、保険医のテルリンだ。

「おお、そうだったのかあ。いやあ、邪魔をして悪かったかな

」？」

それに合わせて、純さんがさらに言葉を重ね、にやにやと笑顔を向けてくる。

「いや、その……、べつにいいじゃないですか！　というか、そっちこそおふたりで、デート中でしたか？」

「違う。ただの買い出しだ」

即答するテルリン。

なんだかちょっと、純さんが涙を堪えているようにも見えただけ。

「もつとも、もう終わったが。今日はこのまま社員寮に帰る予定なんだがな」

「ぼくは結局荷物運びだけですか……」

純さんがぼそりつつぶやく。

なるほど、そういうご関係ですか。

きよとん。

ふとホトトギスがぼけーっとこちらを見ていることに気づく。

おっと、そうだった。

「あつ、ごめん、ホトトギス。こちら、同じ会社の人たちで、純さんと保険医のテルリンだよ」

「ほむん。えっと、あちはホトトギスだわさ。アトリの、え〜つと、お友達？　だわよ」

ぼくがふたりを紹介すると、ホトトギスも自己紹介を返す。でも、そこでハツとなる。

そうだった、会社ではコードネーム・ホトトギスとして、宇宙人かもしれないっていう話になってるんだっけ……。

ちらりと、ぼくは純さんとテルリンの様子をうかがって見た。

「へえ、ホトトギスちゃんか、可愛い名前だね！　ぼくは東屋純、よろしくね！」

「ウチは照葉樹林、通称テルリンだ。よろしくな」

「あいつ、よろしくだわさ！」

どうやら、とくに気にしていないようだ。

と、不意にテルリンがぼくの袖をつかみ、道の脇まで引つ張り込んだ。

「ちょ……、テルリン、どうしたんですか？」

「あの子、噂の……？」

あ……やっぱり気づいてはいたんだ。

「えっと……、はい」

ぼくは観念して素直に答える。

「そうか。普通の女の子だな」

「はい」

もちろん、そうだ。宇宙人だなんて、そんなバカなことがあるはずはない。

「よう」

テルリンは頷きひとつ。

首をかしげるぼくに向かって、続けてこう言った。

「せっかくのデートだ、上手くいくように、ウチが手伝ってやる」

テルリンたちと別れ、ぼくとホトトギスは散歩を再開した。といても実際のところ、テルリンと純さんのふたりは、隠れてぼくたちについてきている。

テルリンは、手伝ってやる、なんて言っていた。でもべつにぼくはそんなこと望んでもいないし、だいたい見られていたら落ち着つかない。

だから断った。

それなのにテルリンは、「まあまあ、そう言うな。任せておけばいいのだ」と聞く耳を持たなかった。

ぼくはため息をつき、諦めて放っておいたのだけど、彼女たちはしっかりとついてきているようだった。

しかも、一応隠れているみたいではあるものの、さっきからテルリンの髪の毛がチラチラと見えている。

純さんは純さんで、どう考えても面白がってついてきているだけだろうし、テルリンの暴走を止めてくれるような期待はできない。

「わゝ、あのケーキ、美味しそうだわさ〜!」

食後すぐだというのに、ホトトギスはケーキ屋のショーウィンドウにかぶりついて、よだれを垂らしていた。

今さっき食堂を出るときに、「ふゝ、おなかいっぱいだわさ! もうなにも食べられないだわよ」なんて言っていたはずなのに。

女の子の場合、甘いものは別腹なんだろうけど……。ともかくここは、こう言う以外、ぼくの選択肢はなかった。

「買ってあげるよ」

「ほんと？　ありがとだわさ！」

ぼくの言葉に、ホトトギスは満面の笑みを向けてくれる。

ほわんと、温かな気持ちに包まれる。

彼女の笑顔を見るためなら、ぼくは悪魔にも魂を売るかもしれない。

大した品揃えもない、小ぢんまりとしたケーキ屋に入り、ホトトギスが選んだショートケーキをひとつ買う。

「アトリは、食べないのかや？　あちきのを、半分こ？」

ちよつと不満を含んだような表情で問いかける彼女。

「いや、ぼくはおなかいっぱいだから。これはホトトギスが全部食べていいからね」

「わーい！」

ホトトギスは素直に喜びを全身で表す。

正確な年齢も聞いてはいないけど、見た目からすれば十代後半、おそらくは十八歳前後と思われる女性だとはとうてい思えない、あどけない様子だった。

たったひとつだけのケーキだけど、それを紙の箱に入れ、さらに動いたりしないように紙製の仕切りを詰め込む店員さん。

箱の上部にある取っ手のようになっていいる部分を持ち、ぼくはなるべく斜めにしないよう気をつけながら歩く。

隣に寄り添うホトトギスは、じくじくじくじくとその箱を見つめていた。

ああもつ、またよだれ垂らしてるし……。

「うっ、あちき、我慢できない。すぐにケーキ食べたいだわさ」

うん、まあ……。言葉に出して言われなくても、彼女がそう考えているのは、丸わかりだった。

ふと視線をずらすと、曲がり角にある建物の陰からテルリンが顔を出していた。彼女のすぐ横には、純さんもいる。

そして、なにやら身振り手振りでぼくに伝えようとしているみたいだった。

テルリンが右手になにかを持っているような感じで、それを大きく開けた純さんの口の中に……。

つまり、ぼくがケーキを持って、ホトトギスに食べさせてやれ、と？

そんな恥ずかしいこと、できないってば！

……とはいえ、考えてみたら、他に方法はないかもしれない。

すでにホトトギスはぼくからケーキの箱を奪い取り、フタを開けて右手を突っ込もうとしていたのだから。

彼女が手づかみで食べ始めたら、どんな汚い食べ方をするか、わかったもんじゃない。

もちろん、そんなことを口に出して言ったりはしないけど。

「あゝ、ホトトギス、ストップ！　ぼくが持ってあげるよ」

そう言って、彼女からケーキの箱を奪い返す。

おもちゃを取り上げられた子供のように怒りの顔を向けてくる彼女の口もとに、ぼくはショートケーキの尖っているほうを差し出す。

ぱくつ。

ぼくがつかんでいるショートケーキに、笑顔でかぶりつくホトトギス。

なんだが、こっちのほうが恥ずかしくなってくる。

「うは、美味しいだわさ！ スウィートでデリシャスでトレボンでトレビアンだわよ！」

……甘くて美味しくて、とても美味しくて素晴らしい？

とりあえず満足してくれているのは、よく伝わってきた。

でも、ぼくがケーキを持ってあげていても、彼女の食べ方はあまりお上品とは言えず。

生クリームが口の周りにベツタリとくっついていた。

ハンカチを取り出そうとポケットに手を入れようとして、再び建物の陰から顔をのぞかせるテルリンがまた、なにかジェスチャーを……。

テルリンが純さんの顔に自分の顔を近づけ、舌を出してペロリと純さんの口の周りを舐めるような仕草を……。

って、そんなこと、できるわけないっての！

ハンカチを取り出して、拭いてあげよう。そう考えながら、手をポケットの中に滑り込ませる。

……。……。

ぼくの指先がつかんだのは、ポケットの内側の布地だけ……。

しまった、ハンカチ持ってくるの、忘れてた……。

だけど、いくらホトトギス本人が気にしていなさそうとはいえ、口の周りを生クリームまみれのままにしておくのも、問題だし……。



そうするとここは、テルリンの希望どおり、舌で舐め取るしかないのだろうか……。

じつと、ぼくはホトトギスを見つめる。

彼女は口の周りを生クリームだらけにしながらも、きよとんと小首をかしげ、ぼくを見つめ返してきた。

か……可愛い……。

でも、さすがに、口の、周りを、舐めるだなんて、そんなこと……。

真っ赤になって心の中で焦りまくっているぼくだったのだけど、すぐに気がつく。

べつに舌で舐め取る必要はない、ということに。

彼女がぼくの持っているケーキの最後のひと口を食べ終わると、ケーキを包んでいた紙を丸めて箱の中に捨てる。

ぼくはすかさず、すっ……と右手を差し出し、人差し指でホトトギスの口の周りを拭っていく。

微かに触れる彼女のやわらかな唇の感触にどきまぎしながらも、ぼくはくつついていた生クリームを綺麗に拭き取ることに成功した。まだちよつと残ってはいたけど、それくらいなら彼女自身が自分の舌で舐め取るとか、自分の手で拭うとかするだろう。

「あ……ありがとだわさ」

「いえいえ」

こんなの、いつもの盛大な吹きこぼしに比べたら、大したことないしね。ぼくはそう心の中でつけ加えていた。

うーん、だけど、指で拭った生クリームは、どうしようか。ハンカチもティッシュもないし、服で拭うわけにもいかないだろうし……

…。

建物の陰からは、またもやテルリンがなにやらジェスチャーをしていた。

彼女は自分の人差し指を、ぱくつとくわえた。

つまり、ホトトギスの口の周りについていたその生クリームを、食べちゃえ、と。

だから、そんなこと、できないってば！

あつ、そうか。箱の中に捨てた紙とか箱自体とかで、拭い取ってしまえばいいんだ。

と、ぼくが思い至った、その瞬間。

ぱくつ。

突然ホトトギスが身を屈めたと思ったら、ぼくの人差し指にしゃぶりついてきた。

「わっ!？」

さすがに驚いて、そして恥ずかしくて、でも右手を動かすこともできなくて、ホトトギスの成すがままのぼく。

彼女のやわらかい舌が指に絡みつく感触で、ぼくの顔は火が出そうなほど真っ赤になっていた。

ホトトギスはペロペロと舌を使ってぼくの指を舐める。

というか彼女は、ぼくの指についた生クリームを舐めているわけだけど……。

建物の陰から顔を出しているふたりが、生温かい笑顔をこちらに向けていた。

うつ、恥ずかしい……。

そんなぼくの思いなんて考えもしないのだろう、ホトトギスはぼくの指から口を離してその身を起こすと、

「ケーキは全部、あちきが食べていいって約束だったからね。残しちゃったらもったいないだわさ！」

満足そうな笑顔で言い放つのだった。

そのあとも、ぼくとホトトギスは商店街をひとしきり歩き回った。もちろんずっと、テルリンと純さんはこそこそ隠れてついてきていたわけだけど。

ともかくぼくたちは、ソフトクリームを買うために町に一軒だけあるコンビニへと足を運んだ。

それにしても、まだ食べるんだ、ホトトギス……。

歩き回ったとはいってもこんなに狭い商店街だし、サバの味噌煮定食とショートケーキを食べてから、まだ三十分程度しか経っていないというのに。

と言いつつ、今回はぼくの分も買ってあった。

べつに、それほど食べたかったわけでもないのだけど……。

コンビニに入ってソフトクリームを買おうとしているところで、入り口付近からのぞき込むテルリンのジェスチャーが見えた。

そのジェスチャーは、「ひとつだけ買って一緒に食べる」と語っていた。

そんなこと、できないって！

というわけで、ぼくはふたつのソフトクリームを買ってコンビニを出た。

コンビニから出たぼくたちは、公園へと向かう。ベンチに座ってアイスを食べようということだ。

休日の公園では、子供たちが無邪気で元気なはしゃぎ声を上げていた。

そんな中、ぼくとホトトギスは並んでベンチに座る。

「はい、ホトトギスはストロベリーチョコミックスソフトだよな。で、ぼくはこっちのバナラソフトっ」と

ビニール袋からソフトクリームを取り出すと、片方をホトトギスに手渡す。

クリームの部分にさらにコーンでフタをしてあったそのソフトクリームに、ホトトギスはそのままかぶりつく。

いつものことながら、目にも留まらぬ早業だ。

ぼくもバナラソフトの上にかぶせられたコーンを、一気にたいらげる。

まだ春とはいえ、五月も近づくと、それなりに汗ばむ陽気の日も増えてくる。

絶好のソフトクリーム日和と言えるだろう。

と、突然ぼくの視界に影が割り込んできた。

それは、ホトトギスの頭だった。

ぼくが目の前に持っていたバナラソフトに、ぱくりとかぶりついたのだ。

「ん〜、バナラも美味しいだわさ!」

「こ……こら、ホトトギス!」

「あつ、代わりにあちきの、どうぞ」

困惑するぼくの目の前に、彼女は自分の舐めていたストロベリーチョコミックスソフトを差し出してくる。

もちろん彼女は、全体的にペロペロ舐め回して食べていたのだから、ぼくがどこからかじりついてても、間接キスということに……。

ま、まあ、それくらい、べつに、戸惑うような、ことでも、ない

よね。

とかなんとか、頭の中ですっかり焦りまくりながら、ぼくは彼女の差し出したソフトクリームにかぶりつく。

ドロドロにとろけた食感が、口の中に広がる。ボクの食べていたバナラソフトはまだ、そんなに溶けていないというのに。

「ストロベリーとチョコとバナラと、三つの味を楽しめてお得な感じ」

ホトトギスはそう言って、ご満悦の様子。

ぼくのほうとしても、ある意味お得な感じだったのは確かなので、なにも文句なんてない。

気づけば植え込みの陰から、テルリンと純さんが生温かい表情でこちらに顔を向け、親指を立てて「グー」の合図を送っていた。

ソフトクリームを食べ終えたぼくとホトトギスは、そのままベンチに座ってゆっくりとしていた。

噴水の音が静かに響く。

辺りの景色はそろそろ、夕焼けによって赤く染まり始めていた。いい雰囲気、ということになるのだろうか。

いつのまにか、植え込みの陰にいたはずのテルリンと純さんの姿も見えなくなっていた。

さすがに気を遣って、帰ったのかな？

ま、あのふたりだって、いつまでものぞき見しているほど暇じゃな

いだろっ。

並んでベンチに座っている男女ふたり。

腰の横でベンチに両手を着いているぼくとホトトギスの手のひらは、今にも触れ合うくらいの至近距離にあった。

「あ……あのさ、ホトトギス」

「んみゅ？ どうしたかや？」

ぼくの声に、いつものように小首をかしげて見つめ返してくる彼女。

夕陽の赤さは、彼女の瞳や頬をも、美しく染め上げていた。思わず目を逸らしてうつむいてしまう。

「ん？ アトリ……？」

ホトトギスは首をかしげたまま、ぼくを見つめ続ける。

「あ、あのさ、ホトトギスって」

どこに住んでるの？ 雛森町のどこかだよな？

学生さんなの？ それとも働いてるの？

どうしていつも、おなかをすかせてるの？ ご両親は？

……聞いてしまったら、悪いかな？ でも、知りたいんだ。

それと……、

ぼくのこと、どう思ってるの？

聞きたいことの洪水が頭の中をものすごい勢いで流れていったものの、のどもとでせき止められてしまい、結局ぼくの口からは言葉の波が溢れ出ることはなかった。

と、唐突にぼくでもなくホトトギスからでもない言葉の波が、背後から押し寄せてきた。

「だ、もう！　じれったいな！　アトリ、おまえそれでも男か！？」

それはもちろん、テルリンだった。その横には純さんもいて、首をすくめていた。

どうやらふたりは、ベンチからも見える植え込みの陰から、ベンチの背後にある芝生へと場所を移動し、隠れてぼくたちの様子をつかがっていたようだ。

「ふたりとも、なにをしてるんですか!？」

ぼくは思わず立ち上がり、ふたりに向かって怒鳴りつけていた。そんなぼくに、テルリンはさらに声を荒げてまくし立てる。

「こんないい雰囲気だというのに、なにをもたもたしているのだ、おまえは！　もっとくっつけ！　キスしてしまえ！　というか、その先まで……!」

「ちょ……、なにを言ってるんですか!？」

焦るぼく。

だいたい、ホトトギスもすぐ横にいるわけだし。

ちらりと視線を向けてみると、彼女はなにがなんだかわからず、おどおどしているようだった。

「そうすれば、非常通信がだな……、っ!」

そこまで言って、テルリンはハツとして自分の口を押さえる。



でも、もう遅い。

非常通信……。彼女は今、確実にそう言った。

ぼくは以前セキレイから、宇宙人は強い感情によって非常通信が発動すると考えられている、ということを知っていた。

ホトトギスが泣くと宇宙船に通信が届いて、侵略が開始されるかもしれない、といった可能性があるという話だった。

だけど、強い感情といったら、なにも泣くことだけではないだろう。

恋愛感情だって、激しい感情のひとつだ。

つまり。

「テルリン、あなたは彼女が宇宙人だって前提で行動してますね！？」

ぼくの指摘に、テルリンは唇を噛みしめて口をつぐむ。どうやら凶星のようだ。

そうすると彼女は、以前に聞いた、会社内に発生しているという三つの派閥の中のひとつ、「泣かすなら、仲よくなるう、ホトトギス」を唱える、友好派だということになる。

彼女とともに行動しているのだから、おそらくは純さんも同じ派閥なのだろう。

テルリンと純さんは、ぼくとホトトギスを無理矢理にでもいいからくっつけて、宇宙人たちと友好関係を結ぶ布石にしようとしていたのだ。

「でもそんなこと、させないわよう」

「そういうことだ。仲よくするのは悪いことじゃないが、軽率な行

動は慎むべきだ」

不意に声が増える。

ぼくが振り向くと、そこにはゆりかもめとセキレイが立っていた。

「え？ どうしてここに……？」

「所長さんから言われてな、隠れて見ていたんだ。テルリンと純さんの行動が、なにかおかしい。そのことに所長さんは気づいていたのさ」

セキレイはぼくの問いに素早く答えを返す。

テルリンと純さんは観念したのか、黙ってうつむくのみだった。

「べつに所長さんはおふたりを罰するとか、そんな気はないんです。だから、なにも言わずに、このまま帰ってください」

ゆりかもめが、いつもの彼女からは考えられないほどの慈愛に満ちた声で促す。

テルリンと純さんは黙って頷き合つと、そのままきびすを返し、言われたとおり公園を出ていった。

「……任務は終了だ。アトリ……、またな」

「え〜っと、その……。ううん、なんでもない、また明日、会社でね」

セキレイとゆりかもめも、それだけ言うつと公園を去る。

あとには呆然としたままのぼくと、もっとわけがわからないであるうホトトギスのふたりだけが残された。

突然自分の名前が出て、そして宇宙人がどうのここの、といった

話が目の前で展開されていたのだ。

ホトトギスが混乱するのも当然だろう。  
ぼくはそっと、彼女の肩を抱き寄せる。

「気にしなくていいよ、ホトトギス」

「……………うん……………」

夕陽はいつのまにかその姿を隠し、周囲はもう、すっかり薄闇に包まれていた。

しばらく寄り添ったあと、ぼくたちも公園を出た。  
送っていくよ。

その言葉にホトトギスは首を左右に振り、いつもと同じように後ろ姿を見せると、ぼくの前から去っていった。

テルリンと純さんが引き起こした一件から、二日が経った。あれから、ふたりにはとくに変わった様子もなく、通常どおり勤務しているようだった。

友好派の派閥全体としてどうなのかはわからない。

テルリンも純さんもなにも語ろうとはしないから、ふたりが勝手に行動しただけなのかもしれないし、そもそもそういった派閥に属して上からの指示で動いたりする立場だったのかもわからない。

でも、所長さんもとくに咎めるつもりはないという話だったし、ぼくとしてもあまり気にしないほうがいいだろうと考えている。

そんなわけで、若干もやもやした思いが残りつつも、ぼくは自分の仕事をこなしていた。

長々と続く宇宙人警報レベル2の状況に、サイレンを鳴らし続けるのもうるさいからなのか、今ではすでにサイレンの音量も下げられ微かにしか聞こえない。

と、唐突に大型モニターがオペレーターの女性を映し出す。

「すべての部署に連絡です。しばらく続いていた宇宙人警報レベル2ですが、たった今、解除されました。すみやかに終了フェイズへと移行してください。サイレンの音量も戻し、終了フェイズの音を鳴らし始めます」

その通信のあとすぐに、終了フェイズを告げる静かなサイレンが、通常どおりの音量で流れ始めた。

「ありゃ、終わったんだね。超絶突然で、びっくりだよーう！」

ゆりかもめが、若干困惑しながらも、ぱつと笑顔になってはしゃいだ声を上げる。

「そうだな……。いや、今回は長かった」

セキレイも大きく伸びをしながら、安堵の息をついていた。もちろんぼくも、やっとのんびりとした気分に戻れることを心から嬉しく思っていた。

小さい音量に下げられていたとはいえ、ずっとけたたましいサイレンが鳴りっぱなしでは、どうしたって緊迫感が漂ってしまうのだから。

ぼくもゆりかもめもセキレイも、ぐったりと机に突っ伏した。なんか、一気にだらけてしまった気がする。

「みんな、お疲れ様〜！」

「長々と、よく頑張ったね」

しばらくするとドアが開き、ヒバリさんと雷鳥さんが部署に入ってきた。

その表情は実に晴れやかだった。

ふたりとも、ここしばらくは残業続きで、会社から近い社員寮暮らしとはいえ、ぼくたち下っ端と違って休みすらなく出勤していたのだ。ぼくたちにも増して、ホツとしているに違いない。

「所長さんからお許しが出たわ。明日からは今までの分、代休を入れてしっかり休んでいいわよ。もちろん、誰かひとりはお社するよ。うに上手く調整してほしいけど」

「やった〜！ 思いつきり、寝るぞ〜う！」

ヒバリさんの言葉に一番はしゃいだ声を上げたのは、ゆりかもめだった。

「一日中寝るつもり？」

「あつたりまえじゃん！」

「……そうですか……」

さすがは、なまけ者のゆりかもめだ。なんて言ったら噛みつかれるかな。

「アトリ、お前はどつするんだ？」

「ぼく？ うーん、そうだな……」

セキレイの問いかけに、ぼくは思考を巡らせる。

やっぱり、ホトトギスと一緒に出かけたいな。

あ……でも平日だから、会うこともできないか。連絡先、知らないしな……。

もしかしたらってこともあるし、とりあえず食堂とか商店街の辺りでも、うろつろしてようかな。

そんなぼくの顔を見て、なにを考えているのか推測できたのだから、  
うか、

「あの子に、会いに行くのか？」

セキレイはそう続けて問いかけてきた。

「ふんっ。こないだだって一緒にいたじゃん。超絶いやらしんだか

ら

なにやら不機嫌そうな顔で、ゆりかもめが突っかかってくる。

「い……いやらしいって、なんだよ。べつにぼくは……」

彼女に言い返そうとして、言葉に詰まる。ゆりかもめは黙ったまま、じとーっとした視線を向けていた。

「まあまあ。とにかく、休みを入れる日を三人で調整すること。おれとヒバリさんも、そのスケジュールを見て代休を入れさせてもらうから」

さすがに見かねたのだろうか、雷鳥さんが穏やかな声で話に割り込んできた。

「はい。わかりました」

ぼくたちは言われたとおり、代休の調整を始めた。

そしてぼくは、その次の日に早速休みをもらった。

昼近くに起きていつもの食堂へと向かうと、平日だということに、ホトトギスの姿があった。

もちろんいつもどおり、サンプルウィンドウにかぶりついて、よだれを垂らしながら。

「ホトトギスは、毎日ここでぼくを待ってるの？」

さすがにうぬぼれかも、とは思いつつも、そう訊かずにはいられなかった。

「んみゆ？ そんなことないだわさ。たまたまあちきがこの食堂に来ると、いつも決まってアトリが来てくれるんだわさ。……もしかして、アトリがあちきのことストーリーカーしてるんじゃない、なんて思ったりもしたけど……、違うよねん？」

「そんなこと、するわけないよ。そっか、でも、そうすると」

ぼくたちってすごく相性がいいのかもしれない。

そう言おうとして、ぼくは言葉を呑み込んだ。

いくらなんでも、恥ずかしすぎたから。

途中で言うのをやめたぼくを、いつものように首をかしげて見つめるホトトギス。

ああ、やっぱり可愛い……。

「さ……さあ、早く入って、ご飯にしよう！」

「うん、そうするだわさ！」

恥ずかしさを紛らわすため、ぼくは勢いよく年季の入った木製の引き戸を開けると、食堂へと足を踏み入れた。

もちろん食堂では、

白身魚定食をほおぼるホトトギスが、ぼくの言葉に大口を開けて答えを返し、

「ご飯つぶやら白身魚のフライやらほうれん草のおひたしやらを盛大に口から吹き飛ばし、



ぼくの顔やらお膳の上やらにぶちまける、  
といった、そんな日常のひとコマが展開されることになったわけ  
だけ。

いつもどおりっていうのは、やっぱりいいものだよな。

……若干、食堂のおかみさんに引かれているような気がしなくも  
なかったけど、ぼくはべつに気にしないのだった。

食事を終えたぼくたちは、いつもどおり商店街を軽く歩き回った。今日は比較的早めに食堂に行ったこともあり、まだ時間は二時前。せつかくだから、雞森山まで足を伸ばそう。

ぼくはそう提案してみた。

山を歩くことになるし、嫌がるかなという思いもあったんだけど、ホトトギスは笑顔で頷いてくれた。

というわけで、ハイキング気分で山道を歩く。

山道とはいっても、ぼくにとっては出勤するたびに通っている、慣れ親しんだ道。

ぼくには、上り坂を歩きながらも、ホトトギスを気遣う余裕があった。

「朝通ると鳥たちの声が響いたりして、とても清々しいんだけどね。昼間だとちよつと、暑いかな。ホトトギス、大丈夫？」

「んみゆ、大丈夫、だわさ。これくらい、へっちゃら、だわよ」

答える声は、息も荒く、途切れ途切れ。強がっているだけだといふのが、丸わかりだ。

やっぱり女の子には、ちよつとつらいんだな。

ぼくはそつとホトトギスの手を握り、歩調を彼女に合わせながら先導する。

ほどなく、汗ばみながら歩くホトトギスにも、景色を楽しむ余裕が出てきたようだ。

「うわ、町があんなに小さく見えるだわさ！ それに綺麗なお花がたくさん咲いてるだわよ！」

「うん、いい景色だよね。空気も澄んでるし、今日みたいに晴れて暖かな日って、ほんとに気持ちいいよね」

嬉しそうに景色を眺めているホトトギスを、ぼくは温かな気持ちに包まれながら眺めていた。

長いあいだ続いていた宇宙人警報が解除され、神素の噴出も止まり、久しぶりに自然な空が顔を出している。

まぶしいほどの青空が、ぼくたちを歓迎してくれているかのようになり、包み込んでいた。

雨が降っていたりすると、この辺りは涼しく……というよりも冷たいと思うくらいにまでなってしまう、歩くのも困難になるのだけだ。

「あつ、なんか建物が見えてきただわさ」

ふとホトトギスが山の上のほうを指差しながら言った。

「あれが、ぼくの通う会社だよ」

いつも通っている山道を彼女とふたりで歩いてきたわけだから、会社の建物が見えてくるのも当然だった。

べつに会社を見せたいと思って連れてきたわけじゃなかったけど、雛森山には雄大な自然以外なにもない。

ということと自然と、会社のほう向かっていたのだ。

もちろん、会社の敷地内にまで彼女を案内しようとは思っていない。

ホトトギスがどう思っているのか、いまいわからないけど、ぼくにとっては気になる女の子とふたりきりでのハイキングなのだ。

会社の人に見られたりするの、気恥ずかしいものがある。

とくに社員寮に近づくのは避けたかった。

今日はゆりかもめも休みを取って、社員寮でのんびりしているだろうから。

なんとなく、彼女と顔を合わせるのは、気まずく思えた。どうしてそう思うのか、自分でもよくわからないのだけだ。

暖かい日差しを受けながら、傾斜が比較的緩やかになる会社の敷地近くまで、ぼくたちは到達していた。

ここから見下ろすと、町並みがかすんで見えるほどだ。

ホトトギスがいたこともあり、一時間以上かけて、ぼくたちはここまで歩いてきた。

いつもよりゆっくりだったとはいえ、ぼくでもさすがにちょっと疲れを感じていた。

小柄なホトトギスのほうは、かなり疲れているのではないだろうか。

でも彼女は決して泣き言をこぼすことはなかった。意外と強情なのかもしれない。

と、突然。

ぼくの手が強く、下のほうに向かって引っ張られる。

いや、ホトトギスが、倒れたのだ。

「ちょっと……！ ホトトギス、大丈夫!？」

ぼくは屈み込んで、むき出しの地面に身を横たえた彼女に呼びかける。

額には汗が玉のように浮かび、息も荒く、眉根を寄せて苦悶の表情。

彼女の肩に手をかけ、優しく揺すってみるものの、ぼくの呼びかけには応えてくれない。

どうしよう……。。

山歩きで疲れただけだとは思うけど、様子がおかしいのは確かだ。もしかしたら、病気ということもあるかもしれない。

だけど、ぼくは信じていないけど、彼女がもし本当に宇宙人のスパイなのだとしたら、病院に連れていくのも問題があるだろうか……。

というより、彼女を抱えて山を下りるなんて、さすがに無理だ。

幸い会社が近い。

先日の件もあるし、気が引ける部分はあるけど、医務室でテルリンに診てもらうのが最良の選択だと考えられた。

ホトトギスの姿を会社の人たちに見られてしまうことになるけど、この際それは仕方がない。

ぼくは素早くホトトギスを抱え上げると、一路、会社の敷地内を目指した。

「どうでしょうか……?」

「うむ、ただの風邪だな。問題ない」

ベッドに横たわったホトトギスを診てくれたテルリンの声に、ぼくは安堵の息を吐く。

「でも、倒れるなんて、風邪とはいえ重症なんですか？」

安心はしたものの、ぼくの心配は消え去ったわけではない。  
つかみかからんばかりの勢いで、ぼくはテルリンに詰め寄る。

「いや、大丈夫だろう。もともと風邪気味だったところに疲れが重なって、足に力が入らなくなっていた、という感じのようだ」

テルリンの答えに、ぼくは再度、息をついた。

「もつとも、彼女が宇宙人だとしたら、どうなるかはわからんがな」

せつかく安心したというのに、テルリンはわざわざ不安材料を投げ込んでくる。

彼女としては、保険医としての意見を率直に述べているだけなのだろうけど。

「ま、そんなに心配するな。大丈夫だ。ちょうど今日はウチが泊まり込みの当直の日だ。このままここに寝かせて、ウチが朝までしっかりと看病してやるぞ」

「……あの……、ぼくもここに泊まったらダメでしょうか……？」

ぼくは今日、ホトトギスが風邪気味だったということに、まったく気がついていなかった。

もっと注意深く彼女を見ていればよかった。

後悔の念が押し寄せ、そう頼み込んだぼくの強い決意を含んだ口調に、テルリンは優しい笑顔を向けてくれた。

「それほどまでに心配しているのだな。ま、ウチは構わないぞ。当直だと見回りもしなくてはならないからな。そのあいだ、彼女がひ

とりきりになるのを避けるためにも、キミがいたほうがいいだろう」「  
「ありがとうございます！」

ぼくは素直に頭を下げた。

夜、ホトトギスは安らかに寝息を立てていた。

「それじゃあ、見回りに行ってくる。……寝てる彼女に、あんなことやこんなことをしても、ウチとしては全然構わないからな」

「そんなことしません！」

「ふっふっふ、ま、行ってくる」

医務室からテルリンも出ていき、狭い医務室の中にぼくとホトトギスのふたりだけが残された。

テルリンにはあんなふうに反論したけど、可愛い寝顔をさらけ出しているホトトギスを見ると、ついぼくもいけない考えを浮かべてしまう。

寝てるんだし、少しくらいなら……。

って、ぼくはなにを考えてるんだ！ ダメだつて！

かなりテンパった思考に顔を真っ赤に染めながら、ぼくはテルリンが戻ってくるのを待った。

寝間着なんてさすがになかったから、少しでも楽になるようにと、ホトトギスのブラウスのボタンは、襟から三つめまで外されていた。テルリンはホトトギスをそんな状態にして、心なしかニヤニヤと

した視線をぼくに向けながら医務室を出ていった。

布団がすっかりとかかっているから、問題はないと思っていたのだけど。

暑いのか汗ばむホトトギスが布団を押しつける。そのたびに胸もとが見えかけ、ぼくは慌てて布団をかけ直してあげる。

そんなことを繰り返しながら、ひたすら時間が過ぎるのを待っていた。

テルリン、早く帰ってきて……。そうじゃないとぼく、どうにかなっちゃんいそっだよ……。

だけどその願いは、なかなか叶ってはくれず。

結局テルリンが戻ってきたのは、それから二時間後のことだった。



テルリンは徹夜でホトトギスを看病してくれた。

「ぼくもホトトギスを見守ります、そう言ってみただけで、次の日の仕事に響くだろう、と諭された。」

それを言ったらテルリンもそうなので、と反論したのだけど、

「いつも適当に仮眠を取ったりしているからな。どうせここには、大して人は来ない。いくらでも休憩している時間はあるさ。」

と笑い返されてしまった。

「うーん、会社の保険医として、はたしてそれでいいのだろうか。」

そんなツツコミを呑み込みつつ、ぼくは空いているベッドで寝かせてもらうこととした。

次の日の朝。

ホトトギスはまだ目覚めていなかった。

さすがに心配になったけど、テルリンは呼吸も正常だから心配いらない、と容態を伝えてくれた。

「アトリ、キミには仕事があるだろう？ 彼女のことはウチに任せ、早く自分の部署に向かえ。」

そう言われたぼくは、素直に従う。

もちろんホトトギスのことが心配ではあったけど、だからといって仕事を休むわけにもいかない。

宇宙人警報がやっと解除され、今はゆったりとした、いわば待機状態にある。とはいえ、再び警報が発令されないと限らない。

代休消化のために出社人数が減っている今だからこそ、しっかりと自分の役割はこなす必要があるのだ。

「それじゃあ、ホトトギスのこと、よろしくお願いします」

ぼくはそれだけ言い残すと医務室を出る。

そして、まだ朝の涼しさが残る廊下をコツコツと微かな足音を響かせながら歩き、第三十八対策執行部へと向かった。

部署のドアを開けると、そこにはゆりかもめの姿だけがあった。

「あっ、アトリ、おはよう！ ……うわ、すごい寝グセ！」

彼女はぼくの顔を見るなり、目を丸くしてそう叫んだ。

そういえば、鏡も見ずに出てきてしまった。ぼくの髪の毛は、いたいどんな状態になっているのだろうか。

おそろおそろ頭を両手で触ってみる。

うっ、これは、確かにひどい……！

鏡を見るまでもなく、おそらくスーパーサヤ人のごとき形状だろつと想像できるなんて、どれだけ寝相が悪いんだ、ぼくは！

心配ごとがあると、寝相にまで悪影響が出るものなのかもしれない。

だけど今のぼくはそんなことに構っていられるような精神状態で

はなかった。

テルリンは大丈夫だと言っていたけど、それでもやっぱり、ホトトギスのことが心配だったのだ。

「……直さないの？ その寝グセ」

髪の状態に気づいたのに、そのまま席に座って突っ伏していたほくに対して、ゆりかもめが心配そうな声をかけてきた。

「……うん、べつにいいや」

ほくは抑揚のない声でそう答えることしかできなかった。

ゆりかもめも、それ以上、言葉をかけてはこない。

ただ黙って、ほくのほうを見つめているようだった。

やがて、ヒバリさんが部署に入ってきた。

セキレイと雷鳥さんは代休を取っていて、今日は入社してこない。

もっともふたりとも社員寮にはいるだろうから、緊急事態が起これば駆り出される可能性もあるのだけだ。

「アトリくん、ゆりかもめさん、おはよう」

「おはようございます」

朝の挨拶だけ交わし、沈黙が続く。

ヒバリさんも、ほくの様子がおかしいことには気づいているに違いない。

もちろん寝グセでおかしい、ということではなく、精神的に落ち込んでいるのを感じ取っているはずだ。

でも、声をかけていいものか、悩んでいる。そういうことなのだろう。

上司であるヒバリさんが入ってきたのだからと、さすがにぼくは机から顔を上げ、キーボードに手を置いてモニターに目を向けていた。

ヒバリさんは、ゆりかもめにアイコンタクトで、どうしたのかわかる？ といったことを尋ねているようだった。

声は出さず、ゆっくりとかぶりを振るゆりかもめ。

ぼくは視界の端でふたりの様子を見てはいたけど、自分からはなにも言わなかった。

しばらくして、ヒバリさんが声をかけてくる。

「アトリくん。どうしたのかしら？ 悩みごとなら、もしよかったら相談に乗るわよ？」

沈黙に耐えきれなくなったから、というわけではなく、自分の部下が悩んでいるのなら力になりたい、といった思いからなのだろう。そんなヒバリさんの厚意を、無下にすることもできない。

「ありがとうございます。実は」

ぼくは素直に、昨日ホトトギスと会社の近くまで来たところで彼女が倒れ、今は医務室で寝ているということを伝えた。

「……なるほど。つまりアトリくんは、ホトトギスさんのことが心配で仕事が手につく状態じゃない、ってことね」

ヒバリさんの声は、ぼくを責めるようなものではなかった。それどころか逆に、優しさを多分に含んだ、温かな声だった。

「ここは大丈夫だから、彼女のそばについてあげたら？」

そんな気遣いの言葉すらかけてくれた。  
でもぼくは、甘えるつもりはない。

「いえ、仕事はしつかりしますよ。セキレイも休みだし、油断はできないですから。テルリンが見てくれますから、ホトトギスは大丈夫です、絶対」

それは、自分に言い聞かせているという意味合いのほうが強かったのかもしれない。

「……強がる必要はないのに」

ゆりかもめが、ぼそりとつぶやく。

ただ、そんな彼女の顔は、苦味を堪えているような複雑な表情をたたえていた。

「わかったわ、仕事、頑張ってるね。でも、どうしても気になるようなら、いつでも言ってる」

一方のヒバリさんは、優しくそう微笑みかけてくれた。

業務時間が終わると、ぼくはそそくさと部署を出て医務室へと向かった。

ドアを開けて医務室の中に入ると、ホトトギスの笑顔が出迎えて

くれた。

「アトリ、お帰りだわさ！」

「……うん、ただいま」

なんかちょっと違うのでは、と思わなくもない挨拶を交わすばかり。

彼女の笑顔の魔法で、ぼくの心はほわんと一瞬にして温まる。そんなぼくに、テルリンが声をかけてきた。

「アトリ、来たな。見てのとおり、彼女の意識は戻った。だが、念のためしばらく安静にすべきだ。もう数日ほど、ここでゆっくり休んでいってもらおうつもりだ。異存はないな？」

「……はい、わかりました。ぼくもまた、ここに泊まります」

「ああ、わかった」

こうしてぼくとホトトギスは、二日目の医務室の夜を迎えることになった。

ぼくとホトトギスはまた、医務室に泊まることになったわけだけ  
ど。

さすがにふたりきりで泊めるわけにもいかないからか、当直では  
なかったものの、テルリンも医務室に泊まってくれた。

「今日はウチも寝かせてもらうつもりだが、ベッドはふたつしか  
ない。というわけでアトリ、キミは彼女と一緒にベッドで寝たまえ」

と言われたのだけど、ひとり用のベッドなのだから、それはいく  
らなんでも厳しい。

そんな狭いベッドでホトトギスと密着しながら寝るといふ状況に、  
惹かれるものがあるのは確かだったのだけど。

でも、風邪で倒れた彼女をゆっくり休ませることが先決なのだか  
ら、ここはぼくが犠牲になるしかないだろう。

医務室には、小さなソファも置かれていた。足を伸ばしたりは  
できないけど、ぼくはそこで寝ればいい。

テルリンにそう答えたら、「チッ、つまらん」と舌打ちされてし  
まった。

それはともかく、次の日。

始業時間の十分前に目覚めたぼく。

ホトトギスはこの時間だと、やっぱりまだ寝ているようだった。  
というかテルリンすらも、豪快にいびきをかきつつ眠っていた。

そんなふたりを残し、ぼくは医務室を出る。

今日は一応鏡をのぞき込み、軽く手グシで髪型をセットしてきた。

もともと大してオシャレには気を遣わないぼくではあるけど、昨日の寝グセはさすがにひどすぎたと反省していたのだ。

ぼくは第三十八対策執行部のドアを開けて中に入る。

今日はゆりかもめもセキレイも代休を取っているはずだから、もしかしたら誰もいないかも。

そう思いながら部署に入ったのだけど、中にはふたつの人影があった。

ヒバリさんと雷鳥さんだった。

「あつ、アトリくん、おはよう」

「おはようございます」

ふたりとも、すでに席に着いて仕事を始めているようだ。

ぼくもそそくさと自分の席に着き、ときはきと準備を進めると、作業を開始した。

それにしても、ゆりかもめとセキレイが休みだと、上司がふたりに対して部下がひとりという比率になる。

べつにつるさく言われたりするわけじゃないけど、さすがにちょっと緊張するというか、どうしても気になってしまふ。

そんなふうを考えていると、

「アトリくん、ちょっといいかしら？」

ヒバリさんが真面目な表情でそう尋ねてきた。

顔を上げてヒバリさんのほうに目を向けてみると、彼女の隣に座る雷鳥さんもぼくをじっと見据えていた。

「えっと、はい。……どうしたんですか？」



少々戸惑い気味のぼくに、ヒバリさんは若干声のトーンを落として続ける。

「実は、ホトトギスさんのことなんだけど……」

彼女が言うには、ホトトギスの体調が悪いのはただの風邪ではなくて、地球から離れていった宇宙人部隊との通信が途絶えたから、という可能性があるのだという。

もちろんそれは、彼女が宇宙人のスパイだということを前提とした憶測だ。

ヒバリさん自身は、そう思っているわけではないとつけ加えていたけど。

ともかくそういった可能性を考え、どうして通信が途絶えたのか詳しく調べる必要があると、友好派と過激派の人たちが動き出したらしい。

先日まで発令されていたレベル2の警報。

その原因となっていた宇宙人の部隊は、地球から離れていったはずだ。だからこそ、警報は解除されたのだ。

だけど、もしホトトギスが宇宙人のスパイだったとしたら、下手に手出しするのは危険を伴う。

場合によっては、せっかく地球から離れていった宇宙人たちが戻ってくることも考えられるだろう。

「だからね、ホトトギスさんをどこかに匿うのがいいと、わたしは思うのよ」

ヒバリさんはそう言った。

「今はこの会社の医務室にいるけど、ほら、アトリくんもこのあいだの件は覚えてるでしょ？ テルリンは、友好派の一員なのよ。このまま彼女にホトトギスさんを任せておくのは、危険だと言わざるを得ないわ」

言葉を返すことができないでいるぼくに対して、ヒバリさんは矢継ぎ早に状況説明を重ねる。

彼女の隣の雷鳥さんは、黙ったまま、じつとぼくに視線を向け続けていた。

「……えっと、今のままじゃ危険、ってことですよ？ でもそれじゃあ、どうすればいいって言うんですか？」

どうにかぼくの口から飛び出した質問にヒバリさんは、待つてましたと言わんばかりの早業で答えを返してくる。

「大丈夫よ、わたしたちに任せて。雛森町にわたしの親が経営しているマンションがあるの。そこに部屋を用意してあるわ。ちょうど空き部屋があったからね。セキュリティもしっかりしてるマンションだから、会社内にいるよりも安全なはずよ」

「周囲に人が大勢いる場所ってことにはなるけど、彼女を狙っている派閥は、この会社の人間と、会社が密に連絡を取っている政府、あとは各国の首脳陣の中にいるということになる。寂れた田舎町とはいえ、それなりに人のいる町の中では、そう簡単に手出しはできないはずだよ」

ヒバリさんの声に続いて、これまで黙っていた雷鳥さんも解説の言葉を連ねた。

「そういうわけだから、わたしたちのほうでホトトギスさんをマン

シヨンへ連れていこうと思うの。もちろん仕事があるから、わたしの親に連絡して、連れていってもらうことになるけど。アトリくん、それでいいかしら？」

じつとぼくの目を見つめ、ヒバリさんがそう確認を求めてくる。

「大丈夫、ぼくたちに任せておけば安全だよ」

雷鳥さんもぼくを見据え、いつもどおりの穏やかな声を響かせる。

「……はい、わかりました。ホトトギスのこと、よろしく願います」

いつも温かく気遣ってくれる上司ふたりからの提案に、ぼくは素直に頷きを返していた。

「ええ、任せておいて。マンションの場所は教えておくから、仕事が終わったら向かうといいわ」

そう言って、プリントアウトしてあった地図をぼくに手渡しヒバリさん。

「それじゃあ、わたしたちはこれから会議だから」

「アトリくん、ひとりだけになるからって、サボったりせずに仕事をしようにね。多少のんびりペースでもいいからさ」

ぼくが肯定の意思を返すやいなや、ふたりは素早く席を立つ。

「あ……はい。行ってらっしゃい」

「今日は戻ってこないから、終業時間になったら帰っていいわよ。」

すぐにもホトトギスさんに会いたいでしょ？ マンションに行っ  
てあげてね」

ヒバリさんはそう言い残すと、雷鳥さんを従えて部署を出ていっ  
た。

キーボードを叩くカタカタという音だけが響く中、第三十八対策執行部のドアが唐突に開かれた。

「おや？ 今日のアトリくんだけですか？」

「あ……はい」

部署に入ってきたのは、所長さんだった。

いつものようにゆっくりと社員たちのお喋りに興じるつもりだったのだろう。

ぼくひとりだけだとわかってても、その行動に変わりはないようで、所長さんはゆったりとした動作で「所長席」に座る。

所長さんは、昨日は来なかったけど、もちろんそういう日だってある。さすがに毎日来てもいられないだろうし。

そう思っていたのだけど、どうやら昨日、所長さんは体調を崩していたらしい。

「わたしはもう、若くないですからね。アトリくんはまだ若いですが、油断は禁物です。体調管理には気をつけてくださいね」

「はい」

「ところで……どうかしたのですか？ 少々気分が沈んでいるように見受けられますが」

コーヒーをすすりながら、穏やかな表情でそう尋ねてくる所長さん。

自分の体調の話をしながらも、ぼくの様子を観察していたのだ。のほほんとした感じに見えて、結構鋭いんだよな、この人。だか

らこそ、所長という地位に立っていられるのだろっけ。

「はい、実はホトトギスが……」

ぼくは素直に今までの経緯を話した。

雛森山を歩いているときにホトトギスが倒れて医務室に連れていったこと、風邪のようだったけど念のためしばらく安静にさせたこと、でも友好派や過激派に狙われる可能性を考慮してヒバリさんがマンションの部屋を用意してくれたこと、そのマンションにヒバリさんのご家族がホトトギスを連れていく手はずになっているということ。

所長さんは時おり相づちを打ちながら、ぼくの話聞いていた。

ぼくがホトトギスを心配していて気が気じゃないことを、理解してくれたのだろう。ぼくがそこまで話し終えると、

「すぐにでも彼女のもとへ行ってあげたほうが、いいのではないですか？」

と言ってくれた。

「いえ、でも仕事がありますから」

「……そうですか」

ぼくの答えに、所長さんは頷いて再びコーヒーをすする。

ただその顔に浮かぶ表情には、なんとなく困惑の色がうかがえるようにも思えた。

と、そのとき。

突然、壁に取りつけられた大型モニターに映像が映し出され、耳

をつんざくような大声が響き渡る。

「おい、神仙寺くん！ 聞こえているか！？ わたしだ！」

大型モニターに映し出されたのは、このあいだも通信してきた防衛大臣さんだった。

「聞こえていないのか！？ 緊急事態だ、早く応答しろ！」

怒鳴り散らす防衛大臣さん。

どうやら前回と同様、間違えて雛森支社にある全モニターへの通信モードとなっているようだ。

顔を真っ赤にしている防衛大臣さんの様子を見るに、早く応答しないと卒倒してしまいそうなほどだった。

とはいえ、この通信モードの場合、応答できるのは所長室にあるマイクからだけということになる。

「はあ、仕方ありませんね。ちょっと行ってきます」

所長さんは呆れ顔でため息を漏らしながら、そう言い残して部署を出ていった。

「おい、神仙寺くん！ またトイレか！？ いつでも応答できるように、秘書やオペレーターは常時待機させておくべきなんじゃないのか！？」

防衛大臣さんの怒号はなおも響き渡っていた。

この雛森支社には、秘書はいないものの、オペレーターが常に対応できるようになっている。

だけど、自分が間違った通信モードにしているから、所長さんが

自室にいないと応答できない、というだけなのだ。

防衛大臣さん本人は通信モードが間違っていることに気づいていないわけだから、こんなふうには怒っているのもわからなくはないのだけだ。

自分のミスだとあとから知ったとしても、反省なんてしないんだろうな。

防衛大臣という立場にいる人に対して失礼かもしれないけど、あの怒鳴り方から考えると、ぼくにはそうとしか思えなかった。

やがて、所長室に着いたのだろう、所長さんの声が大型モニターのスピーカーから聞こえてきた。

「これはこれは、防衛大臣殿。お待たせしました。ちょっと、トイレに行っておいてね」

前回の通信対応のときと同じく、所長は開口一番、そう言った。

「神仙寺くん！ いつもいつも、対応が遅すぎるぞ！ どうなっているんだね！？」

「いやいや、失礼しました。それはともかく、今日はどういったご用件ですか？」

防衛大臣さんの怒りを、いつもどおりの落ち着いた物腰でするりとかわす所長さん。

こういった対応をすると火に油を注いでしまいそうだ、ぼくは心配になっていたのだけだ。

どうやら本当に緊急事態だったようで、防衛大臣さんはどうにか怒りを抑え、通信してきた理由を語り始めた。

今までの勢いと変わらない、怒鳴りつけるような物言いで。



「コードネーム・ホトトギスの件だ！　まだ各国首脳陣の一部しか知らない極秘事項のばずだったが、どういつわけか各国の政府内には広く伝わってしまったらしい。とくに過激派に属している国が、そんなスパイ宇宙人なんて即刻殺してしまえと、迫ってきているんだ！」

え？

ぼくの心臓が、ドクンと大きく鼓動を高鳴らせる。  
ホトトギスを、殺してしまえ？

「そんなこと、ダメに決まってるじゃないか！」

思わず席から立ち上がり、ぼくは叫んでいた。

もちろん、モニターに映し出された防衛大臣さんに、ぼくの声が届くはずもない。

だけど、所長さんがぼくの思いを代弁してくれた。

「はっはっは、そんなこと、できるわけではないではないですか」

まったく、なにを言っているのやら。

そんな嘲笑染みた言葉を返す所長さんに対し、防衛大臣さんはさらなる怒鳴り声を上げる。

「言われなくても、わかっている！　だがな、そういうことを躊躇なくやってのける国もあるのだ！　コードネーム・ホトトギスの保護はそちらに任せているのだからな、なにかあつたら大問題となる！　それをしっかり心に留めておきたまえ！　以上だ！」

一方的にまくし立てた防衛大臣さんは、言い終えるやいなや、さつさと通信を切ってしまった。

「ふう、相変わらずですね、あの人は」

思わずこぼれたのだろう所長さんのつぶやきが、マイクに拾われ微かにスピーカーから聞こえた。

しばらくして、所長さんはぼくの部署へと戻ってきた。

どっこいっしょと声を出して、所長席に座る。

「アトリくん、見ていましたね？」

「……はい」

さっきの通信で防衛大臣さんは、ホトトギスを殺してしまえと迫ってきている過激派の国もある、と言っていた。

そのことを気にしているのが、ぼくの表情からにじみ出ているのだろう。

所長さんはそんなぼくを気遣い、真面目な口調で諭すようにこう言った。

「大丈夫です、安心してください。ホトトギスさんはわたしたちが守りますよ」

ぼくは黙ったまま所長さんを見つめ返すと、大きくひとつ頷きを返す。

すると所長さんは、いつもの穏やかな、それでいて心強い笑顔を返してくれた。

終業時間を告げるベルの音が響き渡る。

ぼくは素早く作業を終了し、そそくさと部署を飛び出した。

最後に部署を出る人が戸締りをする決まりになっている。ぼくはドアのカギを閉めながらも、心はずでにホトトギスのもとへと飛んでいた。

急ぎ足で廊下を駆け抜け、一目散に医務室へと向かう。

ヒバリさんの親が来てホトトギスを連れていったはずだけど、そのときの状況とホトトギスの容態がどうだったのかが気になっていた。ぼくは、とりあえずテルリンに話を聞いてからマンションに行こうと思ったのだ。

だけどぼくが医務室に着くと、中はもぬけの空だった。

というか、医務室に誰もいないって、それは問題ありなんじゃ？

職務放棄？

そうも思っただけで、テルリンはホトトギスとぼくのために、二日連続で泊まり込んでいたことを思い出す。

疲れが溜まって、社員寮へと帰ったのかもしれない。どうせあまり人も来ないと言っていたし。

もしそうだとしても、代わりの人を待機させるか、せめてドアに貼り紙でも残しておくべきでは、とは思っけど。

ともかく、テルリンがいないのなら、ぼくがここにいっても仕方がない。

ホトトギスの姿がすでにない以上、彼女はヒバリさんの親が経営しているというマンションに連れていかれたあとということになる。

ぼくは医務室を飛び出すと、一路、雛森町にあるマンションへと向かった。

薄暗がりから宵闇へと変わりゆく山道を歩き、町明かりが視界に迫ってくる。

いくら下り坂になるとはいつても、そうそう山道を全速力で駆け抜けることなんてできない。

それに、辺りは暗い。足もとにも気をつける必要がある。

まだ真つ暗とまではいかないものの、念のため懐中電灯で足もとを照らして歩く。

もどかしさでいっぱいになりながらも、ぼくはなるべく急ぎ足で山道を下りていった。

雛森町に入れば、住宅から漏れる明かりや街灯がある。

とはいえ、家はかなりまばらな配置だし、街灯もそれほど数がないのが実情だ。

商店街ならいざ知らず、町の外れ付近は、夜ともなるとかなり薄暗い。

そんな中を、ぼくは走り抜けていく。

たまに街灯の下でヒバリさんから渡されていた地図を確認し、マンションを目指す。

ぼくの住むアパートからは、結構な距離があった。

商店街を挟んで、雛森町の外れの反対側、といった感じだ。

やがて、目的地にたどり着く。

マンションと呼ばれているだけあって、周りの家々と比較すればそれなりに豪華には見える。

明かりが点いていない部屋が大半だから空き部屋が多そうではあるけど、一応五階建ての建物となっていた。

高層というほどではないものの、これくらいの高さがある建物は、こんな田舎町には不釣り合いかもしれない。

中心部ではなく町の外れにあるのは、個人所有のマンションのようだし、土地の値段が安い場所を選んだとか、そういった理由なのだろう。

ともかくぼくは、地図に書かれていたホトトギスのために用意されたという部屋へと向かう。

404号室。

なにやら、縁起の悪そうな部屋番号ではある。

そういった番号は欠番として使われないのが一般的なような気もするのだけど。

四階までエレベーターで上り、部屋の表札を確認していく。

401号室、402号室、403号室、

そして、405号室……。

あれ？ 404号室がない？

もう一度戻って確認しても、403号室の次は405号室。

部屋は一列に並んでいるため、別の場所にある、というわけでもなさそうだった。

念のため四階を隅々まで回って確認してみるも、やっぱり404号室はない。

403号室に明かりが点いていたのでチャイムを押してみる。

出てきた人に404号室のことを話すと、やっぱりそんな部屋は存在しないという。

嫌な予感がした。

403号室の人から、大家さんが五階にある501号室に住んでいるから聞いてみるといいと言われ、ぼくは大家さんのもとへと急いだ。

ヒバリさんの言葉どおりなら、彼女の親、ということになるはずだけど……。

表札はヒバリさんの名字、「古女」ではなかった。

チャームを押して、出てきた大家さんにヒバリさんのことを話してみたけど、案の定、知らないという。

これはいったい、どういうことなんだ？

マンションの住所はここで間違いない。マンションの名前も、間違っていない。

それなのに、ホトトギスを匿うはずの部屋はなく、大家さんもヒバリさんとは関係がない人だった。

嫌な予感は、どんどんと膨れ上がる。

ぼくはきびすを返し、会社へと舞い戻った。

会社に戻り、第三十八対策執行部を目指す。

ヒバリさんと雷鳥さんは会議だと言っていた。

終業時間まで戻ってはこなかったものの、会議のあとには部署に戻るはずだった。

だけど、カギを開けて入ってみても、ぼくが出てから誰も入ったような形跡はない。

ホワイトボードのヒバリさんと雷鳥さんの欄も、「会議中」のままだ。

ぼくは会社内を駆け回る。

何ヶ所がある会議室を訪ねてみたけど、どこも会議は終わり、ひっそりと静まり返っていた。

どうなっているんだ？ ホトトギスはいつたい、どこへ？

疑問符が頭の中を飛び交う。

と、そんなぼくの目の前に、すっ……と人影が現れた。

「所長さん……」

そう、それは所長さんだった。

でもその顔に、いつものような穏やかな笑顔はない。

ぼくの声に答えるように、所長さんはこう言った。

「どうやらホトトギスさんは、ヒバリさんたちによって、連れ去られてしまったようです」

「いったい、どういうことなんですか？」

ぼくは所長さんに問いかけた。

「とりあえず、座りましょうか」

いつもどおりの笑顔はないものの、所長さんは落ち着いた様子で所長席に腰を落とす。

慌てても仕方がない、そう悟っているのだろう。

所長さんの言葉に従い、ぼくも自分の席に着いた。

ずずず。

コーヒーをひと口すると、所長さんは語り始めた。

「ヒバリさんはどうやら、過激派の一員だったみたいです。もちろん、いつも彼女をサポートしている雷鳥くんもね」

ふたりは秘密裏に過激派としての活動をしていた。

ホトトギスをどうにかしようと、ずっと狙っていたと考えられる。

彼女がぼくと会っているのは知っていたのだから、そのときや、別れたあとなんかを狙えばいいのでは、と思ったのだけど。

過激派がどうしてそうしなかったのかは、所長さんにもわからないう。

「さつき防衛大臣さんが通信で言っていた、ホトトギスを殺してしまえと迫ってきている過激派の国と、ヒバリさんたちは共謀しているということなんでしょうか？」



「うーん、それはなんとも言えませんね……。ただ、もしそうなら、行動が早すぎます。防衛大臣からの通信よりもずっと前から日本に入っていたと考えれば、それもありえることだとは思いますが……」

そうではないことを願います。所長さんは苦い表情でそうつぶやいた。

所長さんにとっては、ヒバリさんも雷鳥さんも信頼していた社員なのだ。

彼女たちの普段の活躍ぶりを考えれば、有能な社員という認識だつたに違いない。

若いからという理由で、三十八番目である末端の部署を割り当てられてはいたけど、所長さんがヒバリさんたちの能力を高く評価しているのはよくわかった。

だからこそ所長さんは、他の部署よりも頻繁にぼくたちの部署へと足を運んでいたのだ。

今回の件が解決したあと、できればあまり厳しい処分にはしたくないという思いがあるのだろう。

テルリンと純さんの件でも、なにもお咎めはなかった。

もちろん今回のことは、テルリンと純さんのときとは規模も目的も違う。

泣かすなら、殺してしまえ、ホトトギス。

そう主張する過激派による行動だと考えられるのだから、危険な行為を伴う可能性も高い。

とはいえ、ヒバリさんも雷鳥さんも、ぼくにとって頼りになる尊敬すべき上司だったのだから、できれば穏便に解決してもらいたいところだ。

「でも所長さん、それならば私たちは、どうすればいいんでしょう？」

ヒバリさんたちがホトトギスを連れ去ったとして、いったいどこへ行ったのか。

それがわからなければ、探しに出ることすらできない。

ぼくには思い当たる場所がまったくなかったから、あとは所長さんに頼るしかなかったのだ。

だけど。

「わたしにも、わかりませんね……。せめてなにか、犯行声明などでも残してあればと思ったのですが、そういったものもまったくないのですよ」

所長さんは、ぼくがマンションに向かっているあいだにおかしいと気づき、ホトトギスを看病していたテルリンに話を聞こうと、医務室へと向かった。

医務室へはその前にぼくもに行っていたわけだけど、やっぱりテルリンはいなかったという。

それから、ヒバリさんたちが出席していたはずの会議室にも行って見たものの、やはりなんの痕跡もなかった。

目撃者くらいいいものかと、会社に残っていた人たちにも話を聞いてみたらしい。

ただ、もともとレベル2の警報が解除されたばかりで休んでいる人が多い上に、残業する必要もないのが現状。有力な情報が得られることはなかった。

「そういったわけで、わたしとしても打つ手なし、お手上げ状態なんですよ……」

項垂れながらそうつぶやく所長さんの声が静かに響いた、その直後。

ぼくの携帯電話が鳴った。

ポケットから取り出した携帯電話の画面に表示されていた名前は。

「もしもし」

ぼくは急いで電話に出た。

「アトリくん、わたし、ヒバリよ」

「ヒバリさん！」

そう、それはヒバリさんだった。

所長さんも頭を上げ、じっとこちらに目を向けていた。そして軽く頷く。

話を続けてください。任せましたよ。

所長さんの瞳が、そう語っていた。

「今、どこにいるんですか！？ というか、その……」

ヒバリさんがホトトギスを連れ去った犯人。それは、状況を考えればほぼ間違いないと思われた。

でも、もしかしたら違うかもしれない。

頼んでおいた親が来られなくなり、代わりにヒバリさんたちがホ

トトギスを連れていこうとして、過激派の国によって一緒に拉致されてしまった、といったような可能性も考えていた。

もしそうだとしても、マンシヨンの大家さんがヒバリさんとは親でも親戚でもない、赤の他人だったことの説明がつかないのだけど。

ともかく、ヒバリさんはなにもやましいことなんて、していないのかもしれない。

そう思いたいという部分もあって、ぼくは一瞬言葉を詰まらせる。だけど、今は状況をしっかりと把握することが先決だ。

ぼくは思い直し、一番高い可能性を前提とした言葉をヒバリさんにぶつける。

「ホトトギスはどうなっただんですか!？」

できれば、「一緒に捕まってしまったから、助けに来て。どうにか抜け出して、今、電話してるのよ」といった答えが聞きたかった。でもその望みは叶うことのないまま、霧散して消えてしまう。

「ふふっ、すぐそばにいるわ。ロープで縛って、猿ぐつわをはめてね。だから声は聞かせてあげられないけど」

微かな笑い声を響かせながら、ヒバリさんは言った。

信じたくなかったけど、彼女がホトトギスを連れ去ったということに、どうやら間違いはなさそうだ。

「アトリくん、もうすでに所長さんから話を聞いてるんじゃないかしら? わたしは、過激派のメンバーなのよ」

トドメとばかりに、ヒバリさんは迷うことなく宣言した。

もう、疑いようもなかった。

「それでね、こうして電話したのは、あなたに来てほしいからなの。もちろん、ひとりだけでね」

とりあえず、少し考える時間を与えるわ。またあとで電話をかけるから。

そう言い残して、ヒバリさんからの電話は途切れた。

「所長さん」

ぼくは、黙ったまま険しい視線を向けていた所長さんに、電話の内容を伝えた。

おそらくは伝えるまでもなく、わかっていたのだろう。

所長さんの表情は、まったく変わらなかった。

ぼくは話し終えるやいなや、今度は自分の意思を伝える。

「所長さん、ぼく、行こうと思います」

「アトリくん、これは罠です。ここはまず、様子を見てから、じっくりと対策を練ったほうが……」

「そんな余裕はありません！」

所長さんの反論に、ぼくは思わず声を荒げる。

いくら相手がヒバリさんたちだとはいっても、ホトトギスの命がかかっているのだ。

悠長なことをやっているあいだに、手遅れにならないとも限らない。

最近何度も会って、ぼくがホトトギスに惹かれているというのも、もちろんある。

でも、それだけじゃない。

もしそんなことになったら、ヒバリさんたちだってどんな処罰を受けるかわからない。

「しかしだね、アトリくん、自ら罠にかかりに行くような無謀なことを……」

「ホトトギスは、ぼくが助け出します！」

なおも止めようとする所長さんに、ぼくは立ち上がって大声で叫び返す。

その力強さで、ぼくの決意のほどが伝わったのだろう。  
所長さんは真面目な顔で頷くと、こう答えてくれた。

「……わかりました、行きなさい。任せましたよ」  
「はい！」

勢いよく返事をし、ぼくは部署を飛び出した。

会社の敷地から外へ出たところで、携帯電話が着信音を響かせる。  
素早くポケットから取り出すと、ぼくは電話に出た。

「はい、もしもし」  
「ヒバリよ」

それはヒバリさんからだった。

もちろん、あとで電話すると言われていたわけだし、登録してある名前が携帯電話の画面に表示されてもいるのだから、名乗られるまでもなく、わかつてはいたのだけだ。

「アトリくん、答えはだいたい予想がついているけど、とりあえず訊くわ。あなたひとりで来てくれるかしら？」

ヒバリさんの問いかけに、ぼくは迷うことなく答えを返す。

「はい。今、会社の外に出たところですよ」

「ふふっ、行動が早いわね。それじゃあ、これから山をさらに雛森町とは反対方向へ進んでちょうだい」

「山の奥のほうですよね？ 会社の訓練施設辺りを目指せばいいんですか？」

「いいえ。そこを越えた、もっと先よ。そうね、また訓練施設を越えるくらいの時間に連絡するわ」

プツッ。

通話はそこで途切れた。

ぼくたちの会社は、かなり広い敷地を持っている。

いつもぼくたちが働いている雛森支社の建物と社員寮以外にも、訓練用の施設や倉庫などが、山の中の何ヶ所かに点在しているようだ。

今ではもうほとんど使われていないような建物が、いくつも山の中に存在しているという話は聞いていた。もっとも、ぼくには詳しいことはわからないのだけだ。

ヒバリさんとの通話にも出てきた訓練施設というのは、主に研究所から雛森支社と名前が変わった頃の名残で、今はあまり使用されることのない場所だ。

電力会社の新入社員にとっては、電柱など高い場所に登る訓練なんかも必須となっている。そういった訓練を行っていたのが、この訓練施設なのだ。

現在の雛森支社に関してだけ言えば、「リバーシブル・アース」専用の施設という位置づけになっているため、そういった訓練は免



除されているのだけだ。

だからこそ、ぼくはこの支社への勤務を希望した、というのもあったりする。

それはともかく、訓練施設にはトレーニングルームなんかもあり、今でも体力作りのために通う人はちらほらといるらしい。

古くて薄汚れているとはいえ、会社の施設ということタダで使うことができるため、なかなか便利そうではある。

ちよつと雛森支社の建物や社員寮から離れているのが難点だけど、山道を往復するのも訓練や体力作りの一環とも言えなくもないだろう。

そういえばゆりかもめが、ダイエットのために通おうかな、なんて言っていたっけ。結局、「面倒だから行くのやめたよ〜う」と、あっさり断念していたけど。

ともかく、ぼくは懐中電灯を片手に、真っ暗な山道を歩いていく。当然ながら山道に街灯なんか整備されているはずもない。普段から夜帰る時間には辺りが真っ暗になっているため、懐中電灯は必需品だった。

訓練施設を通り抜けた辺りで、宣言していたとおり、ヒバリさんから電話がかかってきた。

さっきの電話のあと、こっちから折り返し電話をかけてみたんだけど、電源を切っているようだった。

携帯電話から居場所がバレるのを怖れているのかもしれない。

電話に出ると、ヒバリさんはそのまま真っすぐ山道を進むようにと指示してきた。

「本当にひとりで来てるわよね？ もし嘘だったらどうなるかは、

わかってるわよね？」

「もちろんです。大丈夫、ぼくひとりですよ。ホトトギスを助けるヒーローが、姑息なマネなんてできません」

「ふふつ。そう言いながら、声に力がないじゃない？」

「……山道で疲れただけです」

「ま、そういうことにおきましようか。それじゃ、電話はこれで終わり。かなり細い道だけど、まっすぐ進めばわかるはずだから」

何度か言葉をやり取りしたあと、今回も唐突にヒバリさんから通話を切る。

道なのかどうかわからない、うっそうと茂る草むらをかき分けるようにしながら、ぼくはしっかりと足を踏みしめて歩いていく。

やがて目の前には、ツタが一面に絡まり、周囲の草むらにも紛れてカモフラージュされたようにたたずむ、ホコリまみれの小屋が現れた。

小屋とはいっても、結構な大きさがある。ただ、かなり年季が入っているようで、今にも崩れそうなほどだった。

ツタに絡まれてわかりにくくはあったものの、ドアがついているのは見て取れる。

建物なのだから、入り口があるのは当たり前だろうけど。

ぼくは慎重にドアへと歩み寄る。

辺りは真っ暗闇だ。ひっそりと静まり返っている。

今にも外れてしまいそうなドアに、ぼくはおそるおそる手をかけた。

ギーーーーー……。

ドアはきしんだ音を響かせながらも、抵抗なく開いていく。

小屋の中も、外と同様、真っ暗だった。  
ぼくは真っ暗な部屋を懐中電灯で照らし出していく。  
と、小屋の奥側にある柱に、縛られている女の子の姿が浮かび上がった。

「ホトトギス！」

「ん~~~~~！」

それは、猿ぐつわをはめられて微かなうめき声しか出せない状態のホトトギスだった。

座った状態で柱に縛りつけられている彼女は、身動きもできなさそうだった。

ぼくは彼女のもとへと駆けつける。

そのとき。

来てくれたのねん！ 嬉しいだわさ！

……え？

ぼくは一瞬、なにが起こったのかわからなかった。

今、ホトトギスの声が、はっきりと聞こえたよう……。……。

でも彼女は猿ぐつわのせいで、まともに声を出せないはずでは……。

ぼくが困惑する中、突然辺りが強烈な光に包まれた。

いや、小屋の電気が点けられただけのようだ。暗闇に慣れたぼくの目には、まぶしすぎただけだった。

そして、

「よく来たわね、アトリくん。ちゃんとひとりで来たみたいね、安心したわ」

明るくなった小屋の中に、ヒバリさんの声が響き渡った。

ぼくに鋭い視線を向けているヒバリさんの横には、いつもどおり雷鳥さんも立っている。

それに、会社の他の人たちや見たこともない外国人まで、総勢十人以上がずらりと並んで、ぼくのほうに視線を向けていた。

彼らが全員、過激派グループということなのだろう。

中央に陣取り、腕を組んで声をかけてきたヒバリさん。

その様子からすると、ヒバリさんが過激派グループのリーダーだということなのだろうか？

でも、過激派グループというには、十人ちょっとというこの人数は少ないような気もする。

行動しやすいよう、少数精鋭での作戦に打って出たのかもしれない。

「ふふっ、アトリくん、罠だというのがわかっていても彼女を助けに来たその勇気は買っわ。だけど、勝算もなく行動するのは、愚か者のすることよ」

ヒバリさんが嘲笑を浮かべる。

ちよつと放任主義的なところはあるけど、いつも頼りになる上司の彼女。普段なら温かく向けられるヒバリさんの目線は今、背筋が凍るほどに冷たかった。

ぼくは、なにも言い返すことができず、ただ彼女を睨み返すのみ。

「反抗的な目つきね。仕事中にはそこまで鋭い目になったこと、ないんじゃない？ ふふっ、やっぱり愛しい人の前だと違うのかしら？」

「……ホトトギスを殺すなんて、そんなことは絶対にさせない！」  
面白がっているかのようなヒバリさんの言葉に、ぼくはどうにか言葉をしぼり出す。

しぼり出された声は、すぐに勢いを増し、最後には叫び声のようになっっていた。

「熱くなってるわね。そんなに彼女が大事？」

「当たり前です！ それに、ホトトギスが宇宙人だなんていう、根も葉もない理由で殺されてしまうのは、絶対に納得がいきません！」  
「根も葉もない……わけではない、ということとは、アトリくんのほうがよくわかってるんじゃないかな？」

ぼくの叫び声に横から割り込んできたのは、さっきまで黙って成り行きを見守っていた雷鳥さんだった。

普段は優しい笑みを向けてくれる彼のほうも、今は鋭い視線でぼくを睨みつけている。

「それは……」

雷鳥さんの言葉に、ぼくは声を詰まらせる。

ホトトギスがちょっと変わった女の子なのは確かだ。それは認める。

そんな彼女に惹かれたぼくも、かなりの変わり者なのかもしれないけど、それはこの際どうでもいい。

だけど、変わっているから宇宙人だ、というのはさすがに、突拍子もなさすぎる。

とはいえぼくも、彼女がどこに住んでいるのかとか、ご家族のこととかは知らない。

最初は家出少女かもしれないと思っていただけ、どうもそういうわけではなさそうだ。

連絡先は知らないものの、彼女とは頻繁に会うことができた。それ自体、偶然とは言いがたいことなのかもしれない。

会社側からなにも聞かされていなかったら、さすがに宇宙人だという考えには至らないだろうけど。

もしかしたら本当にそうなのかもしれない、と疑っている部分があったのも事実だ。

けどぼくは、彼女と会って楽しい時間を過ごせれば、それでいいと思っていた。

ホトトギスが宇宙人なのかなんて、ぼくには全然関係なかった。

「どっちにしても、宇宙人は危険な存在だから消してしまおうだなんで、そんな考え方自体、絶対に間違ってますよ!」

「侵略されてからでは、遅いんだよ?」

どうにか言葉を返すことができたぼくに、雷鳥さんはやっぱり落ち着いた声を向けてくる。

「でも、そうなるかもしれない、っていう憶測だけで殺してしまうなんて、どう考えても行き過ぎです!」

ぼくはそう叫びながらも、頭の中では別のことを考えていた。

以前、最初にレベル1の宇宙人警報が発令されたとき、小型の宇宙船が地球に飛来した可能性があるというのだから、それはあくまでも憶

測にすぎなかったはずだけど。

その後、会社側で調査した結果、ホトトギスが宇宙人だという結論に至ったという。

所長さんからそう聞かされたときには気にしなかったけど、考えてみると、いったいどんな調査からそんな結論に至ったというのだろうか？

不思議には思ったけど、今気にするべきは、そこではない。

ホトトギスは、そのとき飛来した宇宙船に乗っていたスパイだと考えられ、会社側から、とくにヒバリさんたち過激派からマークされていたと思われる。

泣かすなら、殺してしまえ、ホトトギス。

そう主張する過激派なら、わざわざこんな小屋に連れ去ってこなくても、いくらでも彼女を殺すチャンスがあったのではないだろうか。

雛森町や会社の中で殺すわけにはいかなかったとしても、例えば会社の外の森辺りであれば、実行できたはずだ。

なぜ彼女たちはそうしなかったのか？

ぼくは叫び始めた勢いに乗って、そう問い詰める。

「確かにおれたちの部隊は、彼女をマークしていたよ。でも、雛森町でキミと別れたあとの彼女を追ってみても、どういうわけか毎回見失ってしまった。それで追跡は諦めたんだ」

「ふふつ。だからこの小屋でいろいろと準備を進めていたのよ。宇宙人がいるとわかったあと、会社内ではいろいろな研究が進められていたわ。宇宙人に対抗する兵器なんかの開発もね。そして開発されたのが、地球人には影響が出ないけど、宇宙人の脳には影響を与えられる特殊な電波を出す装置だった」



雷鳥さんの言葉を引き継ぐように、ヒバリさんは語り始めた。

ホトトギスが雛森山に入ったことを知った過激派は、その装置を使用した。

その装置から放出された電波によって、予定どおりホトトギスは倒れた。

ただ、ぼくがそばにいて、すぐに会社の医務室に連れて行ってしまった。

人の多い時間帯にはなかなか手が出せないため、会議ということにして遅くなくても不自然さがないようにした。

長かったレベル2の警報が解除され、代休で人も少ない日が多かったのも、好都合だったと言える。

ともかくそうやって、彼女たちはホトトギスを捕らえ、そのままこの小屋まで連れてきたのだ。

「装置のあるこの小屋なら、安全なはずだからね。あとは実行するだけだった。……でも、さすがにわたしたちも鬼じゃない。最後にひとつ、彼女のお願いを聞いてあげることにしたのよ。せめてものはなむけとして……」

ヒバリさんはそう言うと、微かに唇の端をつり上げる。

「そうしたら、アトリくん、あなたに会いたってさ。ふふっ、おアツいことで」

と、ヒバリさんがスツと右手を上げた。

「お願いはもう、叶えてあげたからね。そろそろ終わりにしましょ」

カチヤリ。

数人の外国人たちが、懐から黒い物体を取り出して、こちらに向ける。

それは、拳銃だった。

「ふたりとも、仲よくあの世に行つてね。地球の未来のために」

「それじゃ、さようなら」

ヒバリさんが高々と掲げた右手を、ゆっくりと下ろす。  
と同時に放たれたのは、拳銃の弾ではなかった。

「え？ なに!？」

慌てた声が響く。

突然真っ白な煙が噴き上がったかと思うと、あっという間に部屋の中に充満してしまったのだ。

視界が、奪われる。

いや、視界が奪われただけではなかったようだ。

銃を構えていた外国人たちが、大きく咳き込み始めた。

これは 催涙ガス!？

ぼくは慌ててハンカチを取り出し、目と鼻を覆う。

さつき、煙はヒバリさんたちの足もとから噴き出してきたように見えた。

おそらく視界を奪うための煙幕と、催涙性の高いガス、二種類が噴き出していたのだろう。

ただ、部屋中に広がった煙幕のほうは、すでに消えかけているようだ。

ドン！ ダダダダダダダダ！

そのとき、小屋のドアが開かれ、複数の足音が響いた。ぼくは、おそろおそろ目を押さえていたハンカチをずらし、様子を確認する。

なにを言っているのかはわからなかったけど、焦った様子の外国人たちが咳まじりの叫び声を発している。

そして。

「あっ……!!」

入ってきたのは、見知った顔ぶれだった。

それは所長さんを筆頭に、セキレイやゆりかもめ、純さんを含む、会社の人たちだったのだ!

いや、それだけじゃない。どうやらその中には、警察官も数人いるようだ。

危険があると考えられる場所へと突撃してきたにしては少ない人数のような気もするけど、山の中を気づかれずに近づいてくる必要があったはずだから、仕方がなかったのかもしれない。

セキレイと純さんが真っ先に飛び込み、外国人たちの構えていた拳銃に蹴りを入れて弾き飛ばす。

警察官が周りを取り囲むように、咳き込んでいる過激派の人たちに迫る。

ゆりかもめは素早くホトトギスのもとへ駆けつけ、流れてきていた催涙ガスを吸ったのか涙目になっていた彼女を縛りつけるロープをほどく。

「ホトトギスさん、平気?」

「ごほっ、ごほっ……!! ふう、助かったわさ!」

猿ぐつわも外され、ホトトギスはようやく解放された安堵の声をこぼしていた。

一瞬にして、状況は変わった。

「おや？ テルリンはいないのかい？」

純さんのつぶやきが聞こえてくる。

その声はいつもどおりの軽い響きではあったけど、彼の表情からは真剣さが感じられた。

あれ？ そういえば、確かにテルリンの姿がない。

いったい彼女はどうなったのだろう？

もしかしたら、ヒバリさんたちがホトトギスを連れ去るときに、もう。。。

ぼくは大きく頭を左右に振り、不穏な考えを払い落とす。

と、そんなぼくにも声がかけられた。

「アトリくん、大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です！」

所長さんが、ぼくのすぐそばまで駆けつけてくる。

その穏やかな顔を見たぼくは、これで終わったんだと思い、安堵の息をついた。

辺りに充満していた煙は、もうすっかり消えていた。入り口のドアが開け放たれたことで、完全に霧散したのだろう。

「みなさん、もう終わりです。観念しなさい」

まだ目を押さえて咳き込んでいる過激派の人たちに向けて、所長

さんが降伏勧告の言葉を投げかける。  
でも。

「ふふっ……」

ヒバリさんが、笑い声を漏らした。

その顔には、余裕すら浮かんでいる。

所長さんたちや警察官に囲まれている絶体絶命ともいべき状況だというのに……。

これは、なにかあるに違いない。

彼女を取り囲む面々も、うかつに近づけなくなってしまった。

そんな中、不敵な笑みを浮かべながら、ヒバリさんは語り始めた。

「アトリくんがひとりでここまで来たとしても、所長さんには連絡が行っているはず。だから、増援が来るのは予想済みだったのよ」

落ち着き払った彼女。催涙弾にも素早く対応していたのか、咳き込んだり涙目になったりもししていないようだ。

ヒバリさんの隣では、雷鳥さんも同じように鋭い視線を巡らせながら身構え、取り囲むセキレイたちを牽制していた。

ただ増援が来るのを予想していたということは、最初から、所長さんを含めておびき出すのが彼女たちの目的だったということなのだろうか？

「ふふっ、そうよ。わたしたちの計画をことごとく邪魔してくる所長さんは、各国にいる過激派の人たちも煙たく思っていた。だからホトトギスさんと一緒にまとめて処理してしまうことに決まったのよ」

そう決まった、ということとは、ヒバリさんだけの意思ではなかった、ということだ。

きつと彼女の上には黒幕ともいうべき、過激派グループの上役がいるのだろう。

「ホトトギスさんを処分するにはアトリくんが邪魔だったけど、アトリくんを処分するのはさすがにためらったわ。それでどうにか、ホトトギスさんがひとりになるように仕向けたってわけ」

ヒバリさんはぼくを、いつもの温かな瞳で見つめる。

直属の上司として一緒に頑張ってきた彼女の瞳が微かに潤んでいるように見えたのは、催涙ガスのせいだけではなかったのかもしれない。

「本当ならそのあと、所長さん呼び出すはずだったのよ。……結局ホトトギスさんのわがままで、こうしてアトリくんにも心中してもらったことになってしまったけどね」

彼女は落ち着いた声のままだった。とはいえその顔からは、今回の件に満足していない様子がかかる。

最後にひとつ、ホトトギスの願いを叶える。それを指示したのも過激派の上役の人で、ヒバリさんの意思は考慮されなかった、という事なのかもしれない。

こうやって彼女が語っているうちに、どうにかしてしまえばいいだろうか。

そんな考えがよぎったに違いない。警察官たちが微かに動きを見せようとする。

と、それを制するかのように、ヒバリさんが一步前に出た。

そして、

「それじゃあ、出てきなさい！　ひとり残らず、捕まえるのよ！」

パチンと指を鳴らすと、ひときわ大きく声を響かせた。



.....  
.....  
.....

ヒバリさんの声が響いてから、一分弱だろうか。

緊迫した空気が流れる中、勝ち誇ったようなヒバリさんの笑みが、  
徐々に歪んでいく。

なにも.....起こらなかった。

「ど.....どうしたの！？ 早く、出てきなさい！」

焦りをありありと浮かべた顔で、指を何度もパチンパチンと鳴ら  
すヒバリさんの声。

でもそれに応えてなにかが出てくるような気配は、いくら経って  
もまったくなかった。

「どうしました？」

余裕の表情で落ち着いた声を向けたのは、所長さんのほうだった。

「そうそう、言い忘れていましたが、外で待機していた部隊なら制  
圧しましたよ」

ニヤリ。

微笑みを浮かべながら、所長さんは続けてそう言い放った。

ドアの外には、警察官によって取り押さえられた外国人たちの姿

が見える。

小屋の中に突撃してきた警察官が少なめだったのは、外に回る部隊と二手に分かれたからだだったようだ。

「な……………!？」

ヒバリさんは言葉を失う。

隣の雷鳥さんも、表情に出さないよう懸命になっているようだけど、明らかに動揺しているのが見て取れた。

これで本当に、終わりだろう。

それにしても手際がよすぎる。

ホトトギスがさらわれたという結論に至ってから、ぼくがヒバリさんの電話を受けてここに向かうまで、それほど長い時間がかかっていたわけではない。長く見積もったとしても、おそらく二〜三時間程度ではないだろうか。

それなのに警察官まで手配していたなんて。

「用意周到ですね、所長さん……。もしかして、最初から全部わかってたんじゃ……………?」

ふっふっふ。

ぼくの言葉に、所長さんはただ笑い声を返すだけだった。

「さあ、今度こそ、観念しなさい」

「くっ……………」

小さくつめき声を発して、焦りの表情を隠そうともしないヒバリさん。

「もう終わり、ということだね……。ならば……」  
「そうね、仕方がないわ」

雷鳥さんの諦めたような声に、ヒバリさんも顔を返す。  
本当に、これで終わりなんだ。  
そう安心しきっていた、そのときだった。

「動かないで！」

突然、ヒバリさんが大声を張り上げる。  
その手に握られていたのは。

「手榴弾！？」

ぼくは思わず叫んでいた。  
一瞬にして緊張が辺りの空気を覆い尽くす。

「それも、特別製の広範囲型よ！ こっちの目的は、ホトトギスさんを殺すこと！ このまま心中したって構わないわ！ 最終手段として、そう指示されていたのよ！」

そう言いながらも、彼女の顔には大量の汗が浮かび、その声は微かに震えていた。

ヒバリさんでも、死ぬのは怖いのだ。

当然だろう。

過激派組織の上役からはそう指示されていたようだけど、それはあくまでも最終手段。

もちろんそんな手を使うことなく任務を遂行するつもりで、この場に臨んだはずだ。

でも、すべての計画は阻止され、退路を断たれてしまった。だから彼女も、それを望んでいるわけではない。それでもぼくたちは、動くに動けなかった。

おそらく彼女はまだ迷っている。

とはいえ、最終手段を使わざるを得ない状況に追い込んだのは、紛れもなくぼくたちだ。

ヒバリさんは右手で手榴弾を握り、左手の人差し指を手榴弾のピンにかけていた。下手に動けば、すぐにでもピンを引き抜き、手榴弾を投げつけてくるだろう。

使命に忠実な彼女の性格を考えれば、内心では迷っていても、完全にあとがない状況では任務を遂行する道を選ぶに違いない。

汗が頬を伝って地面に落ちる。

誰も、身動きが取れなかった。

と、いきなりまばゆい光が、小屋の中すべてを照らし出す。

!?

まぶたに手をかざしながら、ぼくは反射的にその光の発生源へと目を向けていた。

そこにあったのは。

全身から神々しいばかりの光を放つ、ホトトギスの姿だった。

.....  
.....  
.....

ヒバリさんの声が響いてから、一分弱だろうか。

緊迫した空気が流れる中、勝ち誇ったようなヒバリさんの笑みが、徐々に歪んでいく。

なにも.....起こらなかった。

「ど.....どうしたの！？ 早く、出てきなさい！」

焦りをありありと浮かべた顔で、指を何度もパチンパチンと鳴らすヒバリさんの声。

でもそれに応えてなにかが出てくるような気配は、いくら経ってもまったくなかった。

「どうしました？」

余裕の表情で落ち着いた声を向けたのは、所長さんのほうだった。

「そうそう、言い忘れていましたが、外で待機していた部隊なら制圧しましたよ」

ニヤリ。

微笑みを浮かべながら、所長さんは続けてそう言い放った。

ドアの外には、警察官によって取り押さえられた外国人たちの姿

が見える。

小屋の中に突撃してきた警察官が少なめだったのは、外に回る部隊と二手に分かれたからだだったようだ。

「な……………!？」

ヒバリさんは言葉を失う。

隣の雷鳥さんも、表情に出さないよう懸命になっているようだけど、明らかに動揺しているのが見て取れた。

これで本当に、終わりだろう。

それにしても手際がよすぎる。

ホトトギスがさらわれたという結論に至ってから、ぼくがヒバリさんの電話を受けてここに向かうまで、それほど長い時間がかかっていたわけではない。長く見積もったとしても、おそらく二〜三時間程度ではないだろうか。

それなのに警察官まで手配していたなんて。

「用意周到ですね、所長さん……。もしかして、最初から全部わかってたんじゃ……………?」

ふっふっふ。

ぼくの言葉に、所長さんはただ笑い声を返すだけだった。

「さあ、今度こそ、観念しなさい」

「くっ……………」

小さくつめき声を発して、焦りの表情を隠そうともしないヒバリさん。

「もう終わり、ということだね……。ならば……」  
「そうね、仕方がないわ」

雷鳥さんの諦めたような声に、ヒバリさんも顔を返す。  
本当に、これで終わりなんだ。  
そう安心しきっていた、そのときだった。

「動かないで！」

突然、ヒバリさんが大声を張り上げる。  
その手に握られていたのは。

「手榴弾！？」

ぼくは思わず叫んでいた。  
一瞬にして緊張が辺りの空気を覆い尽くす。

「それも、特別製の広範囲型よ！ こっちの目的は、ホトトギスさんを殺すこと！ このまま心中したって構わないわ！ 最終手段として、そう指示されていたのよ！」

そう言いながらも、彼女の顔には大量の汗が浮かび、その声は微かに震えていた。

ヒバリさんでも、死ぬのは怖いのだ。

当然だろう。

過激派組織の上役からはそう指示されていたようだけど、それはあくまでも最終手段。

もちろんそんな手を使うことなく任務を遂行するつもりで、この場に臨んだはずだ。

でも、すべての計画は阻止され、退路を断たれてしまった。だから彼女も、それを望んでいるわけではない。それでもぼくたちは、動くに動けなかった。

おそらく彼女はまだ迷っている。

とはいえ、最終手段を使わざるを得ない状況に追い込んだのは、紛れもなくぼくたちだ。

ヒバリさんは右手で手榴弾を握り、左手の人差し指を手榴弾のピンにかけていた。下手に動けば、すぐにでもピンを引き抜き、手榴弾を投げつけてくるだろう。

使命に忠実な彼女の性格を考えれば、内心では迷っていても、完全にあとがない状況では任務を遂行する道を選ぶに違いない。

汗が頬を伝って地面に落ちる。

誰も、身動きが取れなかった。

と、いきなりまばゆい光が、小屋の中すべてを照らし出す。

!?

まぶたに手をかざしながら、ぼくは反射的にその光の発生源へと目を向けていた。

そこにあったのは。

全身から神々しいばかりの光を放つ、ホトトギスの姿だった。



「ホトトギスさん……?」

まぶしさに目を細めながらも、ゆりかもめがつぶやきを漏らす。  
ホトトギスはその全身をまばゆく発光させながら、一步一步、ヒバリさんに詰め寄っていく。

「な……なんなのよ、あなた!？」

焦って上ずった声を向けてくる彼女にも、ホトトギスは黙ったまま。

明らかに、普通じゃない。

ホトトギスは本当に宇宙人なのだろうか？ それとも物の怪や妖怪の類なのだろうか？ はたまた、妖精とか精霊とか……。

どうであれ、彼女がヒトならざるものであるのは、間違いなかった。

ぼくは、混乱もあったけど、落胆する思いのほづが強かったかもしれない。

ホトトギスが普通の人間じゃないことは、ある程度覚悟していた。でも、やっぱりそんなはずはない、彼女は普通の女の子だ、そう望んでいた部分のほづが大きかったのだ。

その望みは、完全に絶たれた。

「ちょっと……来ないでよ!」

ぼくの苦悩に気づくはずもないホトトギスは、なおもヒバリさんに歩み寄っていた。

ヒバリさんは焦りを通り越し、恐怖に青ざめた顔で震える声をしぼり出す。

次の瞬間、

「来るな~~~~~!!」

彼女の指はピンを引き抜き、そして右手につかんでいた手榴弾を、  
ホトトギスに向かって投げつけた！

もう、すぐ目の前にまで迫っていたホトトギスは、すつと左手を上げる。

彼女は難なく手榴弾をキャッチした。  
そして、

ピカッ！

小さく光ったかと思うと、ホトトギスの左手に握られた手榴弾は、

サラサラサラ……。

乾いた音だけを残して、爆発することもなく砂と化し、床に散らばっていった。

「もうやめなさい」

ホトトギスはヒバリさんに語りかける。

彼女の声は、普段のちよつと変わってるけど可愛らしい喋り方は全然違った、神々しい響きすら持った声だった。

「あなたにあちきを殺すことなんて、できないのだから」

喋り方こそ違うものの、いつもながらの「あちき」という一人称に、ぼくの心にはなんとなく安堵の色が広がる。

怯えるヒバリさん。

隣に控えていた雷鳥さんが彼女を庇い、自分の体をふたりのあいだに割り込ませる。

いつも落ち着いている雷鳥さんとはいえ、この状況はさすがに想定外だったからだろう、その身は小刻みに震えていた。

雷鳥さんはいつでもヒバリさんを支えてきた。

目の前で起こった現象に怯えながらも 自分たちにも手榴弾と同じような未来が待ち受けていると想像しながらも、彼はヒバリさんを守るうとしてしているのだ。

ホトトギスは手榴弾を砂に変えた左手を伸ばす。

ゆっくりと伸びていく左手を睨み返しながらも、雷鳥さんはまったく目を逸らす気配がない。

そんな雷鳥さんの背後に守られているヒバリさんは、今にも泣き出しそうなほどの恐怖に包まれているようだった。

おそらく伸ばされたホトトギスの手が触れた瞬間、雷鳥さんもヒバリさんもさっきの手榴弾のように。

「ホトトギス、やめて！」

ぼくは思わず叫んでいた。

ゆっくりと首をこちらに向けるホトトギス。

微かに首をかしげる彼女には、ぼくがなにを言っているのか、まったくわからないといった様子だった。

「確かに今回のことは、ひどいことだと思う。ホトトギスを殺そう

としたわけだし。それはぼくも許せない。でも……」

ぼくは言いながら、グツとこぶしに力を込める。

「でも、そんな人たちでも、ぼくの大切な上司なんだ。未遂で終わったんだから、もうこのくらいで許してあげてくれないかな？」

力強く懇願する声に、ホトトギスは動きを止める。

ヒバリさんや雷鳥さんも目を丸くし、こちらに呆然とした目を向けていた。

いやそれは、その他の外国人や警察官たち、セキレイや純さんを含めた会社の人たちも同じだった。

ぼく本人と、そして所長さんの、ただふたりを除いて……。

懇願を受けた張本人であるホトトギスはじつとぼくを見つめ返し、しばらくなにか考えているようだったけど、やがて口を開いてこう言った。

「……うん、わかったわさ」

ヒバリさんと雷鳥さんが崩れ落ちるように屈み込むと、過激派の他の人たちも観念したようだった。

素早く警察官が身柄を確保、ヒバリさんたちは連れていかれた。

彼女たちがどうなるのか、ぼくにはわからない。

宇宙人のことは公表できないはずだから、表沙汰にはならないと思っけど……。

そんな不安を感じ取ってくれたのだろう、所長さんがポンとぼくの肩に手を置くと、優しく話しかけてきた。

「大丈夫ですよ。会社としても有能なおふたりには戻ってきてもらいたいと考えるはずです。政府にもつながりがありますし、どうか穏便に済ませてもらえenと思います」

「……はい、ぼくもそう思います。ヒバリさんに指示を出していた黒幕は、別にいるはずですし」

ぼくの答えに、所長さんはいつもの穏やかな笑顔で頷き返してくれた。

「ふう、まいったまいった」

小屋の奥から、テルリンが純さんに連れられて歩いてきた。

どうやら過激派によってホトトギスともどもさらわれて、奥の部屋に縛られていたようだ。

警察官たちはすでにいない。

残っているのは、過激派側ではない会社のメンバーだけだった。

純さんに支えられながらのテルリンも含め、残った全員が落ち着いてひと息ついたところで、所長さんが一步前に歩み出る。そしていつもどおりの穏やかな声で、語り始めた。

「実はわたしは、ずっと昔から地球に忍び込んでいた宇宙人なんですよ」

最初からいきなり衝撃の告白だった。でも、衝撃の告白はそれだけでは終わらなかった。

所長さんは昔から地球に忍び込んでいた宇宙人で、ホトトギスはその娘なのだという。

所長さんの奥さんは地球人。つまり、ホトトギスは宇宙人と地球人のハーフということになる。

奥さんは今も、宇宙空間から地球を観測している宇宙船の中にいる。

その宇宙船は地球から少し離れた場所に留まり、ずっと昔から観測し続けていた。

目的は地球侵略。そのタイミングを計るための調査が、続けられていたのだ。

そして娘であるホトトギスもそこにいた。

もともと所長さんはスパイとして地球に忍び込んでいたらしい。そのあいだに地球人の女性と恋に落ち、ホトトギスが生まれた。

所長さんはスパイとして地球に忍び込んではいたけど、地球人の女性を愛し、考え方を変えていた。

侵略なんて、してはいけない。

そのため所長さんは、愛する奥さんに提案した。娘と一緒に宇宙船へ行ってくれないかと。

奥さんはそれを、快く受け入れた。

表向きは地球人の捕虜として宇宙船に連れていく、ということでの仲間の宇宙人には話をつけていた。

もちろん、捕虜だからといってぞんざいに扱ってはいけないと念を押して。

地球人の能力は自分たちよりずっと上だから、もしぞんざいに扱おうものなら、怒った地球人が大量に押し寄せて宇宙船を破壊してしまうだろう。

所長さんはそう警告していた。

奥さんを宇宙船に行かせたのは、宇宙船内の状況も詳しく知りたかったからだだったらしい。

所長さんの立場はそれなりに上ではあったものの、宇宙船の中にも派閥があり、自分を快く思っていない集団もいた。

だから宇宙船からの通信を鵜呑みにはできなかった。

そこで奥さんを宇宙船で生活させ、逐一状況を伝えてもらっていたのだ。

その通信手段については、あとで説明するとして……。

所長さんは地球の調査を続けていた。上手く友好関係を結ぶ手段を見つけるために。

地球人たちには、すでに宇宙人に見つかっていることを知られなくなかった。

そのために考え出したのが、地球をくすんだ色に変えてカモフラージュする、リバーシブル・アース計画だった。

リバーシブル・アースに使われる神素は、実は所長さんたち宇宙人が作り出したものだったのだという。

神素の「神」は、所長の名字、神仙寺の「神」だったのだ。もつとも、所長たち宇宙人の文化には、名字という概念はない。それは、彼の奥さんの名字だった。

宇宙をさまよって住みよい惑星を探し回っているような宇宙人の部隊は、所長さんたちの他にも多数存在しているらしい。

それらの宇宙人に地球を横取りされないためにも、リバーシブル・アースは有効だった。

所長さんは調査にもつと長い時間をかけるつもりだったようだけど、娘であるホトトギスが突然地球に乗り込んできたせいで、結論を早める必要に迫られた。

少し前に、所長さんたちとは別の宇宙人部隊が地球に接近したことがあった。レベル1の宇宙人警報が出たあと、すぐに解除されたあのとときだ。

そのどさくさに紛れて、ホトトギスは乗り込んできていた。彼女が乗ってきた宇宙船は、所長さんが隕石だったと情報进行操作してごまかした。

ちなみにホトトギスが地球に来た目的は、「お母さんの故郷を見てみたかったから」だったらしい。

それから所長さんは自ら、ホトトギスが宇宙人だということを広めた。

宇宙人が忍び込んでいるという話をして、様子を見るのが目的だった。

ホトトギスが来てしまったことで、宇宙船からの監視も強化されたはずだ。その考えはのちに、奥さんとの通信で正しかったことがわかる。



ともかく所長さんとしても、これ以上調査を長引かせていられる余裕はなくなつた。

調査を長引かせているのが、侵略をやめさせるためだと悟られてしまふ可能性が高かつたからだ。

地球の未来は、キミにかかっている。

その頃、所長さんはぼくにそう言っていた。その言葉は、本当に真実だつたのだ。

長かつたレベル2の宇宙人警報は、所長さんが奥さんのいる宇宙船を地球に近づかせるように仕向けたというのが原因だった。

地球の状況を頻繁に、より正確に伝えたいから、というふう宇宙船側には報告をしていた。

だけど本当の理由は、奥さんと連絡を取るためだった。

所長さんには実はテレパシー能力があるのだという。ただ、ある程度近づかないと届かない。

そのために、宇宙船を地球に近づける必要があつたのだ。

テレパシーが有効なのは、心が通じ合っている相手のみ。最初は一方通行で相手の心が読めるだけというその能力も、心が通じ合つていくうちに双方向の意思疎通が可能なテレパシーとなる。

そしてその能力は、ホトトギスにも受け継がれていた。

だからさつき、縛られて猿ぐつわをはめたままのホトトギスの声が聞こえたのか。

ぼくはそう考えながら、ホトトギスに視線を向けた。

でもそうすると、つまりぼくたちは心が通じ合っている状態、と

いうことになる。

彼女に視線を向けると彼女も見つめ返してくれたけど、なんだか恥ずかしくなってきたぼくは、すぐに目を逸らしてしまった。

ぼくとホトトギスのそんなアイコンタクト（？）のあいだにも、所長さんの話は続いていた。

心が通じ合っていればテレパシーは通じる。

だから恋人ほどではないものの、親子でもテレパシーは通じるものらしい。

地球に忍び込んだホトトギスと所長さんは、テレパシーで連絡を取っていた。

そのおかげで所長さんは、この小屋の状況が手に取るようにわかっていたのだという。

ホトトギスがさらわれたことをぼくが知ったとき、所長さんは止めたけど、無駄だというのはわかっていた。

ぼくをひとりでこの小屋へ向かわせ、そのあいだにあらかじめ連絡をつけていたみんな　ゆりかもめやセキレイ、純さんたちといった会社の人と、さらには警察にも来てもらった。

そして、目的地がわかっている所長さんたちは、ぼくを追いかけってきた。

明かりを点けるわけにもいかないから、暗視スコープまで手配していたという用意周到ぶり。

こうして所長さんたち一行は小屋を包囲し、外に待機していた部隊を制圧、タイミングを見計らって中に踏み込んだのだ。

「本当にホトトギスが殺されてしまう危険がないわけではなかったのですが、彼女自身が任せてほしいとテレパシーで言ってきたので

ね。ここは娘を信じることにしたのですよ」

「んみゆ。完璧にあちきの狙いどおりになったただわさ！」

「……いろいろと危険だったと思いますかね」

そうやって言葉を交わす所長さんとホトトギスは、普通の地球人の親子となにも変わらない、ほのぼのとした雰囲気を漂わせていた。

そのあとぼくたちは、とりあえず会社に戻った。

ホトトギスは雛森町で生活していたとき、夜は公園で寝泊りしていたようだ。

とはいっても、人間には見られないようにカモフラージュする能力があるらしく、危険ではなかったという。

春先ではあるけど夜はまだ涼しいことも多いのでは。

そうも思ったのだけど、暑さも寒さも、人間よりは我慢できる身体構造になっているらしい。

だからといって、それを知った今、彼女をひとりで帰すわけにもいかない。

というわけで、彼女はぼくと一緒に暮らすことになった。

狭いとはいえ、社員寮に住む誰かの部屋に泊まらせてあげればいいのに、と思わなくもなかったのだけだ。

ホトトギス本人が、ぼくと一緒にいいと言い出したのだ。

そりゃあぼくとしても、もちろん嫌ではないのだけだ。

でも、その、つまりは同棲ってことになるわけだし、心の準備が……。

などという戸惑いが、ホトトギスに伝わるわけもなく。

「あちきを泊めるだわさ！」

という命令に、ぼくは従うしかなかった。

それを聞いても所長さんはいつもどおりの笑顔。

これは父親公認ってこと？  
なんて考えて、さらに顔を赤らめるほくだった。

ホトトギスと一緒に暮らし始めると、どういっわけか彼女も一緒に通勤するようになっていた。

べつに社員になったわけではないのだけど、バイト扱いとして所長さんのもとで働かせることにしたらしい。

「アトリ、大好きだわさ！」

ベタベタベタ。

ホトトギスは周りに人がいてもお構いなしに、ベタベタとくっついてくるようになっていた。

父親である所長さんがいる前でも、彼女はまったく気にする様子はない。

こっちが気にするっての。

それに、なんだか痛い視線も感じるし。……主に、ゆりかもめのほうから。

「ふん、なにさ。アトリってば、鼻の下伸ばしちゃって。いやらしいんだから」

「ちよっと、ゆりかもめ。なんだよ、それ？ べつにぼくは……」

なんて反論するも、すりすりとはととギスがくっついてきている

状況では、説得力がなさすぎだった。

「うー、アトリの超絶おバカ！ あんたなんか、ホトトギスさんと一緒に地球を出ていけばいいのよーう！」

「国外追放どころか、地球から追放！？」

どうしてぼくは、ゆりかもめからここまで邪険に扱われなきゃならないのだろう。

「納得がいかないって顔してるな。でも、周りで見てるほうからしてみたら、丸わかりなんだからな？」

セキレイがなんとなく睨みつけるような視線を向けながら、そう言い放った。

「丸わかりって、なにがだよー！？」

ぼくにはなにがなんだか、サツパリわからない。

周囲の視線は、どういうわけだか生温かい感じだった。

それはともかく。

ベタベタとくっついてくるホトトギスとぼくは、こうしてほとんどの時間を一緒に過ごすことになっていた。

とはいえそれも、数日のあいだだけでしかなかったのだけど。

ヒバリさんと雷鳥さんはまだ戻ってきていない。

所長さんは近いうちに戻ってくるはずだと言っていたけど、それがいつになるかは聞いていない。

ぼくは第三十八対策執行部で、ゆりかもめとセキレイ、そして所長さんとホトトギスと一緒に働く日々。

そう、どういいうわけかホトトギスはぼくたちと同じ部署に席を設けられ、さらには所長さんもずっと居座っていた。

ホトトギスは仕事中でもベタベタくっついてくる。

それに反応して、ゆりかもめがぼくを睨みつける。

さらにはホトトギスの父親である所長さんの笑顔も、なんとなく居心地の悪さを感じるといふか、監視されているような気がして、仕事が手につかなかった。

もつとも、今のぼくたちには、大して仕事なんてないのだけど。

そんな、ある意味のんびりとした生活を続けていたある日、所長さんがこう切り出した。

「アトリくん。しばらくのあいだ、ホトトギスとお別れということになりそうです」

「……え？」

「あちき、お父さんと一緒に、一旦宇宙船に戻るんだわさ」

目を丸くするぼくに、ホトトギスがいつもどおりベタベタくっつきながら言った。

「えええ!？」

どうして突然そんなことになったのか、ぼくは驚きを隠せなかった。

というよりも、ホトトギスと離れるのが、嫌だったのだ。

ぼくの気持ちを察してくれたのだらう、所長さんが説明を加えてくれる。

ホトトギスが地球に来たことで、宇宙船側の地球観測が熱を帯びてきていた。

所長さんは侵略させないよう、リバーシブル・アースに関わってきたけど、それももう限界だった。

だから直接宇宙船まで出向いて、説得したいと考えているのだという。

「それに、妻とも会いたいしね」

微かに頬を染めながら、遠い目をする所長さん。

考えてみれば、所長さんはずっと昔からこの地球にいたと言っていた。

奥さんは生まれたばかりのホトトギスを連れて宇宙船に向かったらしい。ということは、所長さんは何年も奥さんと会っていないということになる。

「で、せっかくだから、あちきも一旦戻ることにしたんだわさ。アトリのことをお母さんに報告して、ちゃんと認めてもらってくるだわよー!」

元気いっばいに笑顔を向けてくるホトトギス。

そんな顔を見せられたら、離れるのは嫌だなんて、わがままなことは言えなくなってしまう。

「大丈夫、あちきとアトリは、テレパシーで会話できるだわさ!」

そのあと、所長さんとホトトギスは、すぐに宇宙へ向けて旅立つ



ていった。

こうしてぼくとホトトギスの、超長距離恋愛がスタートしたのだ  
った。

「お母さん、とつても喜んでただわさ！ もう両親公認だわよ！」  
「あはは……。嬉しいけど、でもちよつと、恥ずかしいな……」

ぼくとホトトギスは、テレパシーを使って会話をするのが日課となっていた。

テレパシーを届かせるためには、宇宙船が近づかなければならぬ、なんて言っていたはずだけど。

ぼくたちはなんの問題もなく、テレパシーで会話を交わすことができた。

それはどうやら、ぼくとホトトギスの心が深く通じ合っているかららしい。

つまり相性抜群ということだと、所長さんは冷やかしまじりに言っていた。

ちよつと恥ずかしいけど、離れていてもこうしてホトトギスと話せるのは嬉しいことだった。

それにテレパシーでの会話だと、食事をたかられることも、食べているものを豪快に吹き出したりなんてこともないし。

なんて考えていたら。

「ちよつとアトリ、なんか失礼なこと考えてないかや!？」

怒りを含んだホトトギスの声が頭の中に響いてきた。

考えたことが勝手に伝わるといふのは、ときにはとっても不便だったりもするもので。

なにか失礼なこと、なんて言うてはいるけど、彼女には完全に伝

わっているはずだ。

「う……えっと、あははは、地球に戻ってきたらまた、いつもの食堂で一緒に食べようね」

「テレパシーじゃ、ごまかしてるのバレバレだわさ。ま、いいけどねん」

彼女はそう言ってひと呼吸置くと、よりいっそう強い想いを伝えてきた。

「あちきはアトリのこと、なにもかも全部含めて、大好きだわさ！」

頭の中に直接伝わってくる彼女の声に、ぼくは顔を真っ赤に染める。

「もう、またホトトギスさんと話してるのね」

隣の席では、ゆりかもめがため息をついていた。

うんやっぱり、仕事中はテレパシー会話を控えるべきかもしれないな。

「かもしれない、じゃなくて、控えろって」

セキレイからもツッコミが入った。

……って、どうしてセキレイにまで、ぼくが思ったことが伝わってるんだ!?

ま、まさか、セキレイとも激しく心が通じ合ってる!?

「アホなこと考えてるんじゃない！ お前さつきから、全部口に出して喋ってるんだよ！」

容赦ない平手打ちをぼくの頭に繰り出しながら、セキレイは叫ぶ。むっ、テレパシー慣れすると、そういう弊害もあるみたいだ……。

「だからアトリ、それも言葉にしてるってば……」

再びため息をつく、ゆりかもめだった。

「あはは、そっちはそっちで、楽しくやってるみたいだね。あちきが帰るまで、寂しいだろうけど我慢して待つてねん！」

「ホトトギスはよくそんなこと、恥ずかしげもなく言えるね」

「そんなに褒めちゃイヤン、だわさ！」

「……べつに褒めてないけど……」

結局、テレパシー会話を続けるぼくとホトトギス。

いくら上司がいない状況だからって、こんなことを続けていたら会社から解雇されてしまうかもしれない。

そう思いながらも、つつい会話してしまうのだけ。

と、そんなぼくとホトトギスの会話に、突然別の声が割り込んできた。

「アトリくん、ちょっと話したいことがあります。いいですか？」

「しょ……所長さん！ どうしてテレパシーが伝わるんですか！？」

ぼくたち、恋人でも親子でもないのに！」

「いやいや、じきに親子になるでしょう？ 先行投資という感じがすよ」

「なんですか、それは！ 意味がわかりません！」

「あっはっは、さっきのはさすがに冗談ですけどね。ホトトギスの肩に手を乗せて、テレパシーに乗っかっている状態なんですよ」

「そんなことまでできるんですか……。結構便利かも……」

「誰でもできるわけではないですけどね。それはともかく、とりあえず近況報告を」

所長さんは急に真面目な声になって、こう語りかけてきた。

「いつになるかはわかりませんが、なるべく早いうちに、こちら側は説得するつもりです。それが無事終わったら、わたし自身はこのまま宇宙船に残りますが、ホトトギスは地球に帰そうと思います。……アトリくん、娘をよろしく頼みますよ」

「……はい」

所長さんの言葉に、ぼくは見えないとわかっていながらも大きく頷き、固い決意を返す。

「それまでもし浮気などしようものなら、地球は滅亡すると思っておいてくださいね。信じていますよ」

微かな笑い声を交えながら、所長さんはそう言い放つ。

でもこの人の場合、実際にそれができる立場にいるのだ。

冗談だと笑い飛ばせることではなかった。

「あははは、気をつけます……」

答えながら、ぼくの頬を伝って冷や汗がひと筋、流れ落ちていく。どうやら地球の運命は、ぼくひとりの肩にかかっているようだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4306y/>

---

リバーシブル・アース

2011年11月14日13時20分発行